

炎の憑依者も異世界から来るそうですよ？

夜明けの月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一般的な生活をしていた神野司。そんな彼の元にある一枚の手紙が届く。

そこには世にも奇妙なことが記されており、気付いた時には異世界にいた。

これは、そんな彼が繰り広げる箱庭ライフである。

※これはリメイク版です。多少の変更点がありますので、ご了承ください。

# 目次

第1章 問題児達が異世界に呼ばれたそ うですよ？	
異世界に召喚されたようですよ？	1
異世界の生活に胸を躍らせるようですよ？	8
喧嘩を売るようですよ？	17
ギフト鑑定だそうですよ？	28
ギフト説明、そして本拠到着のよう ですよ？	39
	51

癒しの楽園（大浴場）で疲れを取るそ うですよ？	65
外道とのギフトゲーム開始だそうです よ？	73
正体不明と規格外？達だそうですよ？	86
正体不明は天井知らずだそうですよ？	93
ギフトゲームのその後らしいですよ？	105
後輩が少し本気を出すそうですよ？	114
規格外達が殴り込みに行くそうですよ	

? | 131

交渉決裂だそうですね? | 141

何があっても問題児達はいつも通りだ

そうですね? | 150

ゲーム開始はやはりカオスになってし

まうそうですね? | 164

そしてゲームは終わりを迎える、そう

ですよ? | 188

ゲーム後は決まって日常編、だそうで

すよ? | 212

第2章 魔王襲来のお知らせのようです

よ?

問題児達が祭りに行くそうですね?

前編 | 225

問題児達が祭りに行くそうですね?

後編 | 238

逃走者達の束の間の安らぎだそうですね?

よ? | 252

# 第1章 問題児達が異世界に呼ばれたそうですよ？ 異世界に召喚されたようですよ？

「おー、桜満開じゃねえか」

春一番に吹かれながら河川敷を歩く少年、かみのつかさ神野司が目の前の満開の桜を見て簡単の声を上げた。

舞い散る桜の花びらを身体中に受けつつ歩みを進めていく。

「……………眠い」

春の心地よい日差しと暖かい風に吹かれて眠気が誘発される。日頃、睡眠を十分にとっている司でさえそれには抗えなかった。

司は河川敷に生い茂っている芝生の上に寝転がり、眠そうに欠伸をする。

「少し寝るか」

そう呟いて目を閉じる。現在、ここには人つ子一人おらず、閑散としていた。そのため、司は大胆にもこうして寝ようとしているのだ。司は、人がいるのに寝転がるような非常識な人ではない。かといって、出来た人間でもないが。

「あ……………平和だ」

心底リラックスしているのか、気持ち良さそうな顔で呟く。

司の意識が微睡みの中に埋もれ、睡魔に身を任せて本格的に寝ようとしていた時だった。

パサリ、と司の顔に何か落ちてきた。

「んあ？」

司は顔に被さった物を手で持ち上げ、上体を起こす。

落ちてきた物を確認すると、それは封書だった。表には何も書かれておらず、裏に達筆な字で『神野司様』と書かれてあった。

「これは……俺宛？ 一体誰から」

司は入念に封書を確認するが、司の氏名以外は何も書かれていなかった。

訝しそうにどこかから落ちてきたであろう封書を見ながら、司は首を傾げる。

「これはなんだ、気になるなら中身を見ろってことか？」

うん、そうに違いないと結論付けて封書の封を切った。

だが、それが新たな世界への入り口だと、司は知らない。

封を開けて出てきたのは一枚の紙だった。そこには、世にも奇妙な文章が書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの“箱庭”に來られたし』

「あ？どういふ事だこれ」

意味不明な文面に顔を顰める司。誰でもこんな文面の手紙がいきなり送りつけられでもしたら、司みたいな反応をするだろう。

司は何かあるとは思っていたが、全く何も起きないため溜息をつけてその手紙を放り投げようとしていた。

川に向かって手紙を投げようとしたその瞬間、手紙から眩い光が放たれる。

「な、なんだ!？」

突然の事に狼狽える司。その光は衰える事なく、徐々に強さを増していく。そして司の視界を眩い白色で染め上げる。

光が収まった時には、河川敷にいたはずの司は、荷物だけを残して跡形もなく消えていた。

\*\*\*\*\*

side 神野司

皆様どうも、神野司です。俺は先程、物凄く怪しい手紙を受け取りました。その手紙の中身が気になったのでとりあえず封を切って手紙の内容を読みました。するとどうでしょう。辺り一帯は光が満ちて視界が奪われたのです。

まあそんな事は置いておこう。それよりも、だ。

「どうしてこうなった………」

俺は、感じた事もない浮遊感と豪風を受けつつそんな事を呟く。

さっきの話の最終的な結果を言おう。光が収まったと思ったら上空数千メートルのところ放り出されました。

……とりあえずここに俺たちを召喚したやつ見つけたら一発ぐらい殴ってやろう。

投げやりになった俺は、下に見える湖に着水する前に周りを見る。すると、俺と同じ境遇の少年少女が俺を除いて三人、あとバタバタと手足をせわしなく動かしている猫が一匹。何故そうなっているかは俺と同じ理由だろう。

そして、それを確認した直後、ドボンというなんとも綺麗？な音を立てて着水する。

その際、何か膜のような物にぶつかった様な気がした。衝撃を吸収した様な、そんな感じの。

兎も角、あの数千メートルの位置から落下して生きているのだ。それだけでも十分だろう。だが、

「……………(ハ)は(ド)だ」

俺は湖の水面に顔を出して眩く。

全く知らない土地、生い茂る木々、透き通った湖。こんな場所は日本には、いや世界にはなかった様な気がする。こんないかにも理想的な自然というものはそうそうお目にはかかれない。それに、温暖化が進む地球でこんな場所があるとは思えない。

という事は、あれか。ライトノベルとかにもよくある”異世界召喚”ってやつか。

俺はとりあえず、いつまでも水に浸かっていては仕方がないので地上へと上がる。

すでに上がっていた他の三人は服を絞ったりしていた。

「全く信じられないわ。いきなり上空に放り出すなんて」

「右同じだくそつたれ。一歩間違えたらゲームオーバーだぞこれ。石の中の方がまだマシだ」

「……………い、いえ、石の中では動けないでしょう?」

「俺は動ける」

「そう、身勝手ね」

金髪のヘッドホン学ラン少年と清楚そうな黒髪ロングの少女は何故か睨み合っていた。背後に虎と龍が見えるのは気のせいだろう。

一方、そんなものを気にする事もなく、猫を撫でている茶髪ノースリーブ少女がいた。いたって無表情で猫を撫で回している。

この場にいる奴ら全員を表現できるいい言葉がある。

自由。もうただそれだけだった。

というかお前らはこんな所にいきなり呼び出された事に驚かないのか。……………まあ俺も驚いてないけど。

兎に角、あの二人の言い争いが終わらないと話が進みそうにないので、俺は服の水分を絞り出す作業に移った。

木々が生い茂っている方にある、茂みの中から視線を感じながら。とりあえず、言い争いが終わったら言ってみるか。

side 神野司 out

\*\*\*\*\*

池から岸へと上がった四人を茂みから見ている人物がいた。

頭には耳を生やし、バニーガールの様な服装を身につけている少女だった。

その少女は四人を見て顔を引きつらせていた。

「な、なんですかあのフリーダム四人衆は……。本当にあの方々が人類最高のギフト保持者なのでしょうか……？」

そんな不安を脳裏によぎらせつつ、少女の視線は一人の少年へと向ける。

地面に座り込み、二人の男女の言い合いを呆然と見ている紺のパーカーを着た黒髪の少年だった。

少女は、その少年にどこか見覚えがあつた。何時、何処で、と問われれば答える事はできないが。

（あの男の人……何処かで見た事がある様な……。まあそんなはずありませんよね）  
そう脳内で結論付けて、少女は未だ自由にしている四人の観察を続けるのだった。

異世界の生活に胸を躍らせるようですよ？

「だいたいお前はーーーー」

「だいたい貴方はーーーー」

「おい、その仲良しお二人さーん」

「誰が仲良しだ」

「誰が仲良しよ」

息ぴったりじやないか、と内心思いつつ口には出さなかった。だって口に出したら俺に矛先が向くじゃねえか。

さてと、そろそろ話を進めないと永遠にここから動けないような気がしたからな。

ちなみに、自己紹介は何気に終わっている。金髪学ラン少年が逆廻十六夜、お嬢様氣質少女が久遠飛鳥、クール系無表情少女が春日部耀だ。なんとも個性が濃いことこの上ない。

そんな中、俺は普通系ド平民少年だが。まあ別に個性なくても生きていけるし、問題はねえだろ。

「で、何故ここには誰もいなかったんだ？RPGゲームの定番は、ここら辺りで案内役の

一人や二人、いや百人いてもおかしくないと思うんだけど」

「「いや、百人はないだろ／＼でしょ」」

「ナイスツツコミありがとう。さて、それじゃあ、そろそろご登場願おうか。その観察者さん」

俺が何やら気配がする茂みに目を向けて言うと、その茂みがガサツと大袈裟に揺れる。

他の三人も訝しんだ目つきでその茂みを睨んでいる。

「へえ、お前らも気付いてたのか」

「頭隠して尻隠さず、いや胴体隠して耳隠さずというところか。というか見りや分かるわ」

「まあ、普通に気づくわね」

「風上に立たれたら嫌でも分かる」

「……面白いなお前ら」

十六夜が値踏みした視線でこちらを見てくるが、とりあえず無視しよう。反応すると後が面倒くさそうだ。

「い、嫌だなく御四方。そんなに睨んでは、この黒ウサギ死んでしまいます」

すると、茂みから出てきたのはパニースーツを着たウサ耳少女だった。

そうか、死んでしまうのか。

「「死ねばいいじゃん」」

「初対面にしては辛辣すぎではないですかっ!？」

心底驚いたという風に叫ぶ少女もとい黒ウサギ。

というか、こんなに馴染んでるけどまだ名前知らないんだけど。

そんな事を気にすることもなく毒を吐き続けようとすると、俺は黒ウサギの背後から近寄る春日部さんに気がつく。

何やら悪そうな笑み浮かべてますけど大丈夫ですかね？

「ていつ」

「フギヤア!!」

背後から近寄っていた春日部さんは、黒ウサギの頭上に生えているウサギ耳を引っこ抜きにかかった。

あれ偽物かな？なんて思ったが、引つ張った事で黒ウサギが女性のものとは思えない、なんともユニーク？な叫び声であれが本物の耳だという事が分かる。

というかフギヤア！はないだろフギヤア！は。

「ちよ、ちよつとお待ちを！触るだけならまだしも、遠慮無用に引っこ抜きにかかるとは、一体どういう理由あつての事ですか!？」

「好奇心………体が勝手に」

「今好奇心とかいいかけましたよね？好奇心がどうか言いかけましたよね！」

「好奇心のなせる技」

「言い直さなくてもよろしいのですよこのお馬鹿様!!」

わたわたと手を動かしてなんとか春日部さんから逃れた黒ウサギは、安堵の溜息を吐く。

だが、安心してはいけない。ここには他に、好奇心で動きそうな奴が二人ほどいることを。

「へえ、これ本物なのか」

「ふーん、そうなのね」

十六夜と久遠さんはそれぞれ、耳を驚掴んで引き抜きにかかる。

それを見て怯えた表情を浮かべ、俺に助けを求める視線を投げかける。

俺はとりあえず視線をそらしてその場をやり過ごすことにした。

「ちよ、ちよつと待つー……」

黒ウサギの必死の懇願も虚しく、その後凄まじい断末魔が周囲一帯に響いたことは言うまでもない。

\*\*\*\*\*

「ど、どうして助けてくれなかったのですか!？」

「……………面倒くさかったなんて口が裂けても言えない」

「もう言ってるのですよ!!」

ウサ耳を逆立て、黒ウサギは俺に異議を申し立てる。ウサ耳を引っこ抜こうとするという普段できない体験をした十六夜達は俺と黒ウサギを眺めている。

だが、俺達のやり取りにうんざりしたのか、つまらなさそうな顔だ。てかそういう顔するならこいつ止めろよ。

「おい黒ウサギとかいう奴。さっさとこの状況を説明しやがれ」

「上から目線なのも甚だしいのですよ!」

「早くしろ。でなきやもう一回引っ張るぞ。さっきの二倍くらいの強さで」

「……………はい」

その横暴さに俺は驚く。まさかこんな傍若無人っぷりの発言を初対面の、しかも女の子にするものかと。

……まあ久遠さんと言い争つてる時点でだいたいわかつていたけどな。

「それでは定例文で言いますよ、いいですか言いますよ？言っちゃい「よし、引っこ抜くか！」ちよつと待つてください今すぐ「分かった」了承しないでください「諦めろ」早すぎませんか?!」

はあはあと洗い息を吐きながら肩を上下させる黒ウサギ。そのツツコミ精神に賞賛を送りたいほどだ。ここまでのツツコミをできる奴が俺の身の回りにいただろうか。否、いた訳がない。

黒ウサギはごほんと咳払いをすると、両手を広げて清々しい笑顔を浮かべた。

「ようこそ、箱庭の世界へ！」

あ、いきなり始まるんだな……………。

それよりもだ、

「箱庭つてなんだ？」

「よくぞ聞いてくれました。箱庭とは、創始者が修羅神仏が暇を持て余したため、己が力、知恵、勇気を競うためのゲームを行う場所として作られた場所です。故にここには多くの修羅神仏が存在しています」

「ほお、ということはなんだ、有名な破壊の神のシヴァだったり戦女神のアテナだったりいたりするのか？」

「おそらく。私は会ったことがないので本当かどうかは分かりませんが」

うわお、結構物騒というかヤバそうだな箱庭は。だとしても、修羅神仏でもない人間の俺らがどうしてこんなところに召喚されたんだ？

「……どうして私達がここに？」

春日部さんも同じことを思っていたのか、手を上げて黒ウサギに聞いている。

黒ウサギは、人差し指を立てて説明を続けた。

「皆さんをここに召喚した理由ですが、皆さんは人の身には有り余る才をお持ちのため、その才をこの世界で存分にふるっていただこうと思ひまして」

ふーん、人の身には有り余る才ねえ……………なんだって？

「お、おとおおおいちよつと待て！今なんて言った!？」

「ええつと、存分に」

「その前！」

「会ったことがあるので分かりませんが」

「どうしてお前はそういうお約束を知ってるんだよ!？その後だ!」

「皆さんは人の身には有り余る才をお持ちのため、ですか？」

「それだよ。というかそこしかなない気がするんだけど」

何を言っているんだこいつみたいない顔でこちらを見てくる黒ウサギ。とりあえず後

で殴っておこう。

それよりもだ、今はこっちの問題を早急に解決する必要がある。

「俺はそんな人の身に余る才能を持つてすらいないんだが、どうして俺はここに召喚されたんだ？」

俺が黒ウサギに問いかけると、黒ウサギはまるで石像のようにカチンと固まる。どうやらその質問は予想だにしていなかったらしい。表情を強張らせ、俺を呆然と眺めている。

そうすること数十秒、硬直から溶けた黒ウサギは平穩を装って言った。冷や汗がダラダラ出てるけど。

「しよ、所持していたとしても気づいてない場合もありますので。今日はこの後ギフトを鑑定しに行きますので、それまでこの質問の回答は保留にさせてください」

黒ウサギは作り笑いと分かる程度の下手な笑みを浮かべる。いや、無理に笑わなくていいからな。

「おい、黒ウサギ」

「は、はい、なんでしよう?」

「細かい説明は後でいいだろう。俺には聞きたいことが一つあるんだ」

十六夜がいたって真面目そうな顔で言った。こいつの聞きたいことってなんだ?ふ

ざけた事ではなさそうだが、表情からはどんな質問が飛び出てくるのか全く読み取れない。

十六夜はニヤリと不敵に笑い、黒ウサギに問いかける。

「この世界は————面白いか？」

その問いかけを聞いた時、ドクンと心臓が一際大きく鼓動を打った。

今まで俺はいたって平凡と言われるほどの生活を送ってきた。その生活が俺にとっては退屈だったのかもしれないし、満足していたのかもしれない。そんなの自分で判断できるわけではない。

俺は黒ウサギの回答に興味を持った。どんな回答が返ってくるか心待ちにした。

「Yes、箱庭は皆様に面白おかしな日々を提供する事を誓うのですよ！」

それを聞いた時、俺の表情は緩み、口角は少し上がる。

どうやら俺の第二の世界での生活は楽なものになりそうだと、そう预期するのだった。

# ガチムチ紳士に遭遇したようですよ？

「そうだ、世界の果てに行こう」

「頭大丈夫かお前」

黒ウサギの説明が一通り終わって天幕とやらの中に入るため、俺たちは先導する黒ウサギについて行っていたのだが、その最中頭のネジがぶっ飛んだんじゃないか？ つてぐらゐの提案が十六夜から飛んできた。

「世界の果てだぜ？ なんかこう、気にならないか？」

「全く、全然、一ミリも気にならないね」

というか今現在この道から外れる事で特大のフラグが立ちそうなんです。お前はそういうのは気にしないのか？

「気にしねえよ」

「ざらつと心読むんじゃねえ」

……まあこいつならフラグを真つ向からへし折ったり粉碎したりしそうだけど。

そんな事を思っていると、十六夜は他の二人にも声をかけていた。案の定断られていたが。

「じゃあ、しゃあねえか。とりあえず、黒ウサギにはどうにか言い訳しといてくれ」

そう言い残して十六夜は跳躍して元来た道に戻って行った。

人任せかよ。というかなんだあの跳躍力は。人間超えてるだろ。

………そういうや黒ウサギが言っていたよな。人の身に余る才を持つって。  
ということとは………。

「忙しいわねえ。まあ別に構わないのだけれど」

「でも、言い訳どうしよう?」

こいつらも………人外、なのか?

見た目は普通の可愛らしい女の子なのに? ううむ、信じられない。

頭で考えるが一向にこの人たちが人外だとわかる気配がない。

俺は抱いた疑問を頭の片隅に追いやり、何が起きたか気づいてすらいない能天気ウサギに黙ってついていくことにした。

\*\*\*\*\*

「ジン坊っちゃーん！新しい人を連れてきましたよー！」

なんだそのテンションとノリは。

心の中でツツコミつつ黒ウサギが呼んだジンという少年に目を向ける。

ダボダボのローブに少し跳ねた短髪。おまけに背は小さく、いかにも小学生といった感じだった。ローブを除けばだが。

「おかえり黒ウサギ。後ろの三人が？」

「Yes!」の御四人様が「……」

黒ウサギは綺麗にクルリと回転し、俺たちを見て硬直。次に人差し指で人数を数えて惚ける。最後に顎に手を当て何かを思い出す。これに費やした時間わずか十秒。

黒ウサギは未だ何が起きているかわからないといった表情で告げた。

「あ、あれ……？もう一人いませんでしたか？こう、『俺、問題児！』みたいなオーラをガンガン出してた金髪の方が」

その表現は間違っていないのだが、おそらく今十六夜は世界の果てに着いてヒヤッハしているところだろう。

俺はその問いかけに答える気はさらさらなかったが、久遠さんがそれに答えた。

「彼なら『ちよつと世界の果てまで行つてくる』って言つてあつちに行つたわよ」

「……………はあ!？」

たっぷり黙り込んだ黒ウサギは驚愕の表情を浮かべて声を上げた。

まあそりや、いきなり召喚した奴が消えていたらそんな反応するよな。分からなくはないぞ。

「ちよ、待つてください！どうして止めてくれなかったんですか!？」

「止めてくれるなよ、と言われたから」

「なぜ黒ウサギに伝えてくれなかったのですか!？」

「黒ウサギには言うなよ、と言われたから」

「どうして彼一人で行かせたんですか!？」

「ロマンは一人で探求するものだ、って言われたから」

俺たち三人は黒ウサギの必死の問いかけに悪ふざけで返す。だが、全てあの十六夜がいいいようなことを並べた。

これで納得するだろう、なんて思った時期が俺にもあったよ……。

だが、黒ウサギの表情は焦りから少量の怒りが含まれたものになっていく。残念ながら全く信じてもらえなかったようだ。

「嘘です、絶対に嘘です！実は面倒くさかったただけでしょう!？」

「「うん」」

ガツクリとうなだれる黒ウサギ。

俺は、否定する理由が見当たらないので領いておく。面倒くさかったのは事実だし、正直言つて、俺たちは嘘しか言つてなかつた。

でも、三人ともが誰が聞いても白々しいと思うような口調だったので分かつて当然だろ。

「た、大変です！世界の果てには放された幻獣たちが……！」

「幻獣？麒麟とかキマイラとかの事か？」

「一番最初はまともですが、後者が悪意しか感じませんよ！それに幻獣かどうかですら怪しいですし……つてこんな話をしている場合ではありません」

「じゃあそんな話をする？」

「そういう事じゃないんです！というかそんな話つてどんな話ですか!？」

ジンは物凄い剣幕で叫んだ。というより俺のボケなんて無視すればいいのにちゃんと拾つてくれるとは、この子優しいな。

とまあこんな事はさておき、ジンが言うことによると、どうやら放されている幻獣は無闇矢鱈にというわけではないがギフトゲームを挑んでくるらしい。しかもそれが人の命をかけるものもあるのだとか。

つまり、だ————

「二十六夜（君）……安らかに眠れ（りなさい）」

「どうしてあなた方はそうやって次から次へとボケられるのですか!？」

「「楽しいから」」

「声をそろえて言わなくてよろしいのですよ!」

黒ウサギはゼエゼエと荒い息を吐きながらゆらりと立ち上がる。

「ジン坊ちゃん皆さんを箱庭に案内してくださいませ。私は、あの問題児を捕まえに参りますので」

刹那、黒ウサギの青色の髪が淡い桃色に変わる。

いきなり起きたことに俺は頭がついていかない。いきなり髪の色が変わるなんて漫画や小説の中でしか見たことがない。まさかお目にかかれるとはな。

「それでは皆さん、箱庭ライフをお楽しみくださいませ!」

黒ウサギはそう言い残すと、一際大きく跳躍する。気づけばすぐに姿が見えなくなっていた。

「あんなに早く飛べるのね、箱庭のウサギは」

「黒ウサギ達、月の兎は箱庭の創始者の眷属ですから。それでは参りましょう」

ジンはそう言って踵を返して門のような場所へと歩いていく。

ふと思いつ出したかのように振り返ると、頭を下げられた。

「自己紹介が遅れました。僕はジン＝ラッセルといいます。齢十一の若輩者ですが、よ

ろしくお願いします」

「あら、これはご丁寧にどうも。私は久遠飛鳥よ。で、そこで猫を撫でているのは春日部耀さん、何の変哲もないパーカー男は神野司君よ」

俺の説明酷くね？まあ会ってるから別にいいんだけどさ……。

よろしくと言うとよろしくお願いしますと返された。

その後、目の前にある門のような場所にジンを先頭にして入っていく。

門のようなところをくぐると眩い光が目の前に満ちる。

その光が収まって見えた景色は、見たこともない異世界の街並みだった。

\*\*\*\*\*

「なあ、久遠さん」

「飛鳥でいいわ。それで、何かしら司君」

「……………目の前のこの可愛らしい動物は、なんだ？」

俺と久遠さんともい飛鳥の前にはサンドイッチをもそもそと頬張る春日部さんがい

た。

リスのように頬張っている。何故だろう。この姿を見てみると自然と守りたい衝動に襲われる。これがあれか、母性つてやつ………なんか違う気がする。

「さあ？でも、今すぐにも抱きつきたいわ」

「真顔でそういうこというのやめていただけます？」

そんな顔で言われるとガチの同性愛者かと思うからやめていただきたい。

そんな俺たちを呆れた顔で眺めているジン。まあそんな顔するよな、こんなやり取りしてたら。

そんな風に時間を潰していると、突如ドスンという音がした。意外に近かったため、そこを見るとガタイの良いデカイ男が笑みを浮かべて座っていた。

なんと言うかその………気持ち悪い。その笑みが作り笑いだということも嫌という程わかるし、何かドス黒いものを抱えているというのもなんとなくわかる。

本能が告げる。こいつに関わるとロクなことがないぞと。

そんなこともつゆ知らず、その男は俺たちに話しかけてくる。

「やあやあこれはこれは、名無しの権兵衛のジンⅡラッセル君ではありませんか」

「……ガルドⅡガスパー」

「黙れこの名無しが。俺の名を気安く呼ぶんじゃないぞ」

ガルドと呼ばれた男に強く言われると、ジンは悔しそうに口を塞いだ。

俺はその態度に少しだけ苛立ちを覚えた。仮にも今案内してもらっている子がバカにされたのだ。苛立ちを覚えるな、という方が不可能だろう。

「おい、あんた誰だよこのガチムチド変態紳士」

「ガ、ガチムチ……？わ、私は”フォレス・ガロ”のガルドⅡガスパーというものです」

「あ？”烏合の衆”の変態代表ガルドⅡガスパールだつて？」

「誰がそんなことを言った!?”フォレス・ガロ”のガルドⅡガスパーだ!」

「五月蠅いなおっさん聞こえてるっての」

「き、貴様あ……………」

とりあえずムカついたので色々と挑発してやった。後悔はしないしする気もないし反省する気もない。

「あなたの名前は分かったわ。それで、あなたの目的を聞かせてもらえるかしら」

飛鳥はそこが最も聞きたかったのか、ガルドを睨みつけながらかなりキツめに言った。貧弱な心の持ち主ならすぐさま怯み涙目になる程の。

というかそんな目つきでできるんですね。今時の女の子って怖すぎる。

「……………ゴホン。この度、私は皆さまを我が”フォレス・ガロ”に招待したいと思いまして、あなた方に接触を図りました」

「なんだと？”フォレス・ガロ”に招待だと？」

「断固断る」

「う……………な、何か非礼をしたのであれば」

「団欒しているのを邪魔した、親睦を深めているのに凶々しくも勝手に同席した、下卑た笑みを浮かべた、嘘をついた、隠し事をした、存在した。これだけの非礼をどうやって詫びるんだ？」

「ちよ……………最後の方がただの嫌味にしか「嫌味で何が悪い。お前のせいで機嫌が悪いんだよ」ぐ、ぐう……………」

ガルドはぐうの音しか出ないようで、悔しそうな顔をしている。

隣にいる飛鳥が俺を肘でこずくと、顔をこつちに寄せてきた。

「（そんなに挑発してどうするのよ）」

「（……………仕方ないだろ。あいつの顔見てると無性に腹がたつんだから）」

「（それは……………そうだけれど。ここは少し私に任せてみなさい）」

ヒソヒソと一言二言交わすと飛鳥はコホンと可愛らしい咳払いをして、目つきを鋭くしてガルドに問いかける。

「なぜ、あなたの所に行かなきゃいけないのかしら。説明してくださいさる？」

「ええ、構いませんよ。理由は簡単。このジン＝ラッセル率いる”ノーネーム”よりう

ちの”フォレス・ガロ”の方が優遇できるからですよ」

ガルドは得意顔で下卑た笑みを浮かべながら告げる。

それよりもだ、”ノーネーム”つまりは名無し。ガルドが最初に言っていたことと同じだ。

一体全体どういうことだ？

飛鳥も俺と同じことを考えていたらしく、疑問符を浮かべている。春日部さんは………未だにサンドイッチ頬張ってるけど。

「その顔は、説明を受けてないようですね。ジン＝ラッセルのコミュニティの現状を」

「そ、それは………！」

「黙れ小僧。テメエに口出しする権利はねえよ」

「……………」

またもや悔しそうに口を塞ぐジン。泣きそうな顔でうつむき、それ以来黙り込む。

ガルドは清々しい笑みを浮かべて告げた。

「それではお話ししましょう。コミュニティ”ノーネーム”に起きた悲劇とその顛末を」

## 喧嘩を売るようですよ？

「……ということになります」

一通りガルドからの説明が終わった。

内容は、ジンのコミュニティは以前、この地で名を馳せ流程の実力を持ったものだった。だが、箱庭に蔓延る天災、魔王によって数年前にコミュニティのシンボルである旗と名前を奪われ、挙げ句の果てには仲間まで散りじりにされたという。

そして、現在の弱小コミュニティに至ったというわけらしい。

最悪、と言っても過言ではない。途中、ジンが飛鳥に現状を聞かれた時に、今残っているメンバーを言ったのだが、残っているのが全員まだ十五もいっていない子供だという。

頼みの綱が黒ウサギだけ、そんな現状のコミュニティが弱小と言わずなんというかとガルドは言っていたが。

「それで、どうです？うちのコミュニティならば、その小僧がリーダーの軟弱コミュニティよりは随分マシかと思えますよ？」

胡散臭い笑みを浮かべながらそう提案してくる。

よくもまあ、こんな胡散臭い顔ができるものだ。作り笑いに慣れているとしか思えないぞ。

そんなことは置いておくとして、ガルドの提案は経済的、戦力的においては魅力的な提案だろう。でも、

「遠慮する（わ）」

飛鳥も同じことを考えていたのか、声がハモる。

ちらつと飛鳥の方を見ると、何か確信したような目つきをしていた。多分、俺は目の前の似非紳士を睨みつけているだろうけど。

俺たちの返答が拒否だと予想していなかったのか、ガルドとジンは目を見開いて驚いている。

「そ、それはどうして……………」

「だって、ジン君のコミュニケーションで間に合ってますもの。ねえ、司君？」

「ああ、俺たちにはジンぐらいのコミュニケーションが丁度いい」

「は、はあ!?!? どういうことだ!?!? 何故、何故そっちを——」

『『黙りなさい』』

俺と飛鳥の言葉に腹を立てたのか、立ち上がって抗議の声を上げようとした途端、ガルドの口は言葉の途中でガチンと固く閉じてしまう。なるほど、これが飛鳥のギフト

てやつか。

ガルドはいきなり何が起きたのか把握できず、困惑した表情を浮かべる。

「さつきあなた、コミュニケーションの説明の時に言ったわよね。旗と名前はコミュニケーションのシンボルだって」

「お前のコミュニケーションの”フォレス・ガロ”だっけ、ジンによればここ数年で飛躍的に大きく成長したとか。どうしてだ？」

「だいたい、一つの組織が大きくなるには相当な時間が必要なはずなのよね。最低でも十数年ぐらい。それなのにどうしてあなたのコミュニケーションはそんなに飛躍的に、かつ短時間で成長できたのかしら。『そこに深く座って教えてくださる？』」

飛鳥が再度ギフトを使ってガルドを座らせる。ガルドはドスンと音を立てながら椅子に深く腰をかける。

飛鳥のギフトを例えるなら人身掌握ってところか。

などと推測していると、猫耳のウエイトレスがこっちに急いで向かってきた。

さつきの座った時の音で気付いたか。

「ちよつとお客さん！店内での争いごとはずいですって！」

「あら、丁度よかったわ。あなたにも聞いていただきましょうか。この外道の真実ってやつをね」



「ガルドの動いていた口は突如止まる。口を開けたまま、続きを話すこともなく止まる。」

俺は己の中で何かが蠢き、それが体全体を侵食するような感覚に見舞われた。それは奥底からドス黒い何かがふつつつと湧き出るような感覚だった。

「殺した、だど？ 罪もない子供を、平和で安らぎのある生活を送っていた女性を、そんな人たちを殺したっていうのかお前は」

「グ、ガア……………!!」

俺が殺気を込めて睨み付けると、ガルドは苦しそうにもがき始める。首のあたりに何かが掴んでいるように締め付けられているが、俺は気にせず睨み付ける。

すると、飛鳥は俺の肩を掴んで言った。

「司君、そんなに殺気だつてどうするのよ。それに、ここでこの外道に制裁を加えちゃダメよ」

「じゃあ、どうするっていうんだよ。こいつをこのまま野放しにするっていうのか？」  
「いえ、そんなことはしないわ。ちゃんと制裁を加えるわよ」

そう言つて飛鳥はまた不敵に笑みを浮かべてガルドに告げた。

「ねえ、似非紳士さん。私たちとギフトゲームをしましょう。あなたの人生と、私たちの誇りと命を賭けて」

\*\*\*\*\*

「フオ、” フォレス・ガロ” とゲームをする!? しかもこれ何のメリットもないじゃないですか! デメリットしかありません! それにゲームの準備もする暇がありません! それを踏まえてどういう経緯でこんなことになったのですか言ってみなさい御二方!」

「後先考えずにむしゃくしゃしてなんとなく喧嘩を売った。後悔はしないし反省もしない!」

「少しは反省なさいこのお馬鹿様方!」

黒ウサギと合流した俺たちは、ガルド達とのことを話すとそんなことを言っただけで少し説教された。

というか俺って煽って睨みつけたぐらいしかしてないんだけど。本格的に喧嘩売ったの飛鳥なんだけど……。

そんなこんなで、俺と飛鳥は小一時間ほど黒ウサギに説教されました。

一方、十六夜と耀はというと、

「そういや、春日部は黒ウサギのコミュニティでいいのかわ？」

「私は別にどこでも構わない。友達作りに来ただけだから」

「へえ、そりや珍しい。なら俺が友人第1号に立候補しよう」

「うん、別に構わない。で、なんであの二人怒られてるの？」

「お前一緒にいただろ？」

「ご飯食べてて話一切聞いてなかった」

「……………マジかよ」

「マジ。大マジ」

「ヤハハ……………、これは結構な大物と友人になっちまったみたいだな」

「……………？」

\*\*\*\*\*

足が痛いです。

「我慢してください」

「さらつと心読まないで」

小一時間ほど黒ウサギのありがたいお話を聞かされたことよって、石畳の上に正座させられていた俺の足はすでに限界気味だった。正直言つて歩くのも結構痛いです。

「まったく、せつかくいいお店の予定をしていたのに散々な結果に終わりました」

「本当、散々だよな」

「司さんのせいでもあるということ分かってますか？」

「えー、ナンノコトカワカンナー俺が悪かった。今の嘘だからその釘バットらしき物はしまつて。物凄く怖いから」

ふざけようとした途端、黒ウサギの瞳から光が消え、どこから釘バットらしき物を取り出して振り上げたので全力の土下座で謝る。流石にそんな物で殴られた日には、頭部に赤い生々しいお花が咲くこと間違いなしだ。

とまあそんなことはさておき、俺たちは黒ウサギについて行っていた。何しろ、ギフト鑑定なるものをしてもらうらしい。それで所持するギフトがわかるだとか。

俺としてはすぐさまでも自分の力が知りたい。何も持つてないのにこんな人外魔境に呼び出されては、たまったもんじゃないからな。

そう思いつつ歩いていると、黒ウサギはぎよつとするや否や走つてどこかに向かう。

「まっ」

「待った無しです。うちは時間外営業をしていませんので」

そこは後片付けをしている割烹着がいる女性の店だった。何の店かは全くわからないが。

「酷いです！閉店5分前に客を締め出すなんて！」

「うちはそういう決まりですので。それ以上何かをいうのでしたら貴女を出禁にします」

「な、出禁ですって!?!」

ギヤアギヤアと騒ぐ黒ウサギをあしらう割烹着の女性。俺には割烹着の女性が全てを本気で言っているように思えなかった。

目や声音に少しだけ作られたようなものが感じられる。多分、5分前に店仕舞いをするのが決まりというのは嘘だろう。出禁というのは本気で言っているようだが。

そんな時だった。

「いやっほおおおおお!!会いたかったぞ、黒ウサギイイイイ！」

店仕舞いをしていた店の中から、和服を着た幼女が飛び出してきた。物凄い速度で走り、そして黒ウサギに飛びかかる……………はずだった。

「むほほ、この硬さと絶壁のようなまな板が……………うむ？」

和服幼女は何かに気づく。幼女が飛び付いたのは、黒ウサギではなく俺だということ

に。

ちなみに、黒ウサギは俺を盾にするように後ろに隠れている。

「えらく凹んだのお黒ウサギよ」

前言撤回。こいつまったく気づいていやがらねえ。

俺はイラつとして抱きついていっている幼女を引つpegし、地面に叩きつける。

へブツという幼女らしからぬ声を上げて地面にへばりつく。

「おいコラ和服幼女。俺を残念駄ウサギと一緒にすんな」

「な、なぜ黒ウサギが罵倒されてるんですか？」

「五月蠅い駄目ウサギ」

「なんか司さんが辛辣になってます！」

そりやそうだろう。男なのに幼女に胸を弄られる気持ちがお前にわかるのか？

俺は怒りが収まらぬまま、幼女を睨み付ける。

すると、幼女は起き上がって笑顔を浮かべる。

「いやあ、すまんすまん。ちと間違えてしまったわい」

「間違えるにしてもほどがあるだろ」

「それで、うちの店に何の用じゃ？」

いや、そんなこと俺に聞かれてもねえ……。そう思いつつ、俺は黒ウサギを見ると、黒

ウサギは俺の前に出て幼女に言った。

「今回は白夜叉様に頼みたいことがあるのでございます」

「ほほう、この”サウザンドアイズ”

幹部の白夜叉に頼みとな。ならここで立ち話もなんだろう。入るが良い」

そう言つて白夜叉は店の中に消えていった。

……………幹部とか言つてたけど、結局なんなんだあの幼女は。

そう疑問を抱きながら、俺はその姿を呆然と眺めるのだった。

## ギフト鑑定だそうですね？

「さてと、それで頼みとはなんだ？」

白夜叉の部屋へと通された俺たちは、真正面にいる白夜叉が笑いながら言う。

確か、俺たちはギフト鑑定に来たはずだよな。そう思いながら黒ウサギを見ると、黒ウサギは白夜叉に言った。

「はい。本日は、この方達の「ちよつと待った」なんですか十六夜さん」

「別に頼むことを止めろ、ということではないが、その和服ロリの情報がまだなさすぎる。得体の知れない奴にやられるのはちよつとな」

……十六夜の家も一理ある。例えば、黒ウサギが信じていようと俺たち三人はまったく言っていないほど白夜叉のことを知らない。

そんな得体の知れない奴に自分のギフトを晒してたまるか、ということだろう。

「おつとすまんな。自己紹介が遅れてしまうたわ。私は白夜叉。ここ”サウザンドアイズ”の幹部にして、この東側の階層支配者だ」  
フロアマスター

”階層支配者………？”

聞いたことがない。この箱庭だけで使われている専門用語か何かだろうか。

その言葉を疑問に思っていたのは他の三人も一緒のようで、疑問符を浮かべている。だが、そのうちの一人、十六夜はすぐに立ち上がりニヤツと笑みを浮かべて白夜叉を睨みつける。

「階層<sup>フロア</sup> っていうくらいだからそれなりの強さってものは持つてるってことだよな？」

「まあ、この東側では最強の座に座っておることになるかの」

「あら、そうなの？」

それを聞くや否や、飛鳥と春日部さんが立ち上がる。

ちよつと待てお前ら。春日部さんは表情変わってないから何思ってるんのかわかんないけど、飛鳥と十六夜はなんでそんな楽しそうな笑み浮かべてんの？いや、もうこのあと何言うかなんとなくわかるけどさ。

「ということは、お前を倒せば俺たちが最強ってことになるよな」

「……………まあ、そうなるかの」

「それなら、遠慮なく倒させていただきますでしょうか」

おいおい待て待て。お前ら今何言ってるんのかわかってんのか。

それ結局、出会い頭に誰彼構わず喧嘩を売っていく不良みたいな奴らと同じだぞ。

俺はたまたまず三人を止めようと立ち上がるが、同時に立ち上がった黒ウサギの方が先

に止めにかかる。

「ちよつと御三方!?!何を言っちゃってるんですか!?!」

「よいよい。私も遊び相手には飢えておったのだ。それで、おんしらが望むのは、挑戦か?それとも”

—————決闘か?

その瞬間、極光が部屋を満たす。たまらず目を瞑ると、不意に浮遊感に襲われる。だが、その浮遊感も一瞬ですぐに地面に足をついている感覚が戻る。

恐る恐る目を開けると、そこは淡く白く光る白銀の世界だった。

畳に立っていたはずなのに、地面は凍りつき、一帯にあるのは氷ばかり。太陽は水平線上に位置し、少し肌寒い。

俺はその光景を呆然と眺める。予想だにしていなかった。まさか、一日のうちに二つも別の世界を見ることになるとは。

それは他の三人も一緒のようで、美しい光景を呆然と立ち尽くして見ている。

「かかつ、どうじゃ私のゲーム盤は」

「こ、これがゲーム盤ですって?!」

「いかにも。まあ、これ見せると私の正体が分かってしまうのが難点なんじゃがな」

飛鳥の驚愕の声もなんのその、今までそういうことがあったのか、飄々と白夜叉は答える。

それよりも、このゲーム盤の世界は白夜叉本人を象徴したということはどういうことだろう。

ここにあるのは凍りついた大地と水平に回る太陽———そうか、そういうことか。

「なるほどな。凍る大地に水平に回る太陽。ということはお前は白夜ということか?」

「おんし、頭が冴えておるの。全くもってその通りじゃ。白夜と夜叉、その二つを兼ね

備えた魔王、それが私の正体じゃ」

白夜又はご丁寧に俺の回答を補足して説明してくれた。が、魔王ときたか……………。

魔王とは、箱庭では史上最大の天災らしい。なんでも、挑まれたギフトゲームは断ることができないだとか、最凶最悪のギフトを持つているだとかあの似非紳士は言つてたけど。ということは白夜叉も同じようなものなのだろう。

そう思うと背筋が凍るような感覚に襲われる。

もしかしなくても、俺たちって結構やばい奴と対峙してるんじゃないか……………？

「……………降参だ。今の状態で挑むのは部が悪すぎる」

「……………私もよ。悔しいけど」

「……………右に同じ。流石に無理」

「なんだ、つまらんのお」

ケラケラと笑う白夜叉に俺たちは冷や汗を流すことしかできない。

黒ウサギはというと、俺たちと白夜叉を交互に見て状況を伺っていたのだが、三人が降参だと言つた瞬間、ウガーツと唸りだす。

「まったく御三方は何を考えてるんですか！そして司さんも止めてくださいよ！」

え、俺のせいでもあんの……………？

「それに白夜叉様もです！あまりそういうおふざけはおやめください！それと、白夜叉

様が魔王だったのは結構前のことでしょ？！」

「そこまで怒らんでも良いだろう黒ウサギよ。さてと、それではおんしらには私からの  
”挑戦”を出すか、構わんかの？」

十六夜たち三人は首を縦に振り肯定する。

すると、視界の先にある大きな氷山の方から聞いたこともない咆哮が聞こえてくる。  
そして氷山から鷹の頭、鳥の足、猛獣の胴体を持ち、そして大きな翼を持った獣？が  
空を飛びながらこつちに向かってくる。

「おお、奴が良さそうだな。よし、それならばこうしよう」

白夜又はそう言つて柏手を叩く。すると俺たちの目の前に高級そうな羊皮紙が現れ  
る。

”<sup>ギアスロール？</sup>契約書類”！」

なるほど、これは”契約書類”というのか。えーと、何だっけ？これって確かギフト  
ゲームをする時に必ず必要なものだったよな。

その”契約書類”というものには、こんなことが記されていた。

『ギフトゲーム名 鷲獅子の手綱

・プレイヤー一覧 逆廻十六夜

久遠飛鳥

春日部耀

神野司

・勝利条件　鷲獅子に力、知恵、勇気のいずれかで認められる。

上記を尊重し、誇りと御旗の下、ギフトゲームを執り行うことを誓います。

” サウザンドアイズ ”

この” 契約書類 ”には鷲獅子と記されている。ということは、よく御伽噺に出てくる幻獣のグリフオンのことだろう。

すると、その” 契約書類 ”を見た瞬間、春日部さんが勢いよく手を挙げる。

「私がやる」

春日部さんの瞳はキラキラしており、好奇心と期待が混じっているように思える。さつきまで寡黙だった春日部さんが一気に子供っぽくなった瞬間だった。

「しゃあねえ、先手は譲るぜ」

「私も構わないわ」

「司はどうする?」

十六夜が俺に聞いてくる。すると、春日部さんは捨てられそうになっている子犬のようならうるとした目を向けてくる。

やめてくれ、そんな目を向けなくてくれ！わかった、わかったからそんな顔すんな！こっちが罪悪感しか感じないから！

「異論なしだ。そもそも俺元から参加する気なな」「ありがとうっ！」お、おう……………」すると、すぐさま春日部さんはグリフォンの元へと向かっていった。……………動物好きなのか？

そう思っていると、春日部さんが何か喋っているのが聞こえてくる。まるで誰かと会話をしているかのような、そんな感じの喋り方で。

「ほお、あやつ異種と言葉が交わせるのか」

「……………」

「つまりだ、見た推測だがあやつは異種、特に動物となら話せるのだろうか」

「マジかよ……………」

動物と会話できるって、どこのファンタジーの世界だよ。

……………そういうや、今俺ってそのファンタジーの世界にいるんだった。

「命を賭けます」

不意に春日部さんからそんな言葉が発されたのが聞こえてくる。俺は一瞬心臓の鼓動が驚きによつて跳ね上がるが、春日部さんの表情と目を見てその鼓動を抑えこむ。

あの目は何かを決心している目だ。誰に何かを言われたところで変えはしないだろ

う。

十六夜もそれがわかっていよう、抗議しようとして前に出ようとしている黒ウサギと飛鳥を手で制している。

俺は春日部さんがグリフォンに跨ったあたりであることに気づき、走ってそこまで行く。

「春日部さん」

「ん……………何？」

「これ」

そう言つて羽織っていたパーカーを春日部さんに投げつける。それは見事春日部さんの頭部に被さり、春日部さんは少しもがいた後俺をジト目で睨んでくる。

「あんまり変わらないだろうけど、それよかったら使つて」

「……………ありがとう」

「どういたしまして。そんじゃ、頑張つてね春日部さん」

そう告げて去ろうとした時、春日部さんが俺にだけ聞こえるような声で言った。

「春日部さんって他人行儀みたいに聞こえるからやめて。耀でいい。さん付けいらんから」

駆け出そうとしていた足を止めて振り返ると、俺のパーカーを羽織っている春日部さ

んが真顔でそう言ってきた。

「前向きに検討「呼んで」……………えっと前向きに「呼んで」……………わかったよ耀」

「よろしい」

どうしてそんなに上から目線なんだよお前は。

「それじゃあ、行ってくるね」

「おう、グリフォンに見せてやれ。あの似非紳士をスルーし続けたお前の強さを！」

「……………それって強さなの？」

耀の適切なツツコミが聞こえた気がしたが、その次の瞬間にはグリフォンは飛び去っていた。

さて、どうなることやら。

\*\*\*\*\*

結論、耀本人はキツかったそうですが涼しい顔して戻ってきました。

てかキツイならそういう顔をしろよ。無表情だと全くもってわかんねえだろうが。

しかも、耀の力は友達になった動物から力を貰い受けるというなんとも規格外な力を持つていた。

全動物から力受け取るとどうなるんだろうか、と頭のなかに疑問が浮かぶがどうでもいいことなのですぐに忘れることにする。

「さてと、ギフトゲーム戻ってひと段落ついたし、そろそろ本題と行こうかの。して黒ウサギよ、頼みとは具体的に何じゃ？」

「えっと……この方達のギフト鑑定をお願いしたいのですよ」

「ギフト鑑定、か……。専門外もいいところなのだが……。いや、あれならばいけるか」

黒ウサギの頼みの内容を聞いた途端、苦渋の色を浮かべるが妙案が思いついたのか、ハツとしてぶつぶつとつぶやいている。

「よし、それならコミュニケーション復興の前祝いだ。ありがたく受け取るが良い！」

白夜又は、俺たちをこの白夜の大地に転移させた時のように柏手を叩く。  
すると、俺たち四人の前にカードのようなものが現れる。

逆廻十六夜のコバルトブルーのカードには”正体不明”

久遠飛鳥のワインレッドのカードには”威光”

春日部耀のパールエメラルドのカードには”ゲノムツリ生命の目録”、”ノーフォーマー”

俺、神野司のルビーレッドのカードには、概念憑依【炎<sup>フレア</sup>】”、”系統支配【幻獣】”、  
”等価錬成”、”平穩の鎖”、”過去ノ傷跡”

「そ、それはギフトカード！」

「何それお中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「キャツシユカード？」

「何故そんなに全てが全て違うのですか!?!ギフトカードですよ！恩恵ならなんでも収納できる優れたもので物凄い高価なものなのですよ！」

「つまり超レアアイテムってことか」

「ああもうそれでいいです……………」

黒ウサギの苦勞がどんどん増えていつているが、まあ気にしないでおう。気にしたら負け、というやつである。

それよりも、だ。

「俺のギフトって何なんだろうな……………」

俺はギフトカードを見ながらそう呟き、自分のギフトを眺めるのだった。

## ギフト説明、そして本拠到着のようですよ？

ギフト鑑定が終わってからのというもの、白夜叉はまるで子供のようには十六夜たちのギフトカードを覗き込んでいた。

耀にはギフトをいただきだとか言っていたし（案の定拒否されたが）、飛鳥のギフトには感嘆し、十六夜の時は驚愕の表情を浮かべていた。何しろ、”正体不明”などというわけのわからないものが出たということだった。

そして今度は俺の番である。

「して、おんしはどのような恩恵を……………これは……………」

白夜叉にギフトカードを見せてやると、目を見開いてまじまじとカードを眺める。

「まさか、こやつがか……………？いや、そんなわけは……………。おいおんし、名をなんといい？」

「神野司だ。それがどうかしたのか？」

「いや、ちと聞いてみただけだから気にせんで良い。……………奴め、こやつに厄介な代物を任せおったな」

白夜叉は何やら苦しそうな顔で呟いているが全く聞こえてこない。まあ別に気にす

るようなことでもないだろう。

俺は少しギフトのことで気になる事があるため、白夜叉に尋ねると何か躊躇っていたが、教えてくれる事になった。

「まずはこの”概念憑依【炎】”をやつじや。これは簡単に言うところ【内にある概念そのものを己に憑依するといった感じだろう。おんしの場合は炎か】

「で、それはどうやってやるんだ？」

「簡単じゃ。炎を想像すればいいのだ。そうだな……………、例えば火事で自分の体が燃えている、とかどうだ？」

それって死ぬ事ないか？と思いつつ、目を閉じて言われた通り想像してみる。

自宅が火事になり、逃げ遅れて火だるまに……………。

「なあ、こんなのでうまくいくのか……………はあ!？」

俺は何の感覚も感じられないので、目を開けて白夜叉に文句を言おうとした時に明らかな変化に気づく。

体の周りが炎で纏われているのだ。服も燃えているが、服自体が炎のように揺らいでいる。

「それがおんしのギフトだ。おそらく、練習すれば人体を炎化する事もできると思うぞ。何そのワ○ピースのエ○スみたいな能力……………。ある意味無敵じゃねえか。」

「だが、炎化しようとう心臓が貫かれればそれで終わりじゃが」

……まあ、そんな気はしてたけど。異世界に来た途端にチートになるわけじゃないし、そんなラノベみたいなの人間存在するわけがない。

だが、他のギフトも気になるところだ。概念憑依【炎】”のようにある意味チートじみてなきやいいんだけど。

「それで、他のギフトは？」

「うむ、”等価錬成”はいたってシンプルじゃ。何かを代償にして新たなものを作り出すといったところかの。実践するなら……ほれ」

そう言つて白夜叉が投げってきたものが、白夜叉の足ものにある拳サイズの水の塊だった。これをどうしろというのか、と視線を投げかけると、白夜叉は得意げに言った。

「今度も想像してみるといい。そうだのお……剣なんてどうじゃ？これからも使う事になるかもしれんから一度試しておけ」

そう言われ、今度は剣を想像する。俺が真っ先に浮かべたのは、西洋などでよく使われていた片手直剣だ。よくアニメや再現映画などでああいう形の剣が使われていたりするため、結構脳裏に焼きついている。

想像した途端、左手に握っていた水の塊は淡い光を発する。その光がおさまると氷は姿を消し、代わりに右手に爛々と輝く透き通った蒼色の片手直剣が握られていた。

俺は試しにそれを適当に振るってみる。重厚感はなく、木の棒を振るっているかのような感じだった。

そしてなんとなく、俺はその剣を地面に叩きつける。すると、氷の剣は木つ端微塵に砕け散る。残っていた柄の部分もひび割れ、砕け散った。

「だが、強度が対価にしたものに左右されるらしいな。まあ、何を代償にするかは個人の自由じゃ」

白夜又は俺が実行したのを見計らって言った。

対価にしたものに強度は左右されるが、これはまあ使えるだろう。使い勝手も良さそうだ。

「そして、”系統支配【幻獣】”だな。こいつは【】内の種族を自分の支配下に置くといったものだな。隷属と同じようなものだ」

隷属……というのは聞いたことがないが、支配下に置くということとはつまりあれか？物語の世界なんかよくある使い魔的な存在のことか？

「これも試してみるかの」

そう言つて白夜又は拍手を叩いた。すると、俺の目の前には“契約書類”が現れた。俺は何をするか全く見当がつかず、訝しみながらそれを手に取り目を通す。

『ギフトゲーム名 再生の炎翼』

・プレイヤー一覧 神野司

・勝利条件 不死鳥 レイルの不滅の炎を受け止める。

・敗北条件 降参、またはプレイヤーの死亡。

・勝利報酬 プレイヤーの任意でレイルの隷属。

上記を尊重し、誇りと御旗の下、ギフトゲームを執り行います。

サウザンドアイズ印』

「おいちよつと待て。これどういうルーラー!?」

俺が抗議の声を上げようとした途端、白夜叉の少し後ろあたりの一点から熱風が吹き荒れる。

十六夜たちは俺たちの方を向き、何が起こったかわからない風な顔をしていた。当事者である俺も何してるのかわからん。

そして、その一点から炎が突如燃え上がり形を成していく。それは先ほどのグリフォンには及ばないが、大きな鳥の形をしていた。

「おんしには不死鳥のレイルの相手をしてもらう。少し試したいこともあるしの」

白夜叉はそういうや否や、そそくさと黒ウサギの元に避難。抗議の声を上げたが、黒ウサギを弄るのに必死。俺は苛立ちを抑えるのに必死。

『貴方が私のお相手ですか?』

そんな時、どこからか凜とした大人の女性の声が響いた。俺はどこから話しかけられたか分からず、辺りを見渡すが、十六夜たち三人は黒ウサギを弄っているし、それにそんな大人の声の持ち主があの中にいたとも思えない。

『こつちですよ。黒髪の間人さん』

もしか、と思いつながら先ほどの炎の鳥の方を向くと、炎の鳥がこつちを見ていた。

『私は不死鳥のレイルと申します。いわゆるフェニックスです。知っているでしょう？』

「え、え？」

ちよつと待ってくれ。どうして俺はこの鳥の声が聞こえるんだ？さっきの鑑定で耀はギフトのおかげで話せると分かったのだが、俺はそんなギフトを持っていないはずだ。

一体全体どういうことだろうか、その疑問を口にしようとした時、レイルはため息を吐いて言った。

「というか、鳥でもため息はつくんだな。」

『私は人間以外とも言葉を交わすことが可能なんです。少し特殊でして。それですが……』

「な、なんだよ。」契約書類”にあつたようにギフトゲームでもするのか？というか、

ぶつつけ本番はあまりよろしくないと思うんですが、そのところどうなんでしょうか？  
ね？

などと思っていると、レイルは予想を大きく裏切ることを言った。

『私は貴方にならば隷属しても構わないと思うのですが、どうでしょうか？』

……………うん？ 一体全体どうことだろうか。

罨か？と思うが、こんな丁寧な口調の人がそんな姑息な手段を使うとは思えない。

かといって、そんな気楽に隷属してもいいなんて言っていないのだろうか。

「あ、あのさ。そんなに簡単に隷属しても構わない、とか言っていないのか？」

『別に、私はただ白夜叉様に気に入られたというだけの理由でここにいます。というか、そろそろこの生活にも飽きてきたというか、日夜与えられた空間でゴロゴロするのも飽きていたところなんです』

レイルは疲れたかのような顔？でため息をつきながら衝撃のカミングアウトをした。

俺はそれを聞いて白夜叉に目を向ける。部下？が愚痴を言っているにもかかわらず、黒ウサギにダイブしている。

……………あいつはあれだ。ダメ人間、いや、ダメロリつてやつだ。ギフト鑑定していいやつだと思っていたんだけど。

俺の中で順調に白夜叉の株が下がりつつあるが、気にせず俺はレイルに言った。

「なら少しぐらい試してくれよ。お前だって、自分の隷属先が弱小のクソ人間だったら嫌だろ？」

『……………いえ、私はそれでも構わないんですが。むしろそっちの方が仕え甲斐があるというか』

「もういい、俺が納得しないから試せ」

言い訳をしてきたので、面倒くさくなつて口調が荒くなる。俺がそう言うと、レイルは渋々といった風に羽ばたいた。

そして、空中で一際大きく翼を広げたかと思うと、その瞬間炎が突風に乗って吹き荒れる。

俺は瞬時に全身を炎で纏う。

すると、さっきは熱かった風がどうだろうか。今はただ強い風が吹いてるといふ風にしかなじられなくなった。

なるほど、炎という概念自体を纏ってるから炎が効かないのか。

レイルは熱風の中で平然としている俺を見て、目を見開いている。どうやら何故俺が無事なのかわからないらしい。

それがレイルの闘争心に火をつけたのか、風の強さが増し、炎が一段と火力を増す。だが、全く熱くなければ火傷すらしていない。というかむしろ気持ちいいぐらいだ。

レイルは無理だと感じ取ったのか、地面に降り立って俺の方を向く。

『強いですね、貴方は』

「そうか？お前の方が強いと思うんだが」

『ご謙遜を。私の炎を一步も退かず、苦悶の表情を浮かべないのは貴方が初めてですよ？』

「それは俺が特殊だったただけだ」

厳密に言うと、ギフトが優秀だっただけで俺何もしてないんだけどな。

『益々興味が出てきました。私は貴方に隷属していただきたいです』

「でも『お願いいたします』……………分かったよ」

『有り難うございます』

そう言っって頭を下げるレイル。まあ、悪いやつではなさそうだし別にいいか。

そんなこんなで、本日の大イベントであるギフト鑑定は終わった。

\*\*\*\*\*

「……………まさか、小型化できるなんて」

『まあ炎ですからね』

俺たちは、白夜叉と別れて俺たちが所属する「ノーネーム」の本拠地に向かっていた。  
た。

途中、目立つからといってレイルがバスケットボールサイズまで小型化したのに驚いたが。それと同時に飛びついた飛鳥と耀にも驚いたが。

「それで、どこまで歩くんだ？」

「もう着いたのですよ」

黒ウサギはそう言うのと立ち止まる。俺たちも同様に立ち止まると、目の前には大きな門がそびえ立っていた。

確か、数年前に魔王にボロボロにされたとか言ってたような気がするんだが。

と思いつつながら門を見ていると、所々にひび割れだつたり朽ちていたりしている部分があった。

やっぱりこういう傷跡は残るんだな。

傷跡が残る門を見ていると、黒ウサギは苦しそうな表情をしながら門の中へと入っていく。

俺たちも続いて入るが、その先には信じられない光景があった。

枯れ果てた大地、朽ち果てた建造物。総称するなら絶望そのもの。生気が感じられないとはこういうことを言うのだと感じ取れた。

俺はその光景に絶句する。一体何をどうしたらこうなるのか、俺には皆目見当がつかなかった。

「なん、だよ……………これ……………」

「これが、私たちを滅ぼした魔王による攻撃の傷跡です」

黒ウサギは俯きながら言った。

俺はそれを聞いた瞬間、背筋がゾクツとするような悪寒に襲われた。

「……………おい黒ウサギ。魔王に襲われたのはいつの話だ？」

「わずか三年前の出来事です」

「ハッ、これが三年前だと？あり得ねえよ。三年でこんな朽ち方はおかしい」

十六夜は石を握りつぶしながら鋭い目つきをしながら言った。

「それほど、魔王の力が強大だったんです」

悲しそうな顔で黒ウサギは言った。当時のことを思い出したのだろう。魔王に襲われたときのことを実際に目に行っている黒ウサギにしてみれば、この光景はあの時心に負った傷跡そのものなのだろう。

「……………生活していたまま朽ちてるわね。まるで今の今まで生活していたみたい」

「……………廃墟に動物の気配が感じられないなんて……………」

飛鳥も耀も各々感じた感想を述べている。

俺はというと、その光景に圧倒されて何も言えずにいた。

それと同時に俺の心の中で決意する。

この光景を作り出した魔王を、純粋な少女の心に傷を負わせた魔王を、

絶対に倒してみせる、と。

無力な俺はそう決意して、拳を握り締めた。

\*\*\*\*\*

「本当にここでいいんだな？」

「そのはずです。軌跡がここで途切れます」

とある河川敷に三人の男女の姿があった。茶髪の少年は押しつぶされている芝生を睨みつけている。

その後ろで白髪の眼鏡をかけた少年と黒髪の少女がその姿を眺めている。

「それでどうすんの先輩。どうやって先輩を探すんですか？」

「……………んなこと言われてもなあ」

「あるじゃないですか。あれが」

「あれ……………？……………ああっ！あれか！」

「二人とも何言ってるの？そもそもあれって何？」

「先輩の特技」

「……………ああっ！普通の生活には全く役に立たないあれか！」

「酷えなおい！」

男女三人は、数分ギヤアギヤアと騒いだ後、一箇所だけ不自然に潰れている芝生を見た。

「本当に……………ここにいたんでしょっか？」

「さあな。俺は知らん」

「まあ、とやかく言っても先輩は帰ってきませんし、それじゃあお願いしますよ先輩。今は先輩の特技であり唯一の取り柄である魔法が頼りなんですから」

「……お前俺をなんだと思ってるやがる。まあいいか」  
茶髪の少年は口角を釣り上げ、高らかに告げた。

「それじゃあ行くか。あの親友を<sup>大馬鹿</sup>捜しによ！」

# 癒しの楽園（大浴場）で疲れを取るそうですよ？

「おかえり黒ウサギ」

「ただいまなのですよジン坊ちゃん」

俺たちは、惨劇の傷跡を見た後、黒ウサギの後ろをついていった。そして行き着いた先は、ジンとその他の獣の耳を生やした子供達が掃除道具を持ってそこにいた。

子供達は目をキラキラと輝かせていたが。

「黒ウサギのお姉ちゃん、新しい人ってどんな人？」

「カッコいい人？」

「可愛い人!？」

「そのどちらも兼ね備えている人たちなのですよ」

「（おい待て、俺たちは違うだろうが）」

俺と十六夜の心が一致したような気がしたが、今はそんなことは置いておこう。

黒ウサギは、笑顔で俺たちを紹介すると、子供達は笑顔を浮かべて言った。

「「「よろしくお願ひします!!」」」

………騒音レベルのご挨拶ありがとうございます。おかげで耳がキーンとしてして

ます。

「それでは、水珠の苗を設置しますので、十六夜さんは水門をお願いします」  
「あいよ」

そう言つて黒ウサギは水珠の苗を設置し、十六夜が水門を開ける。

「うわお、この子は元気ですね♪」

「おい待て、これ以上濡れるのはごめんだぞゴラァ！」

十六夜は、濡れるのを瞬時に避けるために跳躍する。そして、俺の隣に着地すると俺たちの足元付近の足場が崩れる。

「な、なんだと!?!ちよつと待てやあああゲボア!!?」

そして仲良く水へとダイブ。俺たちは二度目の着水と体に服がべったりつくという不快感を覚えることになった。

\*\*\*\*\*

不快感を味わうこと小一時間、俺はようやくやく念願の風呂に入ることができた。

”ノーネーム”の浴場は、日本でいう大浴場というやつでおおよそ数十人は一緒に入れるだろうという大きさだった。

そこに俺は一人で入る。ちなみに、十六夜は散歩すると言つてどこに行つたかわからない。

「ふう〜……………、生き返る〜……………」

俺はどこぞの爺さんのような声を出しながら湯船に浸かる。

異世界に来た、異能力を見た、異能力を所持した、というなんとも奇妙な体験をして疲労がたまっていたが、湯に浸かっていると疲れが取れていく。

完全にだらけきっていた時、背後にあるはずの扉がガラガラと音を立てて開いた。そこには人影があり、こっちに近づいてくる。

あ、十六夜入ってきたんだと思つたが、

「お背中、流しましょうか司様」

そこにいたのは、十六夜ではなく、全くの見知らぬ女性だった。

緋色の髪、赤い鮮やかな瞳、そして柔らかかそうな体つき、何より黒ウサギと同レベルの大きさの乳房が……って

「ちよ、え、はあああああああ!?!」

待て待て待て待てちよと待ててくれ! 一体全体何がどうなつてどういうことぞと

「うかこいつ誰だよ!? こんな容姿端麗な美人俺は知らないぞ!」

「あら? この姿はお気に召しませんでした?」

「いや、お気に召すとか召さないとかそういう問題じゃなくて、お前誰だよ!」

「まあ、誰とは酷いですね。私の力を真つ向から受け止め耐え切ったというのに」  
クスリと妖艶に笑う。

と言われたはいいが、本当に誰だか俺には全くわからない。

力を真つ向から受け止め耐え切ったと言われ……て、も……。

ちよつと待てよ、まさか……!!

「お、おま……お前……レイルか!」

「はい、その通りですよ」

俺は動揺を隠せないまま告げると、頷いて肯定する。

グリフォンサイズだったり、小型化したり、人化したり変幻自在だなおい。驚くの通り越して固まったぞ。

その後、俺は背中を流すという申し出を拒否したのだが、押し通され、背中だけではなく身体中を弄られながら洗われたのは別の話しておく。

\*\*\*\*\*

湯船から出されること数十分、俺はようやく再び湯船に浸かることができた。体に染み渡る心地よさ、解ける緊張、癒されていく疲れ、これほどの疲労回復に特化したものはないというほどの満足感を感じさせてくれる。やはり、風呂は最高だ。

まあ、レイルに身体中を弄られたりしなければもつと良かったわけだが。

「もう、あまり怒らないでくださいよ」

「……怒るに決まってるだろ。いきなり後ろから抱きついて弄るか普通」

「……………」

「何故そこで首をかしげるんだよ」

そんな他愛もない話をしながら今日一日の疲れを取っていく。

そんな時、会話が一瞬途切れると、レイルがある事を口にした。

「そういえば、司様のギフトに”平穩の鎖”と”過去ノ傷跡”というものがありました  
が、あれらは一体どういうもののですか？」

「どういふものなのですかって言われてもなあ……」

俺はそう言っって頭を搔く。

実際のところ、あの二つのギフトについてはまだ何も把握できていない。

白夜叉に聞いたが全くわからないし見た事もないという。

唯一、少しはギフトの事を知っているであろう黒ウサギに聞いても首を振るといふ始末。

ぶつちやけ、情報元から詳細を聞けなかったため、なら仕方ないかと泣き寝入りするしかなかった。

「結局のところ、まだ何もわかってないんだよ。白夜叉や黒ウサギに聞いても首振って分かんないって顔するし」

「そうなんですか」

「お前は何か知らないのか？」

「そうですねえ……似たようなギフトを持った方なら二年前に見た事がありますよ」

「本当か!？」

俺は声を荒げてレイルに詰め寄る。

似ているギフトを持った奴がわかれば、これらのギフトの正体を知る事ができる。そうなければ……どうなるかはわからないがまあどうにかなるだろう。

「そんな期待を抱いてレイルを見つめるが、ですが、と言葉を濁す。

「その人は二年前に行方不明になってるんです。突如姿を消したってやつです」

二年前というフレーズが気になったが、それを聞いた途端、俺は落胆と期待外れというものを同時に感じる。

何かわかりかけたが振り出しに戻る、というなんとも推理小説なんかにはありそうな展開である。

なんとかなるだろうと俺は早々に諦め、大きく息を吐いた。

途端、凄まじい睡魔が襲ってくる。俺はそれに身を任せ、ゆっくりと目を閉じた。

\*\*\*\*\*

「ゲホッ、ゲホッ………どこだ………？」

茶髪の少年は土煙を吸い込んでむせつつも周囲を見渡す。

それに続くように咳き込む黒髪の少女と白髪の少年。

「し、篠宮先輩、本当にここであつてるの……？」

「雪城の言つた通りの軌跡を辿つたんだ。合わないはずがない。だろ？」

「勿論です。間違いなく、神野先輩はここにいたはずですよ」

「むう、それはそうなんだけどさ、でもここ湖のほとりだよ？いきなり消えたのにこんなところに来るかな？」

「九條は僕が間違っていると聞いたいの？」

「誰もそんな事言っていないじゃん。満は間違えてない………はず」

「その『はず』が間違っていると云っているようなものだけどね」

九條と呼ばれた少女が雪城満みつると呼ばれた少年に何やら弁明をしているが、篠宮と呼ばれた少年はそれに見向きもせずにある一点だけを眺める。

そこは、箱庭の中に入る門がある場所だった。

「おい愛里紗ありさ、雪城、さっさと行くぞ。どこに行ったかわからなくなっちゃう」

「はいはい」

「はいは一回でいい」

「へーい」

「雪城、愛里紗を一発しばいておけ」

「面倒いので拒否します」

三人はそんな他愛もない話をしながら歩みを進めていった。

## 外道とのギフトゲーム開始だそうですね？

ガルドとのギフトゲーム当日。俺たちは、「フォレス・ガロ」の本拠にいた。

ギフトゲームエリアに設定されたはいいのだが、そこは完全にジャングルと化していた。

木々が生い茂り、蔦が柱などに巻きついている。どう考えても人間が住んでいるようには思えなかった。

「本当にこんなところでやるのか？」

『「契約書類」に記されたことは絶対、ここ以外で司様たちのギフトゲームが行われることはあり得ません』

「なら良いんだけどさ……」

肩に乗っている小型の炎の鳥、レイルが言った。言われたことには一理ある。だが、なぜか違和感が取れない。

ここに訪れた途端感じた、ゾワリと背筋を撫でるような違和感が。

「……これは……」

「どうしたのですか、ジン坊ちゃん」

「これを見てよ黒ウサギ」

「はいな。ええつと……………これは非常にまずいですね」

「どこかから取ってきた『契約書類』を険しい顔で見ている黒ウサギとジン。何か不具合でもあったのだろうか。」

「なんかあったのか？不正とか？」

「ギフトゲームでは不正はできません。というか不正があれば、即座にこの黒ウサギが箱庭の中枢に知らせるのですよ」

ふんすと胸を張り、ウサ耳をピンと張る。

「なら何があつたのよ」

「見てみてください。この『契約書類』」

差し出された羊皮紙を俺と飛鳥、耀は三人で見る。ちなみに十六夜はどこか一点を見ていてこれを見る気はないらしい。

『ギフトゲーム名 ハンティング』

・プレイヤー一覧 神野司

久遠飛鳥

春日部耀

ジンⅡラッセル

- ・勝利条件 指定武器でのガルドIIガスパーの打倒、または殺害。
- ・ゲームルール

指定武器はゲームエリア内にある。

指定武器以外の攻撃では、ガルドIIガスパーに傷を与えることすらできない。上記を尊重し、誇りと御旗の下、ギフトゲームを開催します。

『フォレス・ガロ印』

一通り読み終わると、俺はため息をつく。確かに、これは二人が険しい顔をするのもわかる。

ガルドは指定武器でしか殺せず、それ以外の攻撃は無条件に受け付けられないというなんともやりにくいことこの上ないゲームになっているのだ。

だが、指定武器でしかという条件が付くなら武器のある場所は簡単にわかる。

それなのに違和感は消えない。俺はその違和感を警戒しながら、ゲームを開始してジャングルと化した本拠へと足を踏み入れた。

\*\*\*\*\*

ゲーム開始から十分程度経っただろうか。なのに、一向にジャングルの外に出る気がしない。このままでは体力の無駄な浪費である。

どうしようかと悩んでいると、耀が突然木の上へと登る。

そして目を猛禽類を思わせるようなものにして、とある一点を眺める。すると何か見つけたのか、見ていた方向を指差して言った。

「あっち。何か動く影が見えた」

でかした、と俺はサムズアップすると、耀の指差した方向を目指す。

程なくして俺たちは屋敷のような建造物の目の前が出る。

耀によると、二階にガルドはいるらしく、一階にはいらしいので堂々と扉を開けて中を確認する。

玄関はは吹き抜けで、玄関からは一階や二階の全てが見渡せるようになっていた。案の定、ドアなどは閉まっているが。

「さてと、それじゃあジンと飛鳥はここに残れ」

「な、なんでよ!?!」

「そうですね!そ、それに二人で行くなんて危なすぎます!」

「……誰も役立たずだから置いていく、という理由で言ったわけではないぞ。レイルも

置いてくし」

『なぜ!』』

飛鳥達は理解できないといったふうに抗議してくる。レイルもレイルで自分に矛先が向くとは思わなかったのか、わたわたと慌てている。

「お前らをここに残すのは退路の確保だ。相手はあの外道のガルドだ。どこかに伏兵がいるかもしれない。そんな時、退路がなくて挟み撃ちなんてのは勘弁だ。だったら退路を確保しておく必要があるだろ?」

「ま、まあ、確かに一理あるけど……」

『ですが、ガルド一体だった場合はどうするのですか?』

「指定武器はおそらくガルドがいる部屋にある。それを回収してお前らと合流するよ」  
別にこれは時間制限があるわけではない。ゆっくりじっくりとガルドを追い込めばいいのだ。

つまり、これは頭脳戦。肉弾戦はルールにより不可だし、長期戦は流石に無理だろう。女性陣が。

そうと分かれば一時撤退は必ず必要だ。

俺は退路確保を三人に任せて、耀と共に二階へと上がる。

「耀、もしかしたらガルドが超強化されてる可能性がある」

「……なんで？」

「指定武器で打倒つてことはそれなりのギフトを受け取った可能性が高いからだ。その場合、指定武器は諦めて撤退する。いいな？」

「……………うん」

「その沈黙の部分が不安要素なんだけど、まあいいか」

俺と耀は二階の部屋を片っ端から調べていく。だが、どこにもガルドはおらず、残るは大きな扉のある部屋だけとなった。

「いくぞ、耀」

「うん……………」

ギイ、というなんとも古そうな音を立てながら扉を開ける。

その先に見えたのは——

「G a a a a a A A A A A A A A !!」

白毛の化け物と化したガルドⅡガスパーの変わり果てた姿だった。

\*\*\*\*\*

「逃げろっつ!!」

俺は今まで出したことない大声で叫んだ。

それは飛鳥達に届いたようで、すぐさま屋敷から出ていく飛鳥達が二階から見える。

俺は一瞬安堵して、耀がいた方を見る。だが、そこに耀の姿はない。

まさか、と思い視界を巡らせる。そこに映ったのは、壁に突き刺さる銀色の剣へと手を伸ばしている耀の姿だった。

「(あの馬鹿っ……………!!)」

俺は全力で地面を蹴って、耀の元に向かう。

耀は剣を手に掴むと表情を明るくして周りを見る。その視界にガルドが映らなかったため目に見えて動揺する。

そして、突如隣に出現したガルドの前足に壁まで吹き飛ばされる。

「か、はっ……………!?!」

肺の中の息が全て外へと吐き出される。

それを好機と見たのか、ガルドは跳躍し、耀に飛びかかる。

俺はその間に入り、耀を庇うように手を広げる。

その次の瞬間、ガルドの鋭利な前足の爪は俺に振り下ろされた。

三本の傷と飛び散る鮮血。走る激痛に歯を食いしばって耐えながら、ガルドを睨みつける。

ガルドは一旦距離をとって唸り声を上げている。

目を瞑っていた耀は恐る恐るといったふうに関目を開けて、驚愕の表情を浮かべる。

「つ、つか、さ……………？」

「つたく、どう、して……………言うこと聞かないかな……………」

ゲホツと咳き込んで吐血しながら俺はぼやく。

それにしてもどうしようか。逃げるにも完全に俺が足手まといだ。逆に捕まって共々あの前足の爪の餌食になるだろう。

俺は即座に判断して耀をチラツと見て、声を振り絞って告げた。

「耀、その武器、持って逃げる……………」

「え、えっ……………!?!」

耀は俺が何を言ったのか把握できなかつたのか、目を見開いて俺を見ている。その瞳は今にも泣き出しそうに涙がたまっている。

「俺は今、走れない。だから、お前、だけでも逃げる……………」

「な、なら、私が担げば……………」

「それ、なら…………二人ともお陀仏だ…………」

「でも、でもっ!!」

「……………いいから、さっさと逃げろ」

「……………っ!」

俺は多少の怒気を含んだ声音で耀に言う。耀はまだ納得できないのか、言葉を模索している。

「……………なら約束だ」

「約、束…………?」

「かな、らず…………生きてお前、らに追いつく。いい、か、必ずだ」

俺はできる限り出せる声を振り絞って咄嗟に思いついたことを言う。痛みのせいで頭が朦朧としてきて何かを考えている暇なんてなかった。

耀は渋々といったふう俯いて、分かったと一言言って部屋を出て行った。

「(やつ…………ちまったな…………)」

耀を逃したのはいいのだが、どう考えても生きられる確率が低い。

だが、傷が与えられないだけであつて攻撃は相殺できるはず。

…………ならばやることは一つだけか。

「おいコラ、この虎風情が。相手は俺がしてやる。かかってこい、このド外道が!!」  
俺は強気に叫び、地面を蹴った。

\*\*\*\*\*

一方、その頃、十六夜はある一点を睨んでいた。

先ほどから睨み続けている十六夜が不安になったのか、黒ウサギが問いかける。

「あ、あのく……どうかしたんですか？」

「ちよつとな。……そろそろいذار。さっさと出てこいよそこの三人」

十六夜が言及すると、背後の茂みがガサガサツと揺れる。

「……バレてるじゃないですか！」

「あるえ？ 隠蔽魔法使ったはずなのになあ」

「この場面で使うのは隠密魔法では？」

「……………あ、いけね。間違えた♪」

「キモイです最悪です死んでください」

「辛辣だなあ……………」

コソコソと小声で話しているのが聞こえてくる。ちなみに十六夜達には丸聞こえである。

「さっさと出てこい。でなきゃ……………」

十六夜の纏う雰囲気が一気に危険なものへと早変わりする。

流石に身の危険を感じたのか、三人はすぐに茂みから出てくる。

出てきたのは、茶髪でジャケットを着た少年と白髪でメガネをかけた学ランの少年、そして黒髪ロングのセーラー服を着た少女の三人だった。

「怖い怖い。俺たちはただ人探ししてるだけだったの!」

茶髪の少年は頭を掻きながら言った。

十六夜はそれを聞き流し、鋭い視線で睨みつけながら問う。

「お前らは何者だ?」

「ん?俺?俺は篠宮英太だ!」

「私は久城愛里紗です!」

「僕は雪城満です!」

「で、誰を探しってるって?」

「ああ、そうだった。ここに神野司ってやつはいなかったか?」

英太が平然とそう問うと、十六夜は訝しんで目つきを鋭くする。

「司に何か用なのか？」

「ということは知っているということだな。で、あいつはどこに？」

「今、ギフトゲーム中です。終わるまでは会えないかと」

「なんだ。すぐは会えないのか」

英太は面倒臭そうに息を吐き、木に寄りかかる。

十六夜はその姿を見て、ニヤリと笑みを浮かべる。

「なあ、お前今暇だろ？」

「ああ、現在進行形で暇だ」

「なら、俺と決闘しようぜ」

「嫌だ」

「ルールは無制限で……なんだと？」

十六夜は予想外の返答に目を見開く。

英太は面倒臭そうに言った。

「今は乗り気じゃない。やるならその二人とやってくれ。それでもいいか、二人とも」

「構いません、けど……」

「別に、時間が潰せるのでしたら」

英太に言われると、さつきまで黙っていた二人の瞳にほんの少しだが闘志が灯る。

それを見た瞬間、十六夜の中で何かが湧き上がり始める。心躍るようなものが。「そうこなくつちやな」

十六夜は不敵に笑い、己の敵を睨みつける。

その次の瞬間、二人と一人の間に羊皮紙が現れた。

『ギフトゲーム名 暇潰し決闘

・プレイヤー一覽 逆廻十六夜

久城愛里紗

雪城満

・勝利条件 降参させる、または時間切れ（時間切れの場合は引き分け）。  
己の誇りをかけて、勝負することを誓います。

” ” 印』

## 正体不明と規格外?達だそうですよ?

久城愛里紗は値踏みした視線を目の前の金髪の学ラン少年、逆廻十六夜に投げかける。

「(こんな人が、司先輩と……?野蠻で粗野で篠宮先輩と同じような快樂主義者感が漂うこの人が?先輩と行動を共に?……ありえない)」

愛里紗の十六夜への視線がキツくなっていく。いつしか値踏みしていた視線は、完全な睨みへと変わっていた。

「(あの目の腐っていたド底辺先ばーりじゃなくて、あの優しい先輩がこんな人と……)。何かの幻想だよね)」

愛里紗が心の中で思っていることは、なぜ司が英太と友好的なのか、ということにもなるのだが、愛里紗はそれに気づかず、首を振って思考を振り払う。

「(……とりあえず今はこの人を負かすことだけ考えよう。満と二人なら楽勝だろうけど)」

そう決意して愛里紗が拳を握った時だった。

バニーガールのような奇抜の服装をした箱庭の貴族、黒ウサギが片手を天に掲げ、高

らかに告げる。

「それでは、これよりギフトゲームを開始します！両者、準備はよろしいですね？」

「ハッ、いつでも来いってんだ」

「別に、いつでもどうぞ」

「いつでもそのふざけた篠宮先輩みたいな男の顔面を吹き飛ばすことは可能です」

「おい待て、ふざけたってのは否定しないが顔面吹き飛ばすってどういうことだ」

「ちよつと待って、どうして俺そこでデイスられるの？」

「では、ウサギさんコールお願いします」

「おいこら無視すんな」

「では、ゲームスタートです！」

「テメエも聞けや変態痴女ウサギ!!」

十六夜と英太の叫びという嘆きを完全に無視しつつ、ゲームは開始される。

コールが終わった瞬間、愛里紗は近くにあった木まで駆け寄り、その木に触れる。

愛里紗が木に触れた瞬間、木が根っこから葉まで余すところなく虚空へと消える。

「何……………?!?」

十六夜はその光景に目を疑う。

引っこ抜く、砕く、投げ飛ばすならまだ十六夜でも納得できたのだが、触れただけで

消すなんて光景を見たことがなかったため、驚きを隠せない。

だが、今はゲーム中。そんな時に止まっていることなど出来ず、とりあえず駆け出そうと地面を蹴る。

「遅い」

「……………ツ!?!」

蹴った途端、視界の端に黒い学ランが映る。次の瞬間、脇腹に迸る痛みで顔を歪めながら地面を転がる。

手をつけて止まって見上げるとそこには、無表情で佇む雪城満が立っていた。

「遅すぎる。さっきの威勢はどこに行っただんですか?」

十六夜はその言葉を聞き入れず、さっき何が起こったか思考する。

愛里紗が木を消し、十六夜が駆け出した。これまでは良かった。だが突如、虚空から満が現れたのだ。

一瞬のうちに何が起きたか理解できない十六夜だったが、このまま考えていては拉致があかないと割り切って目の前の敵を睨む。

「いい蹴りじゃねえか。でもなあ、本当の蹴りってのは——こうやってするんだよ!!」

十六夜は、高速で満に瞬時に迫り、鳩尾めがけて蹴りをかます。

満は流石に反応できなかつたのか、無防備の状態で蹴りをもろに受ける。

衝撃が強すぎたのか、満の背後にあった木を数本粉碎しながら満は吹き飛ぶ。あまりに凄まじい威力のため、土煙が立ち上がる。

土煙が晴れた時には、無残に折れた数本の木と激痛に顔をしかめる満の姿があった。

「つたく、なめんじやー」

ドパン。

十六夜の言葉を遮る程の大きな音が辺りに響く。

十六夜はその音に聞き覚えがあった。

ーーー銃声

そう認識した途端、右肩に異様な痛みが走る。そこに視線をやると、木の破片が深々と肩に刺さっていた。

「な……が……つ!？」

それを視認した直後、遅れて痛覚が刺激される。かつて感じたことのない痛みが十六夜を襲う。

そんな十六夜を見て、愛里紗はほくそ笑む。

「どうですか、私特製の木銃のお味は。木の破片をそのまま使ってるので結構痛いと思

うんですけど」

「どう、いうことだ……?」

「あ、この銃のことですか?これはですね、私の”物質オブジェクト転換”で作ったんですよ。木を銃に変えて、ね」

愛里紗は、木製の銃を地面に置く。するとその木製の銃は消え失せ、虚空から消えたはずの木が突如現れる。

「ま、触れていなければ元に戻ってしまうっていうのがネックなんですけどね。では、満もノックアウトしてますし、私だけではあなたの身体能力について行けそうにないので終わらせましょうか」

愛里紗はそう言って、スカートのポケットから金属製のペンダントを取り出す。それを銃形態へと変化させていく。

「逆廻さん、でしたよね。超電磁砲って知ってますか?」

「……………それ、がどう、した……………」

「超電磁砲っていうのは金属の銃弾を電力を用いて打ち出すことで、音速を超える速度を出す最高威力の兵器だと私は独自に解釈してるんですよ。で、それが私の手元にあると」

「……………ッ!?!」

ハッと息を呑み、愛里紗を見る十六夜。その手には、小型だが普通の銃の形態とは少々異なっており、先端の部分で青白い光がバチバチと音を立てている。

「まあ、これも私の想像の産物なんですがね。でも、多分あなたを吹き飛ばすことぐらいはできますよ?」

愛里紗は銃口を十六夜へと向ける。顔からスツと表情を消して十六夜に問いかける。「降参するなら今のうちです。私、人殺しはしたくないので降参してくれるとありがたいんですが」

「……しないと云ったら?」

十六夜が不敵に笑みを浮かべてそう告げた瞬間、十六夜の頬を何かが掠った。その直後、地を震わせる轟音と木々や木の葉、岩石を吹き飛ばし、粉碎する豪風が駆け抜ける。「この照準を、あなたの頭に向けられることになります」

依然無表情で告げる愛里紗に十六夜は冷や汗を流す。

十六夜が感じるのは、ただただ牽制のための殺意、そして殺したくないという意思のみ。十六夜には、ここで自分が降りなければ必ず愛里紗は撃つてくるということがわかっていて。

そして、十六夜が出した結論とは――

「……………はあ、参った。降参だ」

降参、ただそれだけだった。

こうして、十六夜と愛里紗&満の暇つぶし決闘もといギフトゲームは、満身創痍の満、肩に傷を負った十六夜という風になり、実質愛里紗の一人勝ちみたいなものだった。

## 正体不明は天井知らずだそうですよ？

side 十六夜

——俺は負けた。

今までは考えられなかったことだった。誰だって俺を恐れ、誰だって俺が迫れば逃げ惑う。俺はいつもそう思っていた。今回もそうだった。

だが、現実はそのようなものではなかった。

”悪ふざけ”の力なんぞで勝てるような世界ではない、そう実感させられた。

だからと言って、その”敗北”によって俺にもたらす被害は極小だった。

この世界にいるやつはどんな奴らなのか、それが気になったのもあるからかもしれない。

いつの間にか口角が上がり、ニヤケ顔になっていた。

先程の戦闘での感覚が残っているのか。あの短時間の中で味わった快樂という感覚が。

さっきの戦闘ではしてやられた。俺にダメージを与えてなお、膝をつかせたままだ立たせまいとする眼光。あれほどの殺意は見たことがない。それに怯んだ俺も俺だが。

あれは俺のいい好敵手になる。……そうなってくれる前に折れてもらっては困るのだが、まあ心配はいらないだろ。

一人思いに更けていると、黒ウサギに箱庭のことを聞いているあの二人とは別に、俺の隣に立っている奴——確か、篠宮英太だったはず——は俺を一瞥する。

見られて困る目のものないので、無視を決め込む。

「なあ、逆廻」

「十六夜でいい」

「それじゃあ十六夜、お前さ——」

何で手加減したんだ？」

「は？」

篠宮は突拍子もなくそんなことをほざく。意味が不明にも程がある。というか突然すぎて、脳が追いつかない。てか、どうして俺がそんなことを言われなくてはならない。

「訳がわかんねえな。理由は？」

「攻撃に対する反応が遅すぎ。あと、あの蹴り。やろうと思えば雪城の五臓六腑ぐらい潰せたる？」

「んな人外じみたことができるわけ」

「出来るだろ。愛里紗の超電磁砲の弾道を目で追えたぐらいなんだからよ」

「……………」

「あれ、音速超えてるんだぜ？なのにそれを目で追えるっておかしいとは思わないのか？」

さつきから何なんだこいつは。

どうしてこいつは俺を以前から知っているような口ぶりで、しかも自信満々な口調で言える？

と疑問に思ったが、言及されたことはすべて真実に限りなく近かった。

あの電磁砲の弾丸も目で追えたし、あの雪城とか言う奴を殺そうと思えば殺せたかも知れない。だとしても、確信がない。

「なら、俺ならあいつらを殺せた、とでも言いたいのか？」

「お前だけじゃない。下手すりゃ司でも倒せる」

「へえ…………」

司でも倒せるのか……。なら俺なら楽勝じゃねえか。

件の司は、未だギフトの扱いがぎこちない。俺やお嬢様、春日部には格段に劣る。その司でも倒せるというのだ。ならば、俺が倒せない、というのはおかしいということか。

「……………ああそうだな、本気なんて口だけで出しちゃいねえかもな。でもな、生憎俺は自分の限界つてのをちゃんと理解してねえんだ。だから、あれが本気とは言わねえが、どれが本気かなんて俺にも分かんねえんだよ」

「天井知らず、か。……………ハッ、俺と一緒かよ」

「なんだ、テメエもか？」

「ああ。生まれてこの方、本気なんざ出したこともないし、限界なんて知ったこともない。ていうか知る気もない」

「なるほど……………」

さつき感じたのはこれが理由か。こいつが俺と同じ穴の貉ということだからか。

俺の向ける視線が気に食わなかったのか、ムツと顔を顰める篠宮。だが、すぐに表情を戻し、咳払いをする。

「……さて、本題はこれからだ」

「あ？俺が本気だったかそうじゃないか、が本題じゃねえのか？」

「んなわけあるか。それだけだったら自己完結で終わらせるわ。俺が本当に聞きたかったのはそれじゃねえんだよ」

「じゃあなんだってんだ？」

俺が頭上に疑問符を浮かべると、不敵に笑い、右手に持った辞典のような書物を俺に

見せる。

「……お前そんなの持ってたか？」

「ちよつとお前にいい話があるんだ。乗るか乗らないかはお前の自由だ。あと、話聞かないとかお前に選択肢ないから」

篠宮は俺の返答を待たずに話を続けていった。男女平等、人類皆兄弟、人には平等に選択の権利があるとは誰が言ったのか。

唯我独尊の方がいいんじゃないか、何て思ったが口に出さなかったのは言うまでもない。

話はものの数分で終わった。事務的な詳細説明とそれによる利益を俺に話したただけだった。が、俺にとっては心惹かれるだけに十分な説明だった。

「……で、どうだ、面白そうだろう？」

「……聞く必要あると思うか？」

「いや、念の為だ」

篠宮の顔を見ずに俺は答える。

無意識のうちに俺は口を手で覆っていた。俯いているからおそらく他の誰かに気付

かれてはいないだろうが、今の顔は他人に見せられるような代物ではない。

何故なら——今までにないほどの狂気に満ちたニヤケ顔だろうからだ。恐らく、

子供が見れば泣くんじやないだろうか。

「くくく、ヤハハハハハッ！」

俺は堪えきれず、天を見上げ狂ったように笑う。

どうしてだろうか、これほど次の闘いが楽しみだと思つたことはない。まさかここま  
で心踊ることがあるとは思わなかつた。それでこそ、元の世界を捨ててここまで来た甲  
斐があつたというものだ。

さあ、誰でもいいからかかつてきやがれ。俺はお前らを

真つ向から捻り潰してやる

狂気に満ちた笑みとともに、己の内でもまだ見ぬ敵に告げた。  
そこに——、未だ感じたことのない快樂が待つことを信じて。

s i d e 十六夜 o u t

\*\*\*\*\*

「(……………ジリ貧だな、おい)」

司は滴る鮮血を拭いながら、荒い息を吐く。

司が鋭い眼光で見据える先には、幾度となく殴り、火で炙ったはずの白い虎、ガルド

「ガスパーだった。」

だが、「契約書類」のギアスによって指定武器だけでしか傷をつけられず、ガルドには一切の傷が付いてない始末。その代わり、数十分に至る攻防を繰り返した司の体には幾つもの傷が刻まれており、最初に食らった腹部の三本の傷からはおびただしい量の血液が未だ出続けている。

脳内で、これ以上戦ってはまずいと警鐘が鳴っているのだが、司にはどうしても退けない理由があった。というより、退くことができなかった。

「G A A A A a a a a a a a a a a !!」

「くそつたー！ー！ー！ー！ー！ー！？」

迫るガルドを避けようとした途端、司の動きが止まり、壁へと弾き飛ばされる。

肺の空気が空気中へと吐き出され、激しく咳き込む。

司はすぐさま立ち上がろうとするが、足を踏ん張った瞬間に顔を顰め、片膝をつく。

ついた右足ではなく、左足を押さえながら苦悶の表情を浮かべる。押さええた先には、大きな切り傷があり、未だに流血が止まっていない。

「(ミスった……。まさか、足に食らうとは……)」

自嘲気味に笑みを浮かべる司。誰が見ても、最悪と言っているほど状況は最悪だった。

だが、司の不幸はこれだけでは終わらなかつた。

司の視界が突如、グニヤリと歪め始める。

度重なる攻防と、それに伴つて増え続けた傷、そしてそれから流れ出す鮮血が司からあらゆる感覚を奪つていく。

体温、感覚、思考、視覚あまつさえ意識も奪つていく。

その現状に、司は内心で舌打ちしながら祈る。

「(万事、休すか……………)」

なすすべもなく、その場に倒れこむ。そのまま、司の意識は深い暗闇へと落ちていつた。

一言の言葉とともに。

『司君は、私が守ります』

\*\*\*\*\*

飛鳥、耀の二人は、ジンを森へと残して屋敷まで戻り、ガルドがいる屋敷の前まで戻ってきていた。

ちなみにジンは飛鳥のギフトで眠らせている。

「さてと、本当にどうしたものかしら？」

「……………私のせい、だよね」

「春日部さんのせいじゃないわ。司君も、そう言っただんでしょう？」

「……………言っつてない、一言も」

「あ、あら？ そうだったの？ ……ま、まあいいわ。それよりも、あの外道をさつさと倒し」

突如、飛鳥の言葉を遮り、何かが破壊された音が辺りに響く。

その直後、何かが地面に激突する。

「な、何が起きたの!？」

「飛鳥、あれ!」

耀が驚愕の表情を浮かべながらも、ある場所を指差す。そこには、地面に倒れ伏し、流血しているガルドの姿だった。

耀は、その姿に目を見開いて固まっている。

これは司がやったのか、と思考を巡らせる。だが、「契約書類」によってガルドは指

定武器でしか傷をつけられないため、司ではないと即座に判断する。

では誰が？と疑問が浮かんでくるが、その疑問は次の瞬間にはかき消される。

「Gu, G A A A A A a a a a a a a a!!」

ガルドが耳をつんぎくような咆哮を上げ、飛鳥たちへと突進してくる。

「春日部さん、手筈通りに行くわよ！機会は一度だと思つてやってちょうだい！」

「りよ、了解！」

飛鳥は後退し、耀は真つ向からガルドへと走る。

好機と見たガルドは、鋭利な爪を耀へと振るう。が、耀がグリフオンのギフトを使い、上空へ飛び上がることで爪は空を切る。

ガルドはその光景に目を白黒させて驚くが、すぐに態勢を立て直し、耀への攻撃の手を強める。

耀は、それを身を翻してかわし、誘導するように動き回る。

飛鳥と耀は、事前に打ち合わせをしており、耀が囹役としてガルドを引きつけ、飛鳥はトドメを刺すことになっていた。

「春日部さん、そこから退いて！」

「うん！」

『木々たちよ、その虎を拘束しなさい』

飛鳥のギフトに従って木々が、枝を伸ばしてガルドの体に絡めていく。ガルドは逃れようともがくが、もがけばもがくほど木々が複雑に絡まり、強く締め上げていく。

「……さようなら、紳士さん。狂う前の姿を一度ぐらい見たかったわ」

もがくガルドの額に飛鳥は白銀の剣を突き刺す。

ガルドはもがく力を強くしたが、剣が脳を貫いた途端、ビクツと震えて風化したものが崩れゆくようにサラサラと砂のように消え去っていく。

ガルドⅡガスパーは、勇敢な若者たちの手によってこの世から消え去った。

## ギフトゲームのその後らしいですよ？

「時は巡る。幾万もの命が失われようと時は無情に巡る。だが、私はその時を止めはしないし、失おうとも思わない。ただ流され、殺やりたいしたいように殺やるすだけ。それが私の本望であり、使命である」

「……何言ってるのさ」

箱庭の東区画の都市部付近のとある森林にある崖に腰をかけたボロ切れたローブを被った少女が淡々と告げているのを苦笑いしながらそばに立って見ているローブ同じようなローブを被ったローブ少年がいた。

少女は少年の方を向き、微笑んで言った。

「私の”先生”が教えてくれたんだ。『これは私が生きるための糧であり、生き甲斐でもある』ってね」

「殺しが生き甲斐って……その人病んでるの？」

「さあ？でも、一度に数百人殺ったこともあるんだって」

「……そのえげつないことを淡々と話せる君も病んでると思うけどね」

たとえ他人のことだとはいえ、数百人も人間を殺したことを仮にも女性である彼女

の口から淡々と出てくることに、少年はさつきから若干引きながら聞いている。

少女は視線を空へと移し、遠くを見つめる。

「あ、あとこうも言ってた。『物事には必ず“表”と“裏”がある』とかなんとかか」

「……いまだにそれぐらいしか役に立ちそうにはないけど」

でも、と少年は付け加えて少女と同じ方向を見て言った。

「その言葉、今僕らが探しているものに当てはまらない？」

「うーん、どうだろ。私たちが探してるのって“裏”じゃなくて“存在”だし」

「まあ、それもそうだけど。あ、そういや、あんなことして良かったの？」

少年は突如話をすり替える。すり替えた話題が何か理解できていないのか、少女は小首を傾げて怪訝な目で少年を見ている。

「あれだよ。あの虎に撃ち込んだことだよ」

「……………今回だけの特別サービスだよあれは」

少女は立ち上がり、踵を返して歩き始める。

少年はあえてそれ以上は何も聞かず、その少女の後ろを歩いていく。

そうして彼らは、森の中に姿を消していった。

\*\*\*\*\*

ゲームを終えた飛鳥と耀は二手に分かれた。耀は傷を負った司の回収、飛鳥はガルド討伐の際に邪魔になるであろう飛鳥がギフトで眠らせたエンジンの回収である。

「(お願い……無事でいて……!)」

心で強く祈りつつ、耀は一目散にガルドがいた部屋へと向かう。

屋敷に入ると、ガルドのいた部屋のドアは開け放たれたままだった。

耀はギフトで自然と嗅覚を強化する。香ってくるのは、独特でエグみがあつてなおかつ極力嗅ぎたくない匂い。血の匂いだった。

耀の不安は一層募り、グリフォンのギフトを使い飛翔、一気に部屋にたどり着き、部屋内の悲惨さに息を呑む。

部屋には所々に血痕が散らばっており、えぐれた床やら何かが打ちつけられ凹んだ壁がこの中でどんな戦闘があつたかを想像させる。

部屋を見渡しているうちに耀は探していた司の姿を見つける。地面に伏し、血を流して倒れている。

「っ、司……っ!!」

耀は駆け寄り、抱き起こす。腕から足まで傷が複数あり、このままでは命に危険性があると素人である耀の目でも判断できた。

その状況に、ただただ見ていることしかできなかった時、ズドンという音が響き部屋が揺れる。

音の発生源らしき場所を見るとそこには血相を変えて耀の方に駆けてくる黒ウサギの姿があつた。

「耀さん！司さんの容体は……!?!」

「このままだと、確実に死んじゃう。お願い、黒ウサギ……!」

「はいな。司さんの命、この黒ウサギの誇りにかけて失わせはしませんので」

黒ウサギは耀から司を受け取り、自慢の脚で跳んでいく。おそらく黒ウサギならどうにかしてくれるだろう、と安心感に浸る耀だったが、同時にとてつもない罪悪感と後悔に襲われる。

どうしてあそこで一人勝手に駆け出したのか。どうしてそのリスクを考えなかったのか。どうして……

彼を置いて逃げなければならなかったのか。

その疑問全てが耀を蝕んでいく。

「私……は……」

拳を握りしめ下唇を噛んで悔しそうにうつむく。その目からは、光に反射して輝く雫が床に落ちていた。

耀はそこから動くことはなく、ただただ己の無力さに涙を流すだけだった。

\*\*\*\*\*

十六夜達の元へと戻った飛鳥は、十六夜とジンが「フォレス・ガロ」にコミュニケーションの旗を奪われた人々にその旗を返している中、休憩室にあてがわれた元「フォレス・ガロ」の建物の一室でくつろいでいた。

「……………最低ね、私は」

飛鳥は肩に手を当てて「否、震える肩を手で抑えつけていた。

仮にとはいえ、ガルドⅡガスパーという一人の人間の命を奪ったのだ。年端もいかないう少女である飛鳥がそれに動じないわけがなかった。

「(こんなに堪えるものなのね……人を殺めることというのは)」

今にも泣き出しそうにうつむき、ひたすら肩の震えを抑えようとする。だが、一向に収まらない。

彼女の頭の中で先ほど自分がした出来事がフラッシュバックする。

木の枝などに捕らえられ、なんの防御もなしに額を剣で貫かれるガルド。頭の中で繰り返し再生されるその光景で、ガルドの声で何かが告げる。

『「これでお前も——俺たちの仲間入りだ」と。』

その言葉が意味を知っている飛鳥はただ否定することもなく、そして肯定することもなく聞いているしかなかった。

その時、不意に部屋の扉が開く。そこには先ほど知り合ったばかりの司の知り合いだという篠宮英太だった。

「久遠さん、どうかした？」

「……………いい、いえ、なんでもないわっ！」

飛鳥は、平穏を装い問いに答えるが、英太は僅かな声の高鳴り様と潤んだ瞳を見逃さなかった。

「辛かったのか？意思があるかどうかわからない相手でも、他人を殺すってことが」

「な、何言ってるのかさっぱりわからないわね。私はこの通りいつも通りよ」

「なら、その震える肩はどう説明するんだよ」

英太の指摘にうつむき黙り込む飛鳥。大きくため息をつき、英太は呆れた様な表情で告げる。

「辛いならその全てその都度吐き出しとけよ。妙なプライド保とうと必死になってんじゃねえよ箱入り娘」

「な……………っ!？」

「つたく、辛いなら泣くなりなんなりして吐き出しとけての。あ、そうだった。この辺りは近づくなくて言って他人は近寄らない様にしてるから。んじゃ、また後で」

そう言い残して英太は部屋を立ち去る。一人残された飛鳥は、徐々に込み上げてくるものにととう耐えきれなくなった。

小さな嗚咽はいっしょに大きなものに変わり、後悔と押しつぶされそうな恐怖によってその涙は押し出される。

やがて大声を上げて泣き始めるのだが、それを知っているのは後にも先にも本人と部屋の外でドアにもたれかかり、天井を見上げている英太の二人だけだった。

\*\*\*\*\*

場所は変わって”ノーネーム”の本拠。

黒ウサギはお疲れ様と労う年長組の子供達の横を駆け抜け、一目散に医務室へと向かう。

医務室には大抵の薬があり、即治療するなんて代物はないが、傷の痛みを程度解消できて疲労も軽減させる薬なども少しならある。

それを知っていた黒ウサギの対応は素早く、司の服を脱がせて的確な処置を行っていく。

彼女に一切の雑念はなく、瞳にこもっている意思是『司を助ける』ことただ一つだけだった。

だが、その黒ウサギの瞳に困惑の色が映る。

「……………え？」

処置している最中に見つけた昔負ったであろう傷の跡が右腕の側面に伝う様にあつた。黒ウサギにとってそれは見覚えのあり、忘れることはできない傷だった。

昔、まだ”ノーネーム”が栄えていた頃、仲良くしていた少年と言いつけを破って本拠地を抜け出し、箱庭の外の森に入った時のことだった。獰猛な獣に襲われ、その時に黒ウサギを庇い、右腕に後遺症が残る様な大怪我をした。幸い、後遺症はなかったが、絶対に残る傷跡を負った。

その傷跡は、司が右腕に負っていたそれに似ていたのだ。

「……………そんなまさか。あるわけがありません。だって彼は——」

処置を止めずに思考を巡らせる黒ウサギ。だが、すぐさま頭を振り払い、その思考を脳の片隅へと追いやる。

「そんなはずがありません。司さんは、司さんです。彼ではないのですから」

仲良くしていた少年の名を忘れたことが心残りだったが、それをも振り払いそう結論付けた。

彼女は浮かんでいた疑問を解消することなく、なんともモヤモヤした気持ちで治療を進めていった。

後輩が少し本気を出すそうですよ？

「ふう……」

”ノーネーム”の本抛の応接間のような場所の窓枠に十六夜は腰をかけて夜空を見上げていた。そこに、セーラー服を身につけた九条愛里紗がやってくる。

「何やってるんですか、逆廻先輩」

「ん？」

十六夜は聞き覚えのない呼び方に違和感を覚え、首をかしげる。元の世界で少しばかりやんちゃしていた彼には後輩と呼べる者はおらず、”先輩”なんて言葉とは無縁に生きていた。

愛里紗はその対応のため息をついて説明付ける。しかも早口で。

「勘違いしないでください。司先輩と同じ年つばいし年上を敬わなければならないけどさん付けが似合わないなあと思って妥協した結果がこれですから」

「お、おおう……。てか、その言い方全く可愛くねえ……」

「可愛くなくて結構です」

プイツと顔を背ける愛里紗にヤハハと笑う。

そんな中、突如として会話の中に凜とした声が割り込んできた。

「そうか？ 私は十分可憐だと思うが」

その声は窓枠に腰をかけて座っていた金髪の少女から発せられたものだった。聞き覚えのない声を聞き、すぐさま首元からペンダントを取り出し、それを拳銃に変化させて構える愛里紗だったが、十六夜はそんなことを気にせず話を続けた。

「それは見た目の話だろ？ 確かにそれなりにいい女だが、俺の思う美人にはまだまだ遠い。少なくとも——胸があと——いや2カップほど大きくなけりやダメだな」

「ほお、君は巨乳好きかな？」

「デカけりやいいってもんじゃねえ。それなりの”ステータス”を兼ね揃えてねえと——」

十六夜がいい終わろうとした瞬間、二人の頬を何かが掠める。

目の前にいた愛里紗が口角をひくつかせ、頬を紅潮させて拳銃を構えていた。その手に握られた拳銃からはかすかに煙が漂っている。

「何の話をしているのですか。というか胸の話じゃないでしょう！」

「……だつてお前ペツタ「それ以上言うとその拙い頭に風穴あけますよ？」おつと失礼」あー怖い怖いと言いながら両手をあげる十六夜に少女はくすくすと笑っている。

あまりの状況のつかめなさに頭を抱えそうになった愛里紗だったが、ここで助け舟で

あろうコミュニケーションのリーダー、ジン||ラッセルがやってくる。

「あの……さつき物凄い爆発音みたいな音が聞こえたんですが……」

「あ、ジン君」

「おチビじゃねえか」

「ジンじゃないか」

「……やっぱり十六夜さん達ですか。子供達もいるんですから、あまり大きな音を出さないでください。あと、愛里紗さんも無闇矢鱈に発砲しないでください。あとレティシア様も笑ってないで止めてください。事態の收拾は早めにつけた方がってレティシア様ああああ!!??」

淡々と注意していくジンは金髪の少女、レティシアに目を向けた瞬間に目が飛び出んばかりに驚く。レティシアはそれを楽しそうにクスクスと笑って見ている。

これが”ノーネーム”の元同士、レティシア||ドラクレアとの邂逅だった。

\*\*\*\*\*

「……………ん」

場所は変わって”ノーネーム”本拠の一室、司は自身にあてがわれた部屋で目を覚ました。

「司さんっ！気がついたんですね！」

「あ、ああ……………」

うつすらと開けた目で見えたのは、ウサ耳を生やした童顔の少女、黒ウサギの心配そうな顔だった。

とりあえず起き上がろうとする司だったが、途端に身体中に痛みが迸り、その痛みで顔を歪める。

「無理はダメです！安静にしないで！」

黒ウサギはあわあわしながら司が起き上がることを止めさせる。

司の体は、ベッドから起き上がることでさえも痛みが走るほどに傷ついていた。  
「契約<sup>ギアス</sup>」で守られていたガルドとの戦いがいかに熾烈なものだったかを物語っている。

「……………ガルドは？」

「飛鳥さん達が無事討伐いたしました。ギフトゲームの方もクリアしております」

「……………そうか。よかった」

司は安堵の表情を浮かべてベッドに身をまかせた。

話にひと段落ついたと確信した黒ウサギはあることを司に問いかける。司達を召喚したあの日から心に何か引つかかっていたことを。

「司さん、つかぬ事をお聞きいたします」

「……………ん？なんだ？」

「司さんは、ご自分の出生をご存知ですか？」

それはさも、司が自分の過去を知らないといったような口ぶりだった。

誰しも親に聞いたことがあるだろう。自分がどうやって、どこで生まれたのか、その時の親の思いはなんなのか。そういった出生は一度は耳にするはずだ。

だが、黒ウサギは真剣な表情でしかも、確信を持って言ったのだ。

「……………なんでそんなことを聞くんだ？」

「……………やっぱいいいです。さっきの質問は忘れてください」

司が訝しんだような目つきになったのをみて、黒ウサギは顔を伏せてはぐらかす。

「（そんなはずがないのです。ただの思い込み、そのはずです）」

そう自身に言い聞かせる黒ウサギ。

それを未だ話がつかめない司はポカんと口を開けて眺めていた。

その時だった。本拠を揺らすほどの爆音が刹那、鳴り響く。それに反応して、司は飛

び起きるが、痛みで呻き声を上げてうずくまる。黒ウサギは何事かと声を荒げて立ち上がる。

痛みで悶絶する司を差し置いて黒ウサギは急いで部屋を出て行った。

\*\*\*\*\*

爆音を聞き、発生源へと駆けつけた黒ウサギが目にしたものは、

「うん？ああ、黒ウサギか。久しぶりだな」

空中に背中から翼を生やしているコミュニケーションからいなくなったはずの元同士のレティシア、そして盛大に土煙が巻き上がっているのを傍観している十六夜というなんとも訳のわからない光景だった。

「レティシア様!?!それに十六夜さんも。なぜこんなことに?」

「ああ、それはだなー」

十六夜がことの次第を説明しようとした途端、土煙の中から何かが崩れ去る音と怒号が響く。

「ああもう！なんで壊れるのよ！これ高かったのに!!」

それは、十六夜と同等に戦えたうちの一人、司の後輩である愛里紗の声だった。

何が起きているか全く理解できていない黒ウサギはそれを呆然と眺めていた。

「声がする、ということとは私の一撃は耐えたのだな」

「みたいだな」

「私の一撃って……どういふことなのですか？」

「実はだな——」

(十六夜説明中)

「——ということだ」

「ということだ、じゃないですよ！お馬鹿様ですか!?お馬鹿様ですよね!?それよりも、そんなことするためにジン坊ちゃんを（物理的に）寝かせないでください!というか、レティシア様もなぜそのようなことを？」

「いや、元いたコミュニティの人材の実力が知りたくて試させてもらったのだが、まああの程度の攻撃を受けきれたのであればそのような心配は杞憂だったのだろう」

適度に話がまとまり始めていた時、ちようど土煙が晴れた。そこには、地面に

鉄の破片がばらまかれ、その中心に立つ怒り心頭の愛里紗が立っていた。

愛里紗は空中にいるレティシアを睨みつけて言った。

「……ねえ、次って私の番ですよね？」

「うん？まあそうだな。だが、攻撃手段はあるのか？見た所手ぶらのようだが」

「ありますよ。作るから待ってて」

愛里紗は地団駄を踏むように右足で思い切り地面を踏みつける。すると、鉄の破片の全てが光り輝き始め、愛里紗の右手へと収束されていく。

やがてそれは、以前十六夜に向けて撃った超電磁砲の拳銃 *ver* を作った時に持っていたペンダントへと形を成していく。

光が収束し切った途端、またペンダントが輝き始め、形を再度変えていく。ペンダントよりも大きくなり、それは愛里紗の右腕をも超える大きさになる。

そして光は徐々に弱くなり、正体があらわになる。

「ほお……お次は大砲サイズか」

それは、砲門に青白い電気を帯びた巨大な銃だった。その銃は過去に戦争で使われた大砲を思わせるような大きさであった。

その大きさと規格外さに度肝を抜かれたレティシアと黒ウサギは息を飲んで驚いている。

「拳銃verだと威力落ちちゃうんですよね。でもさ、この大きさなら軽くあんたぐら  
いなら吹き飛ばせます。もちろん、チリも残さずに、ね！」

愛里紗がそう言うのと、徐々に電力を増していく。青白い電気は眩い光を放ち、周囲に  
放電する。

それを見ていたレティシアは戦慄していた。

自分が去ったコミュニティにこんな人材がいるのか、と。

そして諦めたかのように目を瞑る。だが、それに気づいていない愛里紗は超電磁砲の  
引き金を遠慮なく引く。

刹那、レティシアが目を瞑ったのに気づいた黒ウサギはハツとして地面を蹴って飛び  
上がる。レティシアを抱きかかえてかろうじて超電磁砲を回避し、地面に着地する。

レティシアを抱きかかえた際、黒ウサギはその服のポケットに入っていたギフトカー  
ドを抜き取る。

「な、黒ウサギ何を……っ!?!」

「そんな馬鹿な、神格が残っていない…!?!」

レティシアのギフトカードに記されているギフトは、ロードオブ・ヴァンパイア「純潔の吸血騎士」のみだった。

その事実には黒ウサギは驚きを隠せずにいた。当のレティシアはバツが悪そうに顔を伏せている。

そんな時だった。どこからか野太い男の声が響く。

「いたぞ、あそこだ！」

黒ウサギ達はその声に気づくが、あたりに人影はなく、声を発した男らしき者もない。

だが、レティシアだけはハツとして黒ウサギの腕の中から抜け出す。そして黒ウサギをかばうようにして前に立つ。

その瞬間、褐色の光がレティシアに向けて照らされる。あまりの眩しさに目を瞑らざるを得ない三人。光が治り始めた頃合いを見て目を開けると、そこには――

灰色に固まったレティシアが虚空を見つめたまま立っていた。

「レ、レティシア様!?! 一体なにが……!?!」

「よし、件の吸血鬼を石化した。奴を捕獲しろ！」

「例の”ノーネーム”の連中はどうする!?!」

「邪魔するならば構わん、切り捨てろ！」

黒ウサギはレティシアの変わりように目を白黒させて驚いているが、レティシアを今の状態にした輩はそんなことは御構い無しに話を進めていつている。

やがて、レティシアの体はひとりでに宙へと浮き上がり、ある一定の位置で止まる。そしてその虚空から、数人の男が突如として姿を現した。

「なっ……、ゴーゴンの首を掲げた旗印……!?なぜあなた達のような人たちがこんなところに」

「それはこちらの台詞だ。我らは“ペルセウス”の所有物を回収しに来ただけのこと。それ以上言及するなら斬り捨てられる覚悟をしておけ」

空中に浮く男達は値踏みしたかのような目で黒ウサギ達を睨んでいる。それが気に入らないのか、十六夜は鼻で笑って言った。

「ハッ、うちのコミュニティに不法侵入しといてその言い様とは、お前ら礼儀がなつてねえんじゃねえのか?」

「黙れ”名無し”風情が。貴様らのような最下層のコミュニティなんぞに礼儀を尽くしては、我らの旗に傷が付くわ。身の程を知れ、この”名無し”風情が」

軽蔑のこもった声音で淡々と男が告げ終わる。十六夜は、はあ、とため息をついて呆れたように言った。

「おいおい、そんなこと言うなって。そういうこと言うとなーー」

突如、どこからかブチツという音が二つ聞こえてくる。その発生源らしき黒ウサギと愛里紗は額に青筋を浮かばせていた。

「な……、なんですって……!?!」

「……撃つていいですよ。あの礼儀知らず共に超電磁砲撃つていいですよ」

「ありえない、ええありませんよ。天真爛漫、温厚篤実にして献身の象徴とまで謳われた”月の兎”をこれほど怒らせるなんて……!」

「ぶっ放す。あのいけ好かない男共にぶっ放してやります」

黒ウサギは爆音を響き渡らせて光り輝く槍をどこから取り出し、愛里紗は侮蔑のこもった目で男たちを睨みつつ、超電磁砲を構える。

「雷鳴と共に現れる……?!?!まさか、インドラの武器!?!それにその砲門は……!?!」

「い、いや、ありません!最下層のコミュニティがそんな武器を持つはずがない!」

「そうだ!どうせその砲門もハリボテか何かだろう!」

稲妻を迸る槍を逆手に構えた黒ウサギと電気をあたり一帯に振りまく銃を構えた愛里紗は、

「その目で真贋を見極められないというなら……その身で確かめるといいでしょう!」

「ハリボテかどうかは、その身をもって確かめてください!」

二人同時に槍と超電磁砲を天に向かって撃ち出した時だった。

”セイバス  
断裂”

どこからか声が響き、男たちに向かっていた槍と超電磁砲を完全に威力を消し、無力化した。

「なっ!?!」

その事実が大きく口を開けて呆然としている二人。その二人に呆れたように声の主、篠宮英太が言った。

「あのさ、お前らバカなのか限度を知らんのか、どっちなんだ?」

「な、何してくれてるんですか!」

「そうですよ先輩! あいつら消せなかったじゃないですか!」

「何してくれてると言われてもなあ……。あと、愛里紗はもう少しオブラートに包め。ストレートすぎるわ」

英太が要らないことをしたと言わんばかりに食ってかかる二人。

その全てを傍観していた十六夜は、そうかと何かに気づく。

「お前らさ、あいつら消したかったんだよな?」

「ええ、それはもちろん！」

「当たり前です。人間が睡眠をとるぐらいに当たり前です」

「……九条のはよくわからんが、まあいい。篠宮が言いたいことはこうだ。『元お仲間のこと考えてますか?』」

「……………あつ」

そう二人は、石化され、すでに男たちによつて回収されていたレテイシアのことをすっかり忘れていた。

一歩間違えていれば、レテイシアは石のまま稲妻に砕かれ、高電圧によつて跡形もなく消し飛んでいただろう。

「……………怒りで我を忘れていたのですよ」

「……………まさか忘れるなんて……一生の不覚」

自分たちが何をしようとしていたのかを目に見えて反省する二人。その間に男たちが消えていることに気づいた十六夜は、首をかしげる。

「……………あの男共はどこに行った?」

「多分、見えなくなつてんだらうよ。俺には遠くの方に飛んでくのが見えてるから」

「……………なぜお前だけに?」

「魔法のなせる技」

「なるほど」

納得したかのように頷く十六夜だったが、状況が全く変わってないことに舌打ちする。

結局、元仲間は連れ去られ、相手のコミュニティもわからないまま――

「ちよつと待て。おい駄ウサギ」

「はいはいなんですかって駄ウサギってなんですか!？」

「箱庭の貴族(駄)でもーってこんな話してる場合じゃねえ。さっきの奴らのコミュニティを知ってるようだな」

「は、はい、知ってますが「答えろ。どこのコミュニティだ?」……………」サウザンドアイズ”の傘下のコミュニティ”ペルセウス”です」

「ペルセウス……………ゴーン倒したっていう英雄か……………」

英太がかすかに残っていた歴史の記憶から引つ張り出すと、黒ウサギはYesと肯定する。

「でもさ、ペルセウスって英雄なんですよね?なのにどうしてあんなことを…………?」

「…………その辺は黒ウサギも把握しかねます。本人たちに聞いてみない限りには」

レティシアが連れて行かれたことに黒ウサギと愛里紗は肩を落とす。かたや昔お世話になり、かたや少しばかりイライラしたが楽しい時間を提供してもらったのだ。

それを見ていた英太と十六夜の二人は、なぜかたを落としているのかわからないと言ったように首をかしげる。そして、とんでもないことを口にする。

「何言ってるのお前ら」

「サウザンドアイズ」の傘下のコミュニテイってことはわかったんだろ？なら、答えはひとつじゃねえか」

肩を落としていた黒ウサギ達は顔を上げ、二人を見る。二人は自信満々に、そして楽しそうに言った。

「ちよつと話し聞きに行くしかねえだろ喧嘩ふっかけに行くしかねえだろ！」

「なんか色々違う気がするのですが（するんですけど）!?!」

\*\*\*\*\*

黒ウサギがレティシア達の元へと着いた時までさかのぼる。その頃、痛みに悶えてい

た司は、動くことが不可能だろうと断定し、ベッドに身を預けていた。

そして、黒ウサギの質問を思い出す。

『司さんは、ご自分の出生についてはご存知ですか？』

その質問に先ほどは首をかしげた司だったが、少し考えると黒ウサギの考えている通りだった。

司には、出生の件については一切の記憶を持ち得てなかった。過去に父に聞いたであろうことも、あろうことか本当の両親のことも、全てが抜け落ちたかのように覚えていないのだ。

「……黒ウサギは何か知ってるような口ぶりだった。じゃあ、あいつは俺のことを知って……いやそんなわけではない。初対面……のはずだ」

なのに何故？と疑問が脳内で渦巻く。

だが、その疑問は脳内にあるだけで一向に解決できる気がしない。

「今度、黒ウサギに聞いてみるか……」

そう呟いて、司は突如襲ってきた睡魔に身を委ねるのであった。

規格外達が殴り込みに行くそうですよ？

レティシアを攫われたのを目の前で目撃した“ノーネーム”の一行は、攫っていったコミユニティ“ペルセウス”のリーダーが“サウザンドアイズ”の幹部と聞いて殴り込み<sup>向</sup>に行<sup>か</sup>つて<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た。

「で、先輩置いてきてよかったですか？」

「いや、あんな怪我人連れて行けるわけねえだろ。それに、司のことだ。あの金髪美少女を連れ去った奴らとまともに話できるはずがない」

司のことを今のところ一番よく知る英太が真顔で言うと、それに納得したように頷く。

それを聞くと十六夜はへえ、と声をあげる。

「司ってそんなに正義強いのか？」

「……………いやあ、正義強いというかなんというか……………。道理にかなってないことやるやつには容赦ないというか……………」

「沸きくらねえな。具体的に言うとなんなんだ？」

「……………愛里紗頼む。俺は言いたくねえ、というか思い出したくねえ……………」

十六夜に問われると顔色を悪くして十六夜から視線をそらす英太。それを見てため息をついて仕方なくといったように愛里紗は答える。

「わかりやすく言うのですね、鬼神が降臨します」

「は？」

「だから、そこに鬼神が現れるんです。極悪非道な悪魔でもお顔真つ青の」

「……………すまん、よく分からのだが」

「一緒のコミュニケーションにいるならいつか見ることできますよ」

愛里紗がそう言つて話を切り上げると、十六夜と黒ウサギにとつて見覚えのある建物が見えてきた。

そこ、”サウザンドアイズ”の支店の軒先には先日、黒ウサギ達の入店を断つた割烹着を着た女性が立っていた。

「お待ちしておりました皆さん」

十六夜達が彼女の前まで来ると、割烹着の女性は丁寧な口調でお辞儀をしてくる。先日との態度の変わりように黒ウサギは内心で小首を傾げる。

「先日と対応が全く違うのですが」

「……………今は状況が違いますから」

よく見ると、女性は少々げつそりしており、以前みたいなことを言うような余力は

残っていないらしい。

「中にお入りください。おそらく、あなた方が探している人がいるはずです」

「すんなり通すんだな」

「さつきも言ったように状況が違います。……後はお願いします」

力なく頭を下げる割烹着の女性を一瞥して一行は中に入ってしまった。

\*\*\*\*\*

「うわお！月の兎じゃん！初めて見たよ」

白夜叉の部屋へと行くと、そこには金髪でチャラそうな男があぐらをかいて座っていた。黒ウサギを見て下品な笑みを浮かべる男を見るや否や、愛里紗の目つきが鋭くなり、目の前の男を敵とみなしてペンダントを銃に変換して構えようとするが、英太がそれを諫める。

「なんじゃおんしら。こやつに何か用なのか？」

「はい。少しばかり用がありました」

白夜叉が神妙な顔で発した問いに黒ウサギは淡々と答える。

その後、白夜叉に言われ、一行は金髪の男の目の前に並んで座る。

「こやつは『ペルセウス』のリーダーであるレイオス・ペルセウスだ。知らんと思つたからとりあえず行つておくれぞ」

白谷者がそう言つた途端、愛里紗と黒ウサギの目つきが鋭利になる。だが、そんなことはどこ吹く風、レイオスは黒ウサギの全身を見ながら、

「君可愛いね。」ノーネーム」なんかじゃ肩身がせまいでしょ？うちに来なよ。そしてたから三食首輪付きで可愛がつてあげるぜ？」

下卑た笑みを浮かべながら女性陣にとつては最低最悪の言葉を投げかけるレイオス。

当然、そんなことが受け入れられるわけもなく、

「お断りです。礼節も知らぬ殿方に肌を見せる気はございません」

そつぽを向いて黒ウサギは拒否する。それに続いて十六夜と英太が声を上げる。

「残念だったな。黒ウサギは俺たちの愛玩動物だ」

「そうですそうです。黒ウサギは十六夜さんたちの………つて何かおかしくありませんか!？」

「そうだ。黒ウサギの足やら諸々は司のものだ」

「そうですそうです。黒ウサギの足やら諸々は司さんのつてなに言わせるんですか!？」

十六夜のふざけた受け答えに英太が真剣な表情で連続でボケをかましていく。それに続いて白夜叉ですらもボケていく。

「よかろう。それらすべて言い値で買おう！」

「売・り・ま・せ・ん!! 真剣な話をしに来たはずなのに、なぜ黒ウサギがこんなに怒らなければならぬのですか！」

「馬鹿だなあ。怒らせてんだよ」

「このお馬鹿様ああああああ!!」

スパパアーン！と凄まじい音を立てながら十六夜と英太の頭を叩いていく黒ウサギ。それをルイオスは爆笑しながら見ていた。

「ハハッ！何お前ら、お笑いコミュニティでも目指してるの？」

「そうではありません！それに今日はこんな話をしに来たではありません！」

「へえ、じゃあどんな話？」

黒ウサギの言葉に目を細めニヤリと口角を歪めるルイオスに、黒ウサギは本題を切り出した。

「あなたが捉えている私たちの元同志、レティシア様を取り返したいのです」

\*\*\*\*\*

コミュニテイに残されていた司は、爆音が鳴り響いた時に過度に反応して体を動かしたため、その痛みで動けずに黒ウサギにおいて行かれていた。そして黒ウサギ達が”サウザンドアイズ” 目指して出発した頃、静かに寝息を立てていたのだが、足音が聞こえ、司は目をさます。誰かが部屋の近くに来たのだろう、ともう一眠りしようとしたところに声がかかる。

「……司君、大丈夫？」

「……………」

声がか聞こえた方を見るとそこには心配そうに司を見る飛鳥と申し訳なさそうな耀がいた。

「……………ああ、飛鳥と耀か。大丈夫大丈夫、ちよつと全身が痛いだけだから」

「それって大丈夫じゃないわよね？」

「まあ、そんなことは置いておくとして、さっきの爆音はなんなんだ？」

「私たちも知らないわ。その代わりと言ってはなんだけど、黒ウサギ達がいなくなつてるといふことだけは分かるのよね」

それを聞くや否や、司はある程度推測する。黒ウサギや十六夜ですら雨後なければならぬような事態に見舞われてしまったのだと。

司がそう推測し終わったその時、部屋に入ってきて一言も喋らなかつた耀が口を開いた。

「……………ごめん、司」

「何が？」

「その……………この前の……………」

司の問いに消え入るような声で答える耀。『この前』というフレーズで、その時のことか、と司は思い至った。

「あの時のことは気にしなくていいぞ。俺が勝手にやったことだし」

「でも……………！私のせいで、司は……………司は……………っ！」

俯いて湿った声を絞り出す。垂れ下がった髪の間隙から光る雫が床に落ちる。

飛鳥はどうすればいいかよくわからず、オロオロと狼狽えている。司は真剣な顔で耀に言った。

「なら、別に気にしろとは言わない。だけど、それはお前のせいだけじゃない。俺にも至らないところもあつたし、あれ以外に案が思い浮かばなかつたのもこつちに非がある」

「そんなことないっ！私がおもつと考えていれば……………！」

「考えたとしてもいずれは誰かが囷にならなきゃ全滅してた。まあ、消去法で俺が囷になっただってわけだが」

「だったら私がしても良かったじゃない！」

「女の子を囷にして一人残して逃げるような人間には俺はなりたくないな」

「でも……でも……っ!!」

「……………はあ、埒があかない。もうこの問題は終わりだ！異論は認めん！」

「納得いかない！」

「納得しろ！……だからって無条件というわけじゃない。条件がある」

「条件？」

「貸し一つ、それでこの話は終わりだ。いいな？」

「……………うん」

腑に落ちないといったように口をつぐむ耀。話がひと段落して、司はため息を吐く。耀が話し始めた瞬間から蚊帳の外だった飛鳥は不機嫌そうだが、咳払いして切り替え、話を変える。

「で、話が終わったのならいいのだけど、私たちはどうしたらいいのかしら？」

「そうは言われなくてもねえ……。黒ウサギも十六夜もいないんだろ？ならあいつら帰ってくるまで待たなきゃいけないんじゃないのか？」

「……うん、そうだね。英太もいないしね」

「そうね。あと久城さんと雪城君もいないし」

耀と飛鳥の発言に司は顔をしかめる。聞き覚えのある名前が三つも出てきて、かつこの世界にいるはずのない人の名前が出てきたらそうなるだろう。

「ちよつと待て。誰だそいつら」

「ああ、司君が気を失ってる時だったものね、私たちが彼らと会ったの」

「司なら知ってると思う。篠宮英太って人とその後輩らしいんだけどー」

『篠宮英太』と聞いた途端、司の脳裏にはある顔が浮かんだ。何があっても飄々としており、楽しいこと大好きな快樂主義者の顔が。

そして、それに続いて司の後輩である先輩に向かって平気に毒舌を吐く少女と寡黙な少年の顔も浮かび上がってくる。

その次の瞬間、司は無意識のうちにベッドを降りようと体を起こしていた。それを察したのか、耀が傷口が開かない程度の力で押さえつける。

「司、寝てなきやだめっ!」

「……はっ!? あ、ああ、すまん……」

「どうしたの司君。ものすごい間抜けの顔をしてたわよ?」

「そうなのか……」

飛鳥の毒舌に似たような言葉に空返事を返す。

司は、まともな返事ができないほど、ある疑問に思考の全てを奪われていた。

『なぜ、あいつがここににいるのか？』

おそらく予想できる答えではないと想定し、顔をしかめながらため息をつくのだった。

## 交渉決裂だそうですよ？

「嫌だね」

ピシヤリと言い放つルイオスに黒ウサギは息を詰まらせる。

だが、それもつかの間、すぐに表情に怒りが見え始める。

「ふ、巫山戯ないでください！」

「巫山戯てないし。それにあいつは俺が買ったもんなの。それにもう買い手が決まってるし」

「なっ………!?!」

ルイオスの言葉に息を飲んで戦慄する。

現在黒ウサギ達は“サウザンドアイズ”に訪問しており、その幹部、ルイオスⅡペルセウスに“ノーネーム”の元仲間であるレティシアードラクレアを取り返しに来たのだが、真つ向から断られていた。

「買い手が何を考えてるかわかんねえけどさ、あいつを箱庭の天幕の外に出して牢屋に閉じ込めておきたいんだよ。でもそれ想像したら意外に良くてさあ。たまんねえよなあ？」

「あ、あなたは……………っ!!」

「おっと、んな癩癩起こしても取引には応じねえぞ?こちとら商売であれを売ってやってんだか——」

ドパン!とルイオスが言い終わる前に辺り一帯に発砲音が響く。

その音源は、まるで汚物でも見るかのような目でルイオスを見る愛里紗の手に収まる38口径のピストルだった。

「黙って下さい。それ以上あなたの下品な声を聞きたくありません」

「——あ?なんだ、やるのか?」

ルイオスはギフトカードから歪曲した剣、ハルパーを化現させて構える。両者が火花を散らしていたが、先ほどまで何も声を発していなかった白夜叉がその二人を睨みつけ、怒気のコもった声を上げる。

「……………小僧ども、ここで始めようものなら門前に叩きだすぞ」

「……………分かりました」

「……………ちっ」

白夜叉に言われ、渋々といったように武器を下す二人。そんな緊迫した空気の中、ずつと俯いて黒ウサギはルイオスに言った。

「……………私が、そちらのコミュニティに入ればレティシア様は開放してくれるのですか

「？」

「……………っ！ああ、その通りにするぞ」

「黒ウサギさん、何言ってるんですか!?!」

その発言にルイオスは驚きながらも喜び、愛里紗は悲鳴のような声を上げる。その二人を見ることなく黒ウサギは俯いたまま告げる。

「ならー、私が」

黒ウサギが言葉を発しようとした瞬間、

空間が軋んだ。

「「「「「……………?」」」」」

内心喜びにくれていたルイオス、狼狽えていた愛里紗、多少苛立っていた白夜叉に俯いていた黒ウサギ、そして静観を保っていた十六夜でさえ息を呑む。

全員の目がそれを引き起こしたであろうもう二人、静観に徹していた人物に集まる。

それは、部屋に入ってからふざけたことしか言わなかった英太とコミユニティを出てから一言も喋っていない満の二人だった。

「黙って聞いてりゃ取り引きがどうか言いやがってからに……………。んなもんに興味はねえっての」

「それはそうですね。もとより僕達はそういう話をしに来たのではないのですから」

「は、はあ!?!おま、僕らが所有するあの吸血鬼を取り戻しに来たんじゃないのか!?!」

「そ、そうですねよ!二人して何言ってるー」

困惑する二人をよそに、空間の歪みが増し、その場に普段感じているものの二倍の重力がその場の全員を襲う。

それは、一定空間内に倍の重力をかける《増幅<sup>グ</sup>する重力<sup>ビ</sup>》という英太が得意とする魔法のうちの一つであった。

「いいか?もう一度言うが、俺は取り引きなんぞに興味はない。んなもんがしたいなら、

どうぞ他でやってくれ。そのぶんにはどうこう言う気はない」

「……ほほう？ならば、おんしは何をしに来たというのだ？目的もなしに来たわけではあるまい」

脂汗を浮かべ、引きつった笑みを浮かべながら白夜又は英太に問う。

超過した重力に耐えながらも言葉を発することができるといふのは、さすがといったところだろう、と英太は感心しながらニヤリと笑みを浮かべて言った。

「俺たちは“サウザンドアイズ”に乗り込むって言ったはずだぞ？なのに、なんで穩便な取り引きなんぞで終わらせなきゃいけないんだよ」

その瞬間、愛里紗はまさか、と顔を青くし、十六夜はなるほど、と得心がいったように笑みを浮かべる。

「乗り込むって言ったからには、其れ相応のことはしねえとなあ？」

英太はうつすらと笑みを浮かべながら言った。その目には振りまかれる怒りがこもっていた。

「ええ、僕もそのつもりです」

「満まで!？」

対して満はいたって無表情だが、レイオスを睨む瞳には侮蔑がこもっている。

二人の表情を見たことがあるのか、愛里紗は顔色をさらに青白くして声を震わせる。その他はというと、二人の雰囲気の変わり具合に息を呑むことしかできず、襲い来る重力と威圧に言葉を発せずにいた。

「お願いですからここでことを起こすのだけはやめてください先輩！先輩が本気出すと、ここら一帯が消し飛ぶ可能性あるんですから！」

「うん？だからどうした？別に、それで消えるなら消える程度をやつたつてことだろ？」

「……………司先輩が悪魔化しますよ？」

「……………それは、避けたいな。はあ、しゃあねえか」

英太は指をパチンと鳴らす。すると、先ほどまで部屋を軋ませていた超重力は嘘のように消え去る。緊張が消え去って安心したかのように十六夜達は息を吐く。

だが、白夜だけは英太に戦慄していた。

この状態だとしても、自分を完全に押さえつけられるものがあるのか、と。

そんなことはつゆ知らず、当の本人の英太はもう用がないというように立ち上がる。

「とりあえず、宣戦布告だ。お前は必ず潰す。お前はもちろん、お前の手先から何から何まで、これまでの行いを悔い、泣いて土下座して『もうしません許してください』つて

いうまで潰してやる。覚えとけ、出来損親ないの英雄光」

そう言い残して英太は部屋を後にする。それに続いて満も出て行き、愛里紗が慌てたように後を追う。

十六夜と黒ウサギは状況が飲み込めずにいたが、一方は楽しそうに口角を歪め、もう一方は顔面蒼白で部屋を出て行く。

余談だが、残った白夜又とルイオスの二人は数分無言のまま、固まっていたらしい。

\*\*\*\*\*

「何してくれちゃってるんですか!？」

言うことだけ言つてそそくさと「サウザンドアイズ」支店から出た英太に追いつくなり黒ウサギは声を荒げる。

「何がだ?」

「何故あのような怒らせることを言うのですかと言っているのです!しかも挑発に加えて宣戦布告!?!何を考えているんですか!?!」

「じゃあ、逆に聞くけど、お前と取り替えっこしてさ、俺らが満足するでも思ってるわけ？」

「うぐっ……それは、その……」

英太に痛いところを突かれたのか、ごによごによと言葉を濁す。

それに、と英太は付け足す。

「これはあいつらに対する救済処置だ」

「えっ………？」

「宣戦布告つつう感じにしなきゃあの馬鹿司は何しでかすか分からんからな。ここであいつの行動を縛っておけるなら縛っておく方がいいんだよ」

真剣味を帯びた英太の言葉に黒ウサギは困惑を示す。何故ここで司が出てくるのか理解ができなかったが、自分より付き合いが長い英太の方が詳しいのだろう。だが、『どうして』と疑問に持つ黒ウサギのことは眼中にないのか、英太は黒ウサギから視線を移して言う。

「満、愛里紗と黒ウサギ連れて先にコミュニティに帰れ。あと司に説明は絶対にしとけ」

「分かりました」

「わ、私には指示なしですか……？」

「愛里紗は司が先走らないようにしといてくれ。まあ、俺が言ってたって言ってくれ

ばなんとかなるだろうよ」

「りよ、了解です」

指示を伝え終わると、満が黒ウサギの腕と愛里紗の腕を掴む。

先ほどから一切言葉を発していなかった十六夜が、期待を込めた声音で英太に問う。

まるで、これから楽しいことが起こるかもしれないというように。

「んで、どうするんだ？俺は楽しけりやなんでもいいが」

「ま、とりあえずは権利を取りに行く。三日ありや終わるだろ。司の準備もな」

英太の顔が狂気的な笑みに変わる。

黒ウサギと愛里紗が見る景色が変わる寸前、怒り、楽しみが混ざり合った声音が聞こえてきた。

「それじゃあ楽しみに待ってるクソ英雄。テメエみたいな外道、真っ向から叩き潰してやるよ」

それを聞こえた瞬間、その場から三人が消え去る。

十六夜と英太は夜の街を歩き出した。これから起こす、盛大な楽しい出来事のために。

何があっても問題児達はいつも通りだそうですよ？

「コミュニケーション”ペルセウス”と交渉が決裂して三日、飛鳥と耀の二人は本抛の廊下を歩いていた。

「あの二人、本当にどこに行っただらうね？」

「全く……何かするなら私たちも誘ってくれてもいいはずなのに……。どうしてなのかしら」

「私たちが力不足……だから？」

「それは……まあないことはないけど」

彼女達は“ペルセウス”との交渉以来、謹慎処分となっている黒ウサギの部屋へと向かいなが愚痴をこぼしていた。

耀の言う通り、交渉した夜から英太、十六夜の二人が行方不明となっており、コミュニケーションの誰もその居場所を知らない。

その事実のため息を吐いた飛鳥は前から来る気配に顔を上げる。とそこには欠伸をしながら歩いてくる司がいた。

「あら、司くんじゃない。どうしたのこんなところで」

「黒ウサギを鑑s……………見g……………見舞いに」

「あなた結構口滑らせたわよね？しかも、その文面だと誰かに黒ウサギを見舞うとなつて、黒ウサギで誰かを攻撃するみたいになるのだけれど」

「……………ぶっちゃけ本心は？」

「単なる暇つぶし」

「だよ、分かってた」

二人と目的が被っていた司は同行し、黒ウサギの部屋の前に着く。

飛鳥が控えめなノックをして部屋の中にいる黒ウサギに問いかける。

「黒ウサギ、いるかしら？」

『この部屋には何もいませんし、それに鍵もかかっていますし、黒ウサギというウサギもいませんよ』

「これ入ってきていいってことよね？」

「そうじゃないかな」

「なら……………ってあら、本当に鍵がかかっているわね」

「うーん、どうしよう……………これ」

飛鳥がガチャガチャとドアノブを回す。が、鍵がかかっているため扉はビクともしない。

司はイヤな予感がして二人を止めようとするが――

『分かりました分かりました、今開けますから。もう、二人も女性なのでですから少しはオブラートに――』

「なら突き破るしかないわね」

「そうだね、遠慮なくやっちゃおう」

耀が足を振り上げてドアを蹴ると、轟音とともにドアがくの字に折れ曲り、黒ウサギの前に着地する。

「オブラアアアアアアアアアトツ!!」

「黒ウサギ嫌い」

「はあ………やっぱりこうなるか」

目に見えたことが現実になり頭を抱える司は二人に続いて部屋の中に入る。

黒ウサギの部屋の中は意外と整理整頓されており、少々女の子らしい部屋だった。

「司、何キヨロキヨロしてるの?」

「え、あ、いや別に」

耀が首を傾げて問うが、そっぽを向いて何でもなさそうに答える司。

耀はそれが気になり、どうにかして問い詰めようとしたのだが、

「それで、こんなバイオレンスな登場の仕方をしたのですから何か用があるのですよね

なければこんなことしませんもんね！」

(……言えない、俺はただの暇つぶしできたなんて言えない)

内心焦りながら素知らぬ風に装うが、さすがは問題児で——

「その司君は暇つぶしできたそうです」

「売りやがったなこの悪女共!!」

「~~~~~♪」

司が抗議の目を向けるが、明後日の方向を向いて口笛を吹き始める二人。飛鳥に至っては口笛と呼べるかどうか怪しいものになっている。

司は顔をそらしている二人にどうにかして糾弾するため、一步踏み出したところで肩に手が置かれる。

「……………本当なんですか司さん？」

「へ……………」

「ホントウナンデスカ？」

(ああ……………これは終わったな)

黒ウサギ(激怒)を前に逃げたり言い逃れはできないだろうと悟った司は、がつくりと肩を落とした。

(少年説教中……)

「結局、飛鳥さんたちのせいじゃないですか!!」

「ふっ、騙された方が悪い」

「お二人は後で覚悟しておいてください」

「えー……」

「イ イ デ ス ネ ?」

「い、イエス……ママ」

一通り説教が終わると、司からの事情を聞いて最終的に一番の悪がわかった黒ウサギ

は矛先を司から飛鳥と耀に向ける。

それから数分後、ようやく怒りが収まったのか興奮して桃色になっていた髪の毛やウサ耳はすっかり薄い青色になっている。

「それで、ここにきた本当の理由は何なのですか？ 司さんはいいとして、お二方には聞いてないのですが」

「ここに来る原因となったのはこれよ」

飛鳥がある一点を指差す。そこにはどこから出したのか、薄いピンク色の小さな小包があった。

「年長の子達がね、『これで黒ウサギのお姉ちゃんと仲直りしてください！』って頼んできたのよ」

「……こつちが決めかねてると、半泣きになって……もう断れるという雰囲気ではなかった」

「あれを断れるのは鬼か悪魔くらいだわ」

「……そんなことがあったのですか」

「といつても、私たちは黒ウサギとは喧嘩なんてしていないもの。でも、あの場で断つたらあの子達が泣き出してたはずだから」

「こうしてここにきたってわけ」

やれやれ、と首を横に降る二人から司は目をそらす。つい先ほど喧嘩をしていないと言ったくせに、喧嘩になるような火種もとい説教の元を生み出したことに。

黒ウサギはそんなことをおそらく気にせず、バツが悪そうに顔が曇る。

「あの子達には心配をかけさせましたね……。でも、黒ウサギは大丈夫です」

来た時よりも穏やかになったように見える表情で微笑む。飛鳥と耀もそれを見て満足そうに顔を見合わせる。

「レティシア様を取り戻す機会はまだまだありますから！あ、でももう自分を売るような真似はしませんよ？今度はもつと正攻法で——」

「黒ウサギ、何を言ってるの？」

「はえ？」

黒ウサギが拳を握り、自分を犠牲にせずに戦うことを決意したにも関わらず、二人して何を言っているのかわかりませんと言いたげな顔で首を傾げる。呆氣にとられた黒ウサギは気の抜けた声を出して固まる。

二人がこんなところでレティシアを諦めるとは思っていない司だったが、数%でも可能性がないとは言ひ切れない。一体どういふことか聞こうとすると、

「誰が一旦引き下がるなんて言ったの？」

「……え、いや、ええ!？」

案の定、諦めていない飛鳥と耀を見てホツとする。司も愛里紗から話を聞き、黒ウサギを交換条件に持って来たことに憤りを感じていた。

「二人の意見には賛成だ。そもそも、そんなクズを許すほどを俺は出来た人間じゃない」「さすが司、分かつてる」

「英太君に鬼、悪魔って呼ばれるだけはあるわね」

「あいつ……んなこと言ってたのか……」

あとで締めてやろうか、と考える司を尻目に飛鳥達は話を進める。

「諦めないとは言ったものの、どうやってレティシアを取り返しましょうか」

「まあ、その辺の知識は全然ないからね私たち」

「そうね。そこで貴女の出番よ、黒ウサギ」

「ほえ？なぜ黒ウサギなのですか？」

いきなり矛先を向けられて目を点にする黒ウサギ。司は大体の魂胆を理解し、呆れる。

「なるほどね……だからここに来たと」

「流星は司、理解が早い」

「誰でもわかるっての」

「な、何をそちらで理解しているのですか！黒ウサギにもわかるように教えてください」

！」

「簡単にいうと、『知識のある黒ウサギを頼ろうぜ！』ってこと」

「なあんだそんなこと……って結局人任せじゃないですか!!」

「気にしない気にしない」

「ええそうですね！ってなるわけじゃないでしょう!」

黒ウサギも本調子まで戻ったらしく、二人と騒いでいる光景を司は苦笑いで眺める。

だが、『ベルセウス』の逸話は司も知ってはいるのだが、どうギフトゲームを挑んでよいかは分からず、飛鳥達を叱っている黒ウサギに声をかけようとした時、

「せ、先輩……どこですか……」

どこか疲れたような声が遠くから聞こえて来た。おそらくそこそこ大きな声を出しているのだろうが、黒ウサギの声に打ち消され、かすかに聞こえる程度の音量になっている。

司は疑問に思い、廊下に出ようとした。

「破壊は芸術だアアア!!」

だが、突如としてドアの横の壁が爆発した。

「……………は？」

流石の奇想天外な光景に司や他の三人の動きが完全に止まる。

爆発の余波で立ち込めていた土煙は次第に晴れ、晴れた先に立っていたのは、

「よっ、なんだ女子会か？」

「十六夜よ。それなら司も女子ということになるぞ？」

「四捨五入すりや女みたいなもんだろ司は」

「なら仕方ないな！」

「ヤハハハハハハ!!」

規格外その2  
逆廻十六夜と篠宮英太だった。

司は酷い頭痛に襲われた気がして頭を押さえる。

「…………いやもう皆まで聞く気は無いけどさ…………、もうちよつとマシな登場の仕方があるだろうが」

「なら吹き飛ばせばよかったか？」

「いや、十六夜違う違う。消し飛ばした方が面白いだろう！」

「それだっ！」

「……うんもうね、俺がお前らのおめでたい頭を消し飛ばしたいよホント」

怒りを通り越して呆れさせ覚えろの司は、まともに相手をするのも疲れると感じ、早々に話を切り上げる。

二人が奇天烈な登場を果たしてすぐ後に血相を変えた愛里紗が部屋に飛び込んでくる。

「ふ、二人共何やってるんですか!？」

「爆発四散」

「本当に何やってんです!？」

「……とりあえず愛里紗落ち着け。話がややこしくなる」

肩で息をしながら混乱する愛里紗の肩を押さえてなんとか落ち着かせる。

ちなみに、飛鳥と耀は思考回路が回復したようで、いつものように振る舞っているが、

黒ウサギはしくしくと泣いている。

愛里紗は息が整うと、大きく息を吐いて問題児二人を半眼で睨む。

「あなた達は何がしたいんですか全く……」

「この世をカオスで染め上げる」

「それは違うな英太。この世を楽しい闘争面白で染め上げる、だろうが!」

「なるほど……!」

「とりあえず一旦落ち着いて正座してくれる（ます）？」

「冗談だよ冗談。だからそんな物騒なもののはしまつてくれるとありがたいなあ……と思  
うんですけど」

「銃弾やナイフくらいなら避けられるぞ」

「十六夜よ、俺は避けられんのだが？」

「南無三」

「あれ、死ぬこと前提!？」

「茶番やっつてないでさっさと話してくれるかしら？」

二人の演技に飽き始めたのか、飛鳥は少タイラついた表情で言う。耀に至ってはうた  
た寝をし始めている。

やれやれ、といった様子で十六夜と英太は何かを床に放り投げる。

それは、風呂敷包みだった。

「なに……これ？」

「戦利品。まあ、開ければわかるぜ」

「黒ウサギあたりは腰抜かすんじゃないやねえの？」

「あなた達の登場の仕方腰を抜かすどころでは無いのですが!？」

髪が緋色になり、早口でまくしたてる黒ウサギ。どうやら完全に堪忍袋の尾が切れた

ようだ。

黒ウサギが十六夜達を叱っているのをよそ目に、飛鳥は放り投げられた風呂敷包みを開く。

そこには赤と青の球体があった。

「……………なんなのかしら。水晶？」

「……………ん、紋様みたいなのがある」

眠そうに目を開ける耀が指差した場所には瞳のような紋様が刻まれてあった。

二人を叱っていた黒ウサギは、ハツとしてその球体に目を移す。

「こ、これは……………ペルセウスへの挑戦権!? 一体どこで!？」

「ん、これか? イカとババア倒したら手に入ったぜ」

「イカは十六夜が圧殺、ババアに至っては登場した瞬間に消し炭になってもらった」

「そ、そんな……………並大抵の人間じゃクリアできないはずなのに……………」

黒ウサギは戦慄する。自分はこんな規格外な人間を呼んでしまったのかと。そして、同時に期待する。この人たちならば……………、自分の願いを叶えてくれるのではないかと。

「そんなものがあつたの?」

「ああ、意外に楽しかったぜ」

「へえ……………そうなの」

飛鳥は不意に立ち上がり、英太の頬をつねる。

「いつ!?!」

「なら今度からは私たちも誘いなさい。いいわね?」

「わ、分かった!分かったから離せ!地味に痛い!」

「……反省するまでは離さないから」

拗ねたような、イラついたように取れる口調で言い放ちながら英太の頬をつねることをやめない飛鳥。

十六夜と耀はニヤニヤと笑いながらその光景を眺め、黒ウサギは呆然としている。

それらを見ながら司は

(こんなんでも勝てるのか……)

と不安を感じるのであった。

ゲーム開始はやはりカオスになってしまうそうですよ？

司達は英太達が帰って来て、「コミュニケーション」ペルセウス”へのゲームの参加権とされる水晶のようなものを持ってルイオスの元へと向かった。

その結果、ルイオスはその挑戦を受けざるを得ない状況になり、ゲームへの参加を渋々といった風に承諾した。

そして、司達はルイオスが用意したゲーム盤の白亜の宮殿の前にいた。

「はあ……でつかいな……」

「ほええ……そうですね……」

「おいそこ二人、見惚れてないでさっさと作戦会議するぞ」

あまりにも巨大な宮殿の前に、司と黒ウサギは感嘆の息を漏らす。それを見咎めた英太はあろうことか真面目な表情で『作戦会議』と言い始めた。

「手始めにギフトゲーム内容を確認するとするか」

『ギフトゲーム名 ” FAIRY TALE in PERSEUS

・プレイヤー一覧

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

神野 司

篠宮 英太

九條 愛里紗

雪城 満

・ ”ノーネーム”ゲームマスター ジンIIラツセル

・ ”ペルセウス”ゲームマスター ルイオスIIペルセウス

・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒

・ 敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせな

くなつた場合。

・ 舞台詳細・ルール

\*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはなら

ない。

\*ホスト側の参加者は最奥には入ってはならない。

＊プレイヤー達はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはならない。

＊姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

＊失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行することはできない。

＊“ペルセウス”側のゲームマスターが承諾した時のみ、第三者の介入を許可する。

宣誓  
上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

”ペルセウス”

印

”契約書類”に目を通す司達だったが、ある項目で全員の目が止まる。

「……おいこれどう考えても不平等だよな」

「ジン君的にはどうなのかしら？」

「……………限りなく黒に近いグレーですね。でも結局、僕らはルールの決定権を丸投げしてしまっただけですから」

「英太があんなことさえ言わなけりや、な……」

「本当にそうですよ。なにが『どんなゲームでもテメエみたいな七光りに負けるかよバーカ』ですか。とんでもない条件つけられてるじゃないですか」

「お、俺だつてこんなのが着くとは思つてなかつたんだよ!!」

「今はこんなのを心配している場合じゃない。必要なのは作戦」

一つの項目に注目しすぎて話が進んでいなかつた一同に耀が軌道修正を促す。

が、作戦を組むにもあのルールがあるだけで作戦を立てるのが困難だと司は気づいているので、どうするかと悩んだ時だつた。

今まで沈黙を貫いて来た十六夜が唐突に言い出した。

「お嬢様とお姫様は囹役、春日部と英太はあるであろう不可視のギフトの確保役、んで、俺と司、満がボス戦役つてのどうだ？」

「ほお……、何で俺がギフト確保なのか理由を述べてもらおうか」

「春日部は耳がいい……つてだけじゃないだろ。おそらく五感全部がいいはずだ。それを利用する。で、英太の場合は前に“ノーネーム”の本拠に“ペルセウス”の連中が来る時にお前は『見える』と言つた。違うか？」

「確かに言つたが……ああ、そゆこと」

「一体全体どういふことなんですか？」

愛里紗と黒うさぎが首を傾げているが、その他のメンバーは先ほどの話の顛末が理解できたのか、なにも聞かず、その配役が妥当だと感じている。約1名ほど納得していない者もいるようだが。

「簡単にいうとだな、おそらく透明化であるギフトを相手が使っているかもしれないということだ」

「肉眼じゃ不可視になってたら、こっちは気づく間も無くゲームオーバーってこと」

「なるほどです。……なら能力的にその配役がベストですね。満なら司先輩とでしたらコンビネーションは取れますし」

「そうだな。じゃあ、一つ懸念はあるがゲーム始めるか」

作戦会議が終わり、九人は白亜の宮殿の入り口を見る。が、そこにはドアノブもなにもなく、ただ門が閉じているだけだった。

「それにしてもこれ、ドアノブないですね。どうやって開けるんだろ？」

「九條、それは多分先輩らが知ってると思うよ」

「はへ？」

愛里紗が門から背後に視線を移すと、そこには何かやらかす気満々の笑みで笑う十六夜がいた。

「門って割と開けるのは簡単なんだぜ？」

「へ、へえ……。じゃ、じゃあ参考までに見せてもらっても……。う？」  
「そんなの————」

門の前で立ち止まり、十六夜は構えを取る。すると、十六夜の拳が輝き始め、幾何学的な模様を腕に宿す。

そこで、司は血相を変えて叫ぶ。

「二人とも、そこ離れろ！」

「え？」

「ぶっ壊すに決まってるだろうが!!」

十六夜は拳を振りかぶり、門を殴りつける。その瞬間、門全体に魔法陣のようなものが浮かび上がり眩い光が満ちたと思えば、凄まじい轟音が鳴り響く。

その光が収まる頃には、門のあった場所は円形にくり抜かれ、その一直線上はなにもなくなっていた。

\*\*\*\*\*

「な、ななな……………」

「……………」

「う、嘘お……………」

「これは……………また派手にやったわね」

「……………十六夜らしいね」

「……………うん、与えた身で言うのおかしいと思うんだけどさ、敢えて言わせてもらう。与える魔法間違えたわこれ」

「ちなみに何を？」

「えーつと……………極壊魔法ってやつ。破壊系の魔法の詰め合わせみないな……………」

「……………これ今から起きるのって一方的な虐殺劇なんじゃ」

「言うな。俺自身後悔してんだよ」

三者三様な反応を取る八人だったが、それを気にせず十六夜は上機嫌で高笑いする。

「ヤハハハハ！最高だねこの感覚！そんじゃ、作戦通り行くか！」

『この状況で作戦通り行くとしても!』  
始めて十六夜以外のメンバーの心が一つになった瞬間だった。

「とうか、逆廻先輩」

「なんだ？」

「お姫様って私のことですか？」

「あー……、まあなんとなくお前の態度が我儘なお姫様に見えたんでな。あんま気に入らん」

「あ、いえ……別に気にしてはないですけど」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、別に！」

\*\*\*\*\*

S I D E 飛鳥

私としては不服なこのゲームでの配役の囿をしているのだけれど――

「貴女強すぎるのよ……」

「へ？」

くるりと振り返るのは九條愛里紗さん。実を言うと、十六夜君が起こした轟音できた衛兵らの全てを彼女が倒してしまった。

私はと言うと、危なっかしい彼女の戦い方にハラハラしながら彼女を襲わんとする攻撃から守った程度。不服だと言うのにもかかわらず、なんの役にもたつてないという体たらくぶり。

正直言わせてもらうと、私がここにいる意味がないと思う。

そう思ってくるのかなり凹む。あの似非紳士の時だつて、結局は春日部さんのおかげで勝てたようなものだし。

「あの……久遠さんつて何歳なんです？」

「……唐突に何かしら」

「いえ、何か雰囲気似てたような気がしたので。もしかして同い年かと思ひまして」

「今は14……だったはずよ」

「なら同じくらいですね！あ……同い年に敬語使うのはおかしいか」

「そこら辺は気にしないから好きに呼んでくれて構わないわよ」

「なら、改めてよろしく飛鳥ちゃん！」

ニツと笑みを飛鳥に見せる愛里紗さんに私は罪悪感が募る。こんな足手まといがいてもいいのだろうか、と。

すると彼女は私の隣で腰を下ろす。ゲーム中に休むのはおかしいが、おそらくほとんどの敵を倒したためこのフロアには敵がない。

だからと言って警戒心を完全になくすわけにはいかないけれど。

「飛鳥ちゃん……いや、あーちゃんつてさ」

「あ、あーちゃん……？」

「飛鳥だからあーちゃん、でしょ？」

「……もうそれでいいわ」

「じゃ、話し続けるよ。あーちゃん、推測で言うけど、自分の力に自信持っていないでしょ」  
つい先ほど思っていたことを言われ、ドキツとするが、内心の焦りを悟られないようになんでもなさそうに答える。

「そんなこと、思っていないわよ」

「さつきだつて、私に戦闘を任せて補助に回つてた。その後反撃すればいいのにせずに、私の補助ばかりをし続けた。で、自分は足手まといだとか勝手に決めつけてる。違う？」

「うぐっ……………」

痛いところを突かれ、言葉に詰まるしかない私を、愛里紗さんはため息まじりに半眼になつてこちらを見てくる。

「それって完全に間違つてるからね」

「え……………」

予想外の言葉に声が漏れる。あんなに強い愛里紗さんにそう言われると思っていなかった私は驚くしかなかった。

「そりゃ、私だつて最初は弱かつたよ。今の能力だつて全然使いこなせてない。むしろ今のあーちゃん以下…………いや、比べるまでもなく下だつた」

「そ、そんなに……?」

「うん。私は司先輩に言われるまで全然強くなかった。でも、先輩はそんな私を支え続けてくれた。手を差し伸べてくれた。……だから、私はこうなれたんだ」

「支え、続けて……」

「だから私は一人の力でこうなってるんじゃないの。あの馬鹿だけど、でも、いざという時頼りになる先輩がいてくれたおかげで、私はこうなれたんだよ。だからねあーちゃん、自分をあまり卑下しちゃダメ。なんだったら私が付き合うから。あーちゃんが、あの先輩たちが驚くぐらい強くなるまでもね」

「愛里紗さん……」

「だ、だからね……私のことも少しは碎けた呼び方でもいいかなあって」

その時だった。奥の方からドタドタと何かが近づいてくる音が響いてくる。

「あー、もう！なんでこんないい時で降りて来ちゃうかなあ!!」

愛里紗さんは怒りの形相で足音が響く方向を睨みつける。

もし、愛里紗さんが言うように強くなれたら……あの人達を驚かせられるほどの存在になれたら……

それは……凄く楽しそうではないかしら?

「……………ええ、本当にいいところできたわね」

「つたく、少しぐらい空気読んでくれてもいいのに…………」

「なら、さつさと片付けましょうりーさん」

「そだね。ちやちやつと終わらせてーりーって、え？」

なかなかいいあだ名だと思ったのだけれど、愛里紗さん否、りーさんはポカンとして固まっている。

それが少しだけ面白くて笑ってしまう。

あの人達もそんな顔をするのかしら、と思うと楽しくて仕方ない。

だから私はりーさんに手を差し出す。

「なら、私に付き合ってもらえるかしら。もちろん、最後まで付き合ってもらおうけれど」

「……………っ！うんっ、了解だよ！」

「それじゃあ、手始めに」

「あれ、片付けよっか！」

私たちはお互いの手を取りながら、迫ってきているであろう敵を見据える。闘志をたぎらせた強い瞳で。

S I D E 飛鳥 O U T

\*\*\*\*\*

飛鳥と愛里紗と別れた司と十六夜、満、ジンの四人は物陰に身を隠していた。不可視の敵に見つからないため、隠れておく必要があるのだ。

英太と耀は不可視の敵が見えているような動きで、相手が視認する前に敵を沈めていく。

「もはや……人間業じゃねえな」

「ヤハハ、あの程度なら英太はやってみせるだろうよ。でも、春日部の方は意外だった

な」

「ええ、まさか篠宮先輩についていけるとは思いませんでした」

「あの二人、かなりの手練れという言葉では表しきれませんね……。もはや人間じゃないですよ」

四人が感嘆するほどに二人の動きは人間離れしていた。

耀は動物たちからもらった友達の印であるこの動物の力を駆使し、英太はなれた様子で魔法を使いこなしながら敵の数を減らしていく。

数刻すると立っているものは英太と耀だけになっていた。

「ほれよ、全員一応被つとけ」

「人数分は絶対に足りると思う」

英太と耀が2個ずつ古代西洋のような兜を渡してくる。

十六夜が即座にそれをかぶると、十六夜の姿は完全に見えなくなつた。

「ほお……ということは、これが不可視のギフトってやつか」

「さつさとかぶれ。いっどこから来るかわかんねえんだから」

今回は英太の指摘に従い、おとなしく兜をかぶる。そして、そのままルイオスの元へと向かおうとした時だった。

ゴツという鈍い音が響き、英太の体が壁まで飛ばされる。

「が、は……っ!?」

「英太!?!」

耀はそれに駆け寄ろうとするが、その無防備な横っ腹に先ほど英太が食らったような一撃が、

「……………っ!」

それを庇うように走り出た満によつて阻まれた。が、満は無傷というわけにはいかなかったが、壁までは吹き飛ばされずに踏み止まる。

「おい………一体何が!?!」

「まさか………本物か!」

「十六夜さん、どういうことですか!?!」

「本物のハデスの兜をかぶってるやつがここにいるってことだ。くそっ、こりや厄介だな」

苦虫を潰したような表情で虚空を睨む十六夜だったが、その目には何も映らない。

流石の十六夜も焦っていたが、初撃で殴り飛ばされた英太がおぼつかない足取りで立ち上がる。

「………司、炎使えんなら十六夜達をお前の炎で囲め。少しは手加減するから」

「お、お前何を………ってそういうことか!」

英太が言うことに納得がいったのか、司はフロアにいるメンバーを自分が生み出した炎で覆う。

「痛い」撃くれやがって……。 ” 拡炎”!!」

腕を天井へ向けて突き出し叫ぶ。

英太の足元には直径1メートルほどの青白く、淡く光る魔法陣が浮かんでいる。その魔法陣の色が青白から燃え盛る炎のような橙へと変わる。

変わった途端、そこから炎が吹き出し、部屋中に広がり始める。

「(手加減したって……こんなのちつともしてないだろ……!)」

ほとんどギフトを使ったことのない司がギリギリで守りきれぬ時点ですいているはずだが、少しでも気を抜いてしまえば全員火の海の中へと身を投じることになる。

それだけはしまいと、今まで以上に炎の制御に力を入れる。

それを知ってか知らずか、英太はピクツと何かに反応しそこへ向けてかける。

「さっきの……」 撃ち落とす神の雷!!」

英太の右腕全体に雷が帯電される。その雷はバチバチと周りに撒き散らしながら威力を増していく。

雷を纏った英太の拳は虚空を捉えたかのように思えたが。

「ゴハア……ッ!？」

確実に何かを捉え、力のまま壁まで殴り飛ばす。

そこには、そこそこ歳をとった男性が壁にもたれかかるようにしてぐったりしていた。

「……………はは。私は……………破れたか」

「あの一撃は効いたぜまったく。しかも俺の一撃食らって喋る元気はあると見える。とんだ手練れだなあんた」

「ふっ……………お世辞はよせ。貴様らの勝ちは勝ちなのだ。貴様らには、ルイオス様に……………挑戦する……………権利、が……………」

最後の方は声が小さかったが、英太と満に痛手を与えた一人の戦士がそこで意識を失った。

やれやれ、と英太は頭をガシガシと掻きながら首を振る。

「ま、何はともあれ勝ちだな。つてて……………」

「大丈夫か？」

「うーん、こりやちよつと休まなきや無理だな。あーくそ、司の勇姿(笑)を見ようと思っただんだがな……………」

「おいコラ」

「まあ、そう怒んなって。それに、そっちの方が深刻そうだぜ？」

「……………え？」

英太が指差したのは司の後ろにいる満だった。満は殴打されたであろう右腕を左手で押さえていた。

「……………すみません、神野先輩。これでは、ゲームマスター戦は難しそうです」

「……………ごめん」

「春日部さんが悪いとは言ってませんよ。あれは僕の責任です」

「……………英太、満を頼んだぞ」

「りよーかい。んじゃ、俺らの分も仇を打ってきてくれ。そうだな……………とりあえずぶっ飛ばせ」

「任せとけ」

司と英太は拳をぶつけ合い、司は十六夜とジンと共にルイオスの待つ最上階へと走り出した。

\*\*\*\*\*

S I D E 耀

私のせいで作戦が狂った。

満が私を庇い、そのせいで満は負傷してしまった。

私は、やっぱり弱いのだろう。少しは強いかな、なんて慢心がこんなところで出てくるなんて思わなかった。

「春日部さん、そんな顔しないでください」

「……………?」

「僕は女性にそんな顔はしてほしくないですよ」

「……………女誑し?」

「そういう曲解のされ方をしては仕方ない言い方でしたけど、断じて違います」

私が怪訝そうな顔を見ると、真顔で、しかも普通のトーンで返された。

そういう冗談はあまり通じない、のかな？

「ですが、嫌なんですよ。身近にそういう存在がいたから」

「身近………愛里紗のこと？」

「まあ、そうですかね」

「昔から知ってるの？」

「腐れ縁つてやつですよ。あいつは泣き虫でした。いつも泣いてました」

どこか懐かしむような表情で天井を見上げながら話す満の話を私は黙って聞いた。

「それを見てたら、何故でしょうね。誰も泣かせたくないなんて思ってしまったんですよ」

「………好き、なの？」

「それとは違いますかね。どっちかというと、応援してやりたいんです。……昔は僕の方が支えられてたのに」

「………そうなんだ。じゃあ、なんで私を庇ったの？」

「男が女性を守る、なんて常識じゃないですか」

「あ、そう………」

何を当然な、と言いたげな真顔で答える満にこれ以上聞いても何も答えてくれないだろう。

でも、もう少し理由ぐらいあってもいいと思うのは私だけではないはず。

「あ、一つ言い忘れてましたね」

「……………」

「春日部さんが可愛い人だったから、と付け足しておきましょう」

「……………」

見事な不意打ちをくらい、仰け反ってしまう。おそらく私の顔はひどいことになって  
いるのではないだろうか。流石にこの仕打ちはひどいと思う。

「ふふっ、そういう顔も可愛いですよ」

「……………」

「本当のことですから。本心を隠すのはよろしくないことです」

「……………」

「なんとでも言ってください。僕は本心は隠さないことにしてるんです」

「……………」

優男みたいな風貌をしているのにもかかわらず、まさか中身はこんな頑固な男の子だとは思わなかった。

それにしても可愛い……可愛いか……。

……………まあ、悪くはない、かな。

「ですので、別に無理に強くなかったっていいんですよ。僕だってこの有様ですしね」

「それとこれとは別じや……」

「それでも強くなりたいというのであれば、僕でよければ手伝いますが」

「……………それで強くなれるの？」

「保証はします」

まさかの保証付きだった。ギフトをみんなに明かしてない満だったが、それを抜きにしても愛里紗と同じくらいだという。

だったら答えは決まっているのではないのだろうか。

「お願い、手伝ってくれる？」

「……おや、プライドが許さないとかわわれて断れると思っていたのですが」

「プライドなんてとうにない」

ガルド戦で私は無力を思い知った。なのに、プライドなんてちっぽけなものをいつまでも持っている、なんてただの馬鹿だ。

そんなプライドにすがりつくぐらいなら、苦汁を飲んででも、嫌だったとしても、他人に協力してもらおう方がいいはずだ。

「それじゃあ、よろしく耀」

「よろしく、みつ……………え？」

今、満はなんと言ったのだろうか。空耳でなければ私の名前が聞こえた気がしたんだけど……………。

「ん？だから、耀。君の名前でしょ」

「……………え、なんでいきなり」

「同じ年くらいなのに敬語使ってるから、かな」

「それと名前で呼ぶの関係くない？」

「さて、そろそろここら辺りにも敵が来るだろうし、準備でもしてようかな」

「ちよつと！」

私が糾弾しようとするが、結局のところ満は聞く耳を持たず、全く取り合おうとしなかった。

S I D E      耀      O U T

そしてゲームは終わりを迎える、そうですよ？

英太達と別れた司と十六夜、ジンの三人は英太と耀の人間ならざる動きで取った不可視のギフトがついた兜により、道中誰一人として三人に気付くものはおらず、最上階へとたどり着くことができた。

最上階へと立ち入ると、三人はかぶっていた兜を取る。

「十六夜さん、司さん！それにジン坊ちゃんまで」

「……あれ、もう着いたんだ」

「んなことも予想がつかないとは、相当頭が弱いと見えるな」

「へえ……、それは挑戦と受け取っていいのかな？」

「……………」

挑発したにもかかわらず、値踏みしたように見てくるルイオスを睨む。だが、ルイオスは怯むことなく飄々と告げる。

「まったく、あいつら本当に使えないな。後でまとめて肅清しないと」

「……………っ！」

「司、落ち着け。あんな奴の話まともに聞いてちゃお前の身がもたないぜ？」



化の能力とか持つてると思って問題ないはず」

「……あれはアルゴ……え、えっ!?」

「お前、絶対俺らが知らないと思つたらろ」

「なんのための三日間だと思つてんだ。少しぐらい調べてるつての」

「も、もしかしてお二人つて結構な知性派だったりします?」

「あ?俺はバリバリの知性派だぜ」

「どっちかというと思つてるの知性じゃなく腕力……」

「ストップ司。それ以上は言うな」

心底意外そうな顔をする黒ウサギにドヤ顔で返す十六夜だったが、普段から知力を使わず腕力だけで解決している十六夜を見ている司は全くもってそんなことを思えなかった。

「お、お二人共!話している場合ではありません!あれは星霊の一種です。なめてかかれば死ぬことも……」

「んじや、俺があのだカブツを殺る。司はあのボンボンを殺つてくれ」

「了解だ。塵も残さねえよ」

「全然話聞いてないじゃないですか!だいたい……」

「おチビ、お前は俺たちが負けるかもしれない、と不安なんだろ?」

「なら黙って見てろつて。俺と十六夜ならこんなの楽勝だつての」  
「で、でも——」

「俺たちがここで力を示す。だからそれを見とけよ、おチビ」  
「————！」

司と十六夜は言いたいことが言い終わると、ルイオスたちに向き直る。ジンは即座に踏ん切りを決め、二人に対して叫ぶ。

「なら、ここでお二人の力を見せてください！ 僕らのコミュニティに足る力なのかどうかを、僕に見極めさせてください！」

「へっ、チビのくせに言いやがる」

「負けはしないさ。それと、お前の期待以上の結果を見せてやる」

二人はそう言い残すと、戦闘態勢に入った。

\*\*\*\*\*

「お前らさあ……なんか勘違いしてないか？」

「あ？なんだよ、ボンボン七光り」

「おい、その不名誉な呼び方はなんだ!!……ま、まあいい。というより、何お前ら勝手に僕を戦闘員として見てるの？」

「は？、と首をかしげる二人だったが、ルイオスはそれを見て楽しむかのように口元を歪ませる。」

「言われようもない不安感に襲われた司はルイオスを警戒するが、それはなんの意味もなかった。」

「お前らもお目にかかるのは二度目だろ。とは言っても、前回とスペックが段違いだなあ！」

「仰々しい言い放つと、司が立っている場所に向けて黒い槍のようなものが幾らか上空から降り注ぐ。司は間一髪で避けられたが、先程まで立っていた場所が鋭い刃物で切り

刻まれたかのような傷ができていた。

その黒いものは、やがて持ち主の元へと帰って行く。そこにいたのは――  
「れ、レティシア様!?!」

黒ウサギが目を見開いて驚愕の声を上げる。一度会っている十六夜も声を上げないにしろ、同じような表情であった。

「おい、金髪吸血鬼。お前を助け出そうつてのに邪魔するのかわ?」

「……………」

「チツ……無視かよ。ああいいぜ。そつちがその気なら容赦はしねえ。覚悟はいいんだろうなあ!」

拳を握り、レティシアの元へとかけだそうとする十六夜。その間、レティシアはなんの反応も示さず、ただ生気のない目で十六夜を見ていた。

レティシアが現れた瞬間、変な違和感に気づいた司はレティシアに襲いかかろうとした十六夜を羽交い締めにして止める。

「離せ司! あいつを助ける義理はねえ! こつちを殺す気で――」

「しつかりしろ十六夜! さつき知性派って言つてただろうが! 少しは落ち着け」

「落ち着いてるし、俺は知性派だつての!」

「じゃあ握つてる拳開いてくれませんかね……」

「よし分かった。……………行くぞゴラア!!」

「誰も拳じゃなくて平手で戦えなんて言ってるじゃない!少し止まってるじゃない!」

司の必死の呼びかけの末、舌打ちと同時に十六夜はどうか止まり司は胸をなでおろす。

レテイシアが現れてすぐに感じた違和感を十六夜に話すと、十六夜は一瞬怪訝そうな顔をしたが、思い当たる節でもあるのか、顎に手を当てて考察し始める。

「何止まってるのかなあ。それじゃあ、ただの的じゃないか!」

ルイオスはギフトカードから炎の弓を取り出し、すぐさま矢を射る。

十六夜は考えにふけており、黒ウサギは参加権はない。ジンに至っては戦闘の際には全くもって戦力には加算していない。

このままでは一人一人矢で射られてしまう。

「(とりあえず……………十六夜の考えがまとまるまでは)」

司は左手をルイオスに掲げ、拳を握り、そして開く。

ルイオスが放った炎の矢は一定距離進んだところでぐにやりと歪み、燐光を散らしながら消える。

「き、消え、た……………!?!」

「そんなに不安なら返してやるよ」

パチンと指を鳴らすと司の指先に拳ぐらいの大きさの火球が発生する。

それは蠢き、形を変えて行き、最終的にルイオスが放ったものと同じ大きさ同じ形の矢となる。

形が安定し始めると、司は腕を振るう。炎の矢は一度通った軌跡を逆に戻るようになり、ルイオスへと直進する。

「チツ、反射系のギフトか……。でもなあ、名無しの攻撃がこの僕に通じるとでも？」  
ルイオスは炎の弓を番える向かってくる矢に向かつて放つ。

その二本の矢は距離が縮まっていき、やがて——  
ルイオスの放った矢が無残にも消え去った。

打ち勝った司が放った矢はルイオスの左肩を射抜く。

ルイオスは肩の痛みを顔にをかめるが、すぐさま切り替えて矢を数本放つ。  
だが、これも司まで届かずに消滅してしまう。

「何なんだよお前ッ!?なぜ当たらないんだよ!」

「さあ、腕が足りないんじゃないの?ほら、まだまだ行くぞ!」

「貴、様ア……………」

「(本当のことを言うと、あの矢が炎だからっていう単純なことなんだがな)」

司は先程からルイオスが言っていたようにあの矢を反射してはいたわけではない。自

分に届く前に潰し、そして自分が作り出した矢で反撃していただけだった。

術中にハマるわけでもなく、ただ勘違いで激情したルイオスは空中で漂っているアルゴールとレティシアに叫ぶ。

「アルゴオオオル！それと吸血鬼！あいつらを殺せ！塵すらも残すな！」

「Ra、GYAAAAAaaaaaa!!」

「……………」

その声に応えるかのように強烈な叫び声をあげるアルゴールと虚ろな目で何の反応も示さないレティシア。

次に来る攻撃は流石に耐えきれないと感じ取った司は未だ突っ立ったまま考え込む十六夜に声をかける。

「おいこら十六夜。頼むから戦いに加わってくれないか？」

「ああ、悪い。初っ端はあの金髪つ子について考えてたが、後半はお前のこと見てた」

「……………それはギャグか？」

「見てたってそういう意味じゃねえよ馬鹿野郎。お前の戦闘をだ」

「あれ見ても何の参考にもならないと思うけど？」

「それは俺が決めることだ。さて、いきなりなんだが、あのボンボンと星霊様は俺がやらせてもらうぜ」

「んじや、俺はレティシアさんを足止めしてる。………愚問だとは思うが、負けんなよ？」

「ハッ、それこそ愚問だな。俺が負けるわけねえだろ。お前こそ、殺されんなよ」

「……なーんか十六夜に言ったのより敗北した時の状態が天と地ほど差がある気がするんだが」

「気にしたら負け」

「………ああ、そうかい」

そう言っただけで会話を終わらせると、十六夜はアルゴールに、司はレティシアに向かって駆けた。

\*\*\*\*\*



「Ra、Ga……………」

「何をしているアルゴール!? さつさとそいつを殺せ!」

「そんじゃ、まあ、さつさと終わらせちまうか。メインディッシュが待つてることだしな」

「ヒッ……………!?!」

十六夜は獯猛に笑いながらルイオスをしたから睨む。それに怯えたのか、ルイオスは顔を青白くし、後ずさる。

「さてと、もうちょい楽しませてくれよ星霊さんに英雄ペルセウス」

そう言って笑う十六夜の拳には淡く光る幾何学的な模様が浮かんでいた。

\*\*\*\*\*

S I D E 司

十六夜の方から何やら轟音が聞こえて来るが、あれはただ互角に戦ってるだけだろう。決して十六夜が一方的な虐殺劇ワンサイドゲームをしてるわけではないと思う。決して。

と、あつちの状況を考えるのはここまでにするとして、今はこの状況をどうにかしなければならぬ。

目の前に対立しているのは“コミュニケーション”“ノーネーム”の元仲間、レイシア、ドラクレアであり、英太達がルイオスに宣戦布告した理由でもある。……あいつは憂さ晴らしとか言ってたけど。

というわけで、大怪我を負わせるわけにはいかないし、殺してしまうなんて以ての外だ。

だからといって正々堂々と戦うのは気がひける。なにせ相手は女の子なのだ。女の

子を殴ったことなんてないし、傷つけたこともほとんどない。

そもそもレイシアは右手に白銀に輝くランスを持っており、どう考えても今の状況では負ける運命しか見えない。

どうしようか、と悩んでいるとあたりに影がさす。

背筋に悪寒が走り、後ろに飛ぶ。

またも黒いものが降り注ぎ、地面を切り刻む。

「つたく、あの黒いのはなんなんだよ！変幻自在に変化しやがって………つてまたか！」  
地面を削った黒い物体は地面から抜けると俺にその矛先を向ける。

それを遮るように炎の壁を張るが、その壁はほとんど意味もなく、黒い物体は難なく貫通し、右腕をかする。

「司さんっ！」

「……大丈夫、かすり傷だ」

黒ウサギが悲痛な声で叫ぶので、とりあえず安心させようとしたけど………こりやダメだな。かすっただけでぎっくり切れてる。

次は当たらないようにしなければならぬ、がどうやつても避けられる気がしない。

何かしらの武器、せめてあれが当たっても折れないような武器があればいいのだが………。

俺はあることを思い出し、左手でギフトカードを取り出す。

そこにある項目で俺が目つけたのは“等価錬成”と“平穩の鎖”だった。

白夜叉によると、“等価錬成”は対価にしたものと同等の能力、硬度を持ったものを錬成できるというもの。そして、“平穩の鎖”はレイルですら使い道のわからない代物だ。もしかしたら、それはかなり重要なギフトで、対価に使って無くしてしまえば何か“良くないこと”が起こるかもしれない。

だけど、そうだとっても————

今はそんなこと、どうだっかっていいか。

「変革せよ、改変せよ。平穩を破り、汝を断罪する剣となれ。其の鎖は刃となりて、我を護る力と成せ。今ここに化現せよ、紅炎の剣よ！」

前に掲げた掌が赤熱し、炎をもらす。やがて、その炎は拳大の球体となり、徐々にその形を変えていく。

炎は細長くなり、地面へ突き刺す巨大な針のような形となった。

「……………!?!」

突如妙な違和感が全身に駆け抜ける。身体内部を何か蠢くような、そんな感触が身体全体に現れる。

身体中を駆け抜けた違和感は突き出した右腕に集約し、そこからまるで体の内部にあつたかのように鎖が飛び出す。

”平穩の鎖”って俺の内部にあつたのか……。でも、俺はこんなの一度も見た覚えはないぞ……!?!

俺の思惑を知ってか知らずか、腕から出た鎖は炎の針に吸い込まれるようにして入って行く。

全ての鎖が出切ったのか、腕から違和感が消え去り炎の針は光を増して燃え続ける。レティシアは隙だらけだと思いつみ、黒い物体と共にランスを構えて突撃してくる。

それを俺は—————

S I D E 司 E N D

\*\*\*\*\*

轟音が響き、土煙が舞う。

司の姿はレティシアによる攻撃によって土煙の中に隠れてしまう。黒ウサギはその中で司は必ず無事なはずだと願う。

だが、その思惑をあざ笑うかのように土煙が晴れた場所は悲惨の一言だった。

司の衣服はボロボロになり、所々に裂傷が目立っている。そこから溢れるように血が流れ出ている。

「司ちゃん!？」

悲痛で今にも泣きそうな声で呼びかけると、いたって何もなかったかのように起き上がり黒ウサギをジト目で睨みつける。

「んな簡単にやられるわけないだろ。ガルドの時、あれだけ傷負ったのに生きてたんだから」

「そ、それはそうですが……!」

「そも何もクソもあるか。だいたいあの黒いの何なんだよ! 変幻自在で追尾もしてくる。もう完全にセンサー付きの何かにしか思えねえぞ、あれ」

「龍の遺影」というギフトです。レティシア様の影だと思いい下さい。それよりも、大丈夫なのですか!」

「大丈夫な訳ないだろ見て分かれ! こちとら、意識持つていかれてないだけマシなんだよ! 十六夜みたいな基地外と一緒にすんな!」

レティシアのことなどすっぱり忘れ、口論する黒ウサギと司だったが、その間に降ってきた瓦礫によってその口論は中断される。

瓦礫は地面に落下するや否や、それらが全て弾き飛ぶ。

弾き飛ばしたのは、ルイオスとアルゴールと交戦していたはずの十六夜だった。

「司、さっさとそいつ何とかしろ! あの屋霊、途端に強くなりやがった!」

「な……!? あの鬼畜問題児の十六夜でもか!」

「とりあえずお前は後でぶっ飛ばす……じゃねえ。さっさとその元お仲間、正気に戻すか意識失わさせてこつち手伝いやがれ！」

「了解。準備もできたし、すぐ終わらせる」

十六夜はそれを聞き終わると、地面を蹴りアルゴールへと突進する。

一方、司は立ち上がった場所から動かさず、上空に佇むレティシアを見上げていた。

レティシアは無機質な目で司を一瞥すると、先ほど同様に足元から影を操り、串刺しにしまいと打ち出す。

司はそれを確認していながら、全く動こうともしない。

それどころか、笑っているようにも見えた。

「司さんっ、避けてー！」

ジンの悲鳴じみた声も虚しく、避けようともしない司に向かい、影の威力が強すぎたのか、数本の影が地面に突き刺さった途端、土煙がまた舞う。

ジンと黒ウサギは、その光景に言葉を失う。

だが――――

「盛れ、”平穩閉ざす炎の劍”」

突如、熱風があたりを吹き荒れる。

その熱風で土煙は完全にはれて、そこには刀身が黒い剣を地面に突き刺し、炎を纏う司がいた。

司に突き刺さらんとした影は全て炎に遮られていた。

「まあ、こんなもんか」

司は地面に突き刺した剣を抜き、その刃先をレティシアに向ける。

「呑み込み、捕らえよ」レーギャルンの箱」

司がそう唱えると、レーヴァテインから炎が溢れ、その炎はレティシアを取り囲み、箱の形を成す。

「少しでもいいから、そこで大人しくしててくれ」

司はレティシアを炎の中に閉じ込められたことを確認すると、十六夜が戦っている方を向く。

司は振り向きざまに剣を薙ぐ。

その軌跡は、赤熱した衝撃波となって飛翔する。

十六夜を相手取るアルゴールに声を荒げることにも夢中で周りの見えていないルイオスに向かって飛び、衝撃波はルイオスの腹を抉る。

「ガ、アッ……………!?!」

履いているブーツの能力で空中に浮いていたルイオスはバランスが取れなくなり、地面に墜落する。

何もせず騒いでいるだけだったルイオスの声が止んだことに、何かを感じ取った十六夜はアルゴールを壁まで殴り飛ばす。

「終わったなら終わったって言えつての。……………なんだその剣は」

「創った。これは後で説明する。まずは……………あれだろ？」

「だな。あいつが強くなったカラクリは分からねえが、やるしかねえな」

十六夜は拳を握り、司は剣の柄に力を込める。

「アルゴオオオオオオオオ!! 奴らを殺せ! なんでもいい、何をしてもいい。殺し尽くせえ!!」

ルイオスの命令に従ってか、身の危険を察したのか、アルゴールはその瞳から褐色の光を打ち出す。その光は何よりも禍々しく思えたが、二人は全く気にせず構える。

「今更そういうのはずるいと思うが、まあいいか……………」我、万象を破壊、如何なるものも打ち砕く者。我が前には何も残らず、全ては潰える。立つ者はおらず、故にそこにあるのは破壊のみなり”ハウンド・ウェイ消し飛びやがれ【破壊式：ゼロ・デストラクト】”  
「炎よ、喰らい尽くせ”ハウンド・ウェイ追いつめる炎”」

十六夜は目の前に構築された魔法陣を殴り、司は炎を纏う剣を突き出す。

魔法陣からは鈍色の奔流が、剣からは赤く燃え盛る炎が虚空を疾る。

それらはアルゴールが放った褐色の光をもともしなかった。

その二つの奔流が消えると、そこにはアルゴールが浮いていたが、その姿は悲惨の一言に尽きた。

右上半身と顔の半分は消し飛び、かたや左半身は黒く炭のようになっていた。

「GA、……………ra……………」

「アルゴール!？」

もうすでに空中に浮く力も残っていないのか、仰向けのまま地面に墜落し、アルゴールの姿形が霧散する。

「ふ、巫山戯んなー！アルゴールが、あのアルゴールがやられるなんて……………あり得るものか!」

「目の前で起こってるのが現実だったの。……………さて、あれが消えたわけだが、お前には二つ選択肢がある。といっても、二つに一つ、しかも二つとか言っておきながら選択できるのは一つしかねえという、クソみたいなものだがな」

「な、なんだと?」

司はアルゴールが消えたことに狼狽えるルイオスに、剣の切っ先を向けて告げる。

「ここで諦めるか、俺たちと最後まで戦うか」

「もし、前者を選ぶなら、このゲームの報酬としてお前らの旗印をもらう」

「は、はあ!?! 目的はその吸血鬼じゃなかったのかよ!?!」

「勿論そうだが。別に、そんなのは順番の話だろ?」

「このゲームが終われば、お前ら”ペルセウス”の旗印をもらう。その次はそれをかけてゲーム。で、またこつちが勝てばそつちから……: そうだな、名前を貰おうか。んで、最後にレティシアさんを貰おう」

「ふ、巫山戯んなよ!?! そんなことしたら、本当に俺たちは……:」

「だから、言っただろ。二つに一つだつて」

呆れたように司は溜息を吐きながら零す。その隣にいる十六夜は獰猛な笑みを浮かべてルイオスに一つしか残らなかった選択肢を投げつける。

「んな状況になりたくないなら、俺たちを全力で楽しませろ。もちろん、俺と司をな」

「あ、俺はパスで。さすがにキツイ」

「……: ……: こういう時にいうか、普通。まあいいか。なら、俺だけだ。俺を全力で楽しませろ。結果によつちや、さつき言ったのを全部撤回することがあるかもしれないからな」

まだ遊び足りないといった十六夜の笑みにルイオスを恐怖からか、それとも自分のコミュニケーションの存続がかかっているという重圧からくるものか分からない震えが襲う。

だが、ルイオスは立ち上がり、ギフトカードからハルパーを取り出し、十六夜に切り

かかった。

その結果は言うまでもなく、コミュニティ”ペルセウス”とのギフトゲームは、”ノーネーム”の勝利によって終わりを迎えた。

ゲーム後は決まって日常編、だそうですよ？

「……それじゃあ、よろしくメイドさん」

「……………は？」

ゲームが終わってコミュニティの本拠に帰るや否や、司、黒ウサギ、満以外の五人が言い放った。その言い放った先はもちろん、今回のゲームで無事に“ノーネーム”に帰って来るのことでできたレティシアⅡドラクレアだった。

「むう……、メイド……………。私に給仕をしろ、と？」

「そりやそうだろ。当然の報酬ってやつだ」

「欲しかったのよね、金髪のメイドさんって」

「そもそもメイドがいなかったから、そういうのがあってもいいと思う」

「そもそもゲームにまともに参加できず、挙げ句の果てには困をずっと頑張ってたんですから、これぐらいの報酬があってもいいと思うんです！」

「まあ、ぶっちゃけ楽しけりやなんでもいい！」

「何をおっしゃってるのですが皆様!？」

「……………諦めろ、黒ウサギ。こうなったこいつらは梃子でも意見を変える気

はない」

司は諦めるようにため息を吐き、その様子を見た黒ウサギは前のめりに項垂れる。

当のレイシシアはというと一瞬悩むようなそぶりを見せ、問題児たちの頼みを聞き入れるかのように頷く。

「仕方ない。みんなが給仕もとい、メイドをしろというのであれば喜んでしようじゃないか」

「ドラクレア嬢、みんなじゃなくて他に呼び方あるでしょう？」

「……………英太、だったか。その呼び方はやめてくれ。むず痒い」

「んじゃ、レイシシア嬢でいいか。んなこた、どうだっていい。それよりメイドならもつと相應しい呼び方があるだろ」

「呼び、方……………ご主人、様？」

「そうそう、それだよそれ！」

「先輩、そう呼ばれて喜んでるのは正直言ってキモいです」

「酷くね?!」

英太と愛里紗が言い争いを始めたところで、今の今まで何も話をせず、後ろで佇んでいた満が今回のゲームを勝利に導いた要因の一つであることを尋ねる。

「それよりも、神野先輩が出していたあの剣はなんなんですか？」

「そうだけ司。ありやなんだ？」

「お前さつきまでレティシアの件で話してたんじゃ……………」

「こればかりは知りたかったんでな。大丈夫だ、聞き終えたらまた弄り……………楽しむに行くさ」

「言い直してないし手遅れだからな？」

司の咎めるような視線に臆することもなく、十六夜は誤魔化すようにヤハハと笑う。満はそれらを完全にスルーし、司が生成した剣のことについて切り出す。

「それで、本当になんなんですか、あれ」

「満には言ってなかったな。俺のギフトに”等価錬成”ってのがあつてだな。それを使ったのさ。おかげでかなり強い武器が作れた」

「あの和装口リが言ってたやつか。でも、それって対価が必要なんじゃなかったのか？」

「対価は支払ったさ。……………まあ、割とやばめなギフトを対価にしちゃったが……………何か言いましたか？」

「いや、なんでもない。気にするな」

「ならいいのですが……………」

司は笑顔で誤魔化し、満の問いを即座に終わらせる。

だが、司が気づくことはなかった。十六夜が訝しむような視線を司に投げかけていた

ことに。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

S I D E 司

十六夜と満に説明している間に、何故か歓迎会なるものをすると決まったらしく、場所が変わって本拠の外……ではなく、俺はキッチンで黙々と料理を作っていた。

……いや、省かれてるとか虐められてるかということじゃないのよ？ 歓迎会にはそこそこの量の料理が必要なことは明確だし、それを子供達に作らせるといいうのも気がひけるから自分が請け負っただけなんだよ？……本当だからな。

「司さん、手伝ってくださいありがとうございます！」

「んあ？ いや、別に。料理するのは趣味なんでね」

忙しくなく。パタパタと狐耳と尻尾を振る少女、リリの満面の笑みに和んだところで、気にするなと意味を込めて言いながら頭を撫でてやる。

すると気持ちよさそうに目を細めて律儀に撫でられてくれる。

うん、かわいい。これだから子供の相手をするのは楽しいのだ。

こう、ほとんど何をしてもいい笑顔を見せてくれるからな。

そうやって子供と接していると、ふと思いつく。早朝から上に飛び乗ってくる元気度小さな子供とそれを見ながら微笑む頼りない少女の姿を。

そう思いを馳せていると、ダイニングルームとキッチンに黒ウサギが入ってきた。

「司さーん、そろそろ皆さんとご飯を食べ……………どうかしたのですか？」  
「……………なにが？」

「いえ、何か懐かしむような顔をしていましたので」

「……………まあ、少しばかりな。元の世界にいる家族のことをね」

そういうや否や、黒ウサギの表情が一瞬申し訳なさそうに歪む。

……………別に、そういう顔をして欲しくて言ったわけじゃないんだけど。

「誰も、ここに召喚されたのが嫌だったとは言っていないだろ。それに、これは俺があの手紙を開いたからこうなったんだ。自業自得だって」

「で、でも、不意打ちみたいにやってしまったのに……………怒らないんですか？その……………家族は恋しくないんですか……………？」

恋しいか恋しくないかと問われれば、断然前者だろう。でも、だからと言って戻りたいとは思わない。

「ま、そりゃ恋しいけどさ。あいつらなら、俺がいなくてもなんとかやってるって思ってる。だからまあ、なんとかなるだろ」

「そ、そうなのですか……………」

「だからそんな顔すんなっての。まったく……………。リリ、黒ウサギを先に外に連れて行ってくれるか？あと一品だけ作ったら俺も行くから」

「わかりました！行こう、黒ウサギのお姉ちゃん！」

「え、ちよ、私は司さん呼びにきたのであって、ってわわっ！リリ、引つ張らないでくださいー！」

そのまま、なすすべもなくリリに引つ張れて行く黒ウサギを見送ると、俺は最後の品を作るために腕まくりをし、気合いを入れるのであった。

S I D E 司 O U T

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「司、遅いね……」

「何をやっているのかしらね」

「全くだ。あの大イベントは調理を止めてみることに値しただろうに」

耀、飛鳥、十六夜が司が作った料理に舌鼓を打ちながらボヤク。その近くでいた英太は苦笑いを浮かべて言った。

「ま、あいつらしいって言えばあいつらしいが」

「料理好きここに極まれり、でももんね司先輩は」

「料理と外出を対比したら、確実に料理を取りそうですよね神野先輩は」

「み、皆さん……そこまですてあげては……」

「そうだな。本人がいないところで言っても仕方ないしな」

「本人がいる方がダメな気がするのですが……」

そう黒ウサギがつつこんだところで、コミュニティの子供達が料理を食べている方で

一際大きな歓声が上がる。

子供達から離れて食べていた十六夜達は、なんだ？と疑問に思い、そこへと向かうと、そこには先ほどまでキッチンにいたはずの司が子供達に囲まれていた。そして、机の上に置かれていたのは、市販で売っているものよりもふた回りほど大きいホールのケーキが二つあった。

「……………どういふ状況です？」

「あ、黒ウサギのお姉ちゃん！凄いいんだよ！司お兄ちゃんが作ってくれたの！」

「こ、これを……………つてこれオーブンの大きさより大きいですよね!？」

「そこはまあ、俺の能力でどうにでもなるし」

「お前のギフトの使い方、本当にそれでいいのか？」

「趣味が捗るなら別に構わん。それにレパートリーも増えそうだから、かなり楽しくなりそうなんだよな、これが」

「……………何よりも生き生きとしますね、先輩」

ほくほく顔で語る司を微妙な表情で見る周りの問題児達。

黒ウサギはその状況を気遣ってか、さっさと切り分けましょう！と切り出す。

ケーキを全て切り分け、子供達が美味しいと頬張る中、十六夜達は司を引き連れて先ほどの場所へと戻ってきていた。

「で、話ってなんだ？」

「とっておきの話だぜ。見なかったのを後悔する可能性があるほどのな」

ニヤリと十六夜が笑えば、各々その光景を思い出す。

「ふーん……お前がそこまで言うのか。なら聞く価値はあるな」

「じゃあ、面白おかしく語るとするか。ま、そんなに長くはならねえからよ」

こうして夜は更けて行く。子供達の騒ぐ声、談笑する声、悔しがる声、それを見て笑う声など、様々な声を閑散とした本拠に響かせながら。

\*\*\*\*\*

木々が並び立つ森の中、煙が立つところがある。

そこには焚き火を囲む二つの影があった。

「今度は手を貸さなかつたんだ」

「……………そんなに手を貸すように見える？」

「少なくとも、僕にはね」

焚き火の火に照らされているにもかかわらず、その顔と表情は来ているロープに覆い隠されており、全く見えないが、片方のロープからは髪が垂れ下がっており、それが少女と思わしき影が動くとともに揺れている。

「それより、その髪しまわなくていいのかい？身バレするから、と言ってしまっておくとかなんとか言つてたじゃないか」

「二人でいる時ぐらいいいでしょう。それに森の中だし。あと、あれめんどいの」

「ただゴムでくくるだけだろうに」

「……それができたら苦労しない」

「なら君には何ができるって言うんだい……」

「……………？」

「そこで首を傾げられても、僕が答えられるわけないんだけど……………」

「明るい声のローブを被つたであろう少女に困り果てた声で返す。

「が、それを気にした様子もなく欠伸をしながら寝転がる。

「とりあえず、今回は様子見だよ。今回は、ね」

「まるで次は手を出すかのように思えるけど……………」

「それもこれも彼次第。私から自発的に動くことはないよ」

「つまり、彼が何かを起こさなければ自分は何もしないと？例え、誰が死のうと？」

「誰もそこまでは言つてないでしょ。限度を超えたらそりゃ手助けぐらいするって」

「……………本当に？」

「その疑った声音が物凄く腹立たしいけど、今は我慢してあげる」

「……………それじゃあ、彼が何かしでかすまでは監視だけで良いね」

「うん、それでいいよ。……………まあ、あいつに限って何かするってことはないと思うけど」

「何か言った？」

「別に」

少女は手をヒラヒラと振り、なんでもないと返す。

その二人の声は、焚き火が消えるまで辺りに響いていた。

## 第2章 魔王襲来のお知らせのようですよ？

### 問題児達が祭りに行くそうですよ？ 前編

燃える、焦げる<sup>もえる</sup>、消える<sup>もえる</sup>。

全てがごとごとく燃えている。

何一つとして例外はなく、辺りは全て赤く、黒く染め上げられている。

鳴り響くは崩れ落ちる音。積み上げたものが崩れ落ちていく音。

そして、誰かも分からぬ呻き声、痛みから生じた甲高い悲鳴、愛する者や親しき者を亡くしたものの悲しき慟哭。

それら全てが辺りを埋め尽くす。

1人の少年はそれを呆然と見ていた。涙を流すこともなく、その光景を目に焼き付けるでもなく、悲嘆に暮れるわけでもなく。ただ呆然と眺めているだけだった。

心を亡くしたような目で、生気すら感じさせない瞳で。

まるで、心を壊されたかのように。

少年の前に黒い刀身の刀を持った青年が姿をあらわす。

青年は問いかける。何とも思わないのか、泣いてやらないのかと。楽しそうに、愉しむように。

少年は答えない。それどころか、青年すら視界に入れていない。

青年は顔から笑みを消し、告げる。

『—————死ね、出来損ない』

少年の意識はそこで途切れる。刀を振り上げる青年を捉えるでもなく、周囲が燃えている光景を目に焼き付けるでもなく、少年が途切れる直前見たのは—————

「……………ッ!!」

”ノーネーム”本拠の一室、充てがわれていた部屋で司は目を覚ます。

その顔、体全体を汗だくにして。

「なんだ、夢かよ……………」

司はほつとして肩をなでおろす。

脳裏に浮かぶのは、先ほど夢で見たとされる一面が赤と黒、悲鳴と慟哭で覆われる世界だった。

その光景を忘れさせるかのように頭を振って浮かんだ光景を霧散させる。

「……………シャワーでも浴びるか」

司はベッドを降り、寝ている間に出てしまった汗を流すため、風呂場へと向かった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

司が風呂場へと向かった同時刻、十六夜と英太は本拠にある図書室で徹夜で本を読み漁っていた。

「おーい、おチビ。起きてるか？」

「……………ぐう」

「……………まあそりやそうか。徹夜だったしな」

「それに、本読んでたら眠気誘われるしな。それも疲れていたら余計に」

「なんだ？俺が疲れさせた、とでも言いたいのか？」

「様々なギフトゲームで圧勝し、主催者泣かせとして有名な十六夜さんや。その後処理として働かされているのはどこのどいつだい？」

「おチビだな」

「だったら少しは労ってやれよ……………」

「反省も後悔もしなければ謝りもしない。それが俺だ」

「ああ、あんたはそうだったな……………」

何も非がないと言いたげな顔でドヤ顔をする十六夜を英太はジト目で見る。

その後、何を言っても無駄だと諦め、机に突っ伏す。

「なんだ？寝るのか？」

「……………魔法使いにも睡眠は必要なの」

「目が醒める魔法とかないのか？」

「なんだそのしよぼい魔法は。んなもんはない。それよりあったとしても魔力が勿体ね

えよ」

「そうか。なら俺も惰眠を貪りますかね」

「惰眠って言うな。睡眠と言え」

「どっちも一緒だろ」

十六夜は背もたれにもたれかかり、惰眠を貪ろうと目を瞑るが、誰かが急いで階段を降りてくる音によってそれを遮られる。

ドアが勢いよく蹴り破られ、そこには険しい表情の飛鳥が肩で息をしていた。

「い、ぎよい……君、と……ぜえ……英、太……く、んはいる、かしら……」

「OK分かった、とりあえず落ち着けお嬢様」

流石にきつそうに見えたのか、二人は無理に言おうとする飛鳥を制止し、落ち着かせようとする。

「ふう……もういいわ。本当なら跳び膝蹴りくらい食らわせて起こそうかと思ってたのだけ」

「ははっ、久遠の体力じゃ飛んだところですぐに墜落するって」

「……………ふんっ!!」

「いつてえ!!」

英太の物言いにイラつてきたのか、英太の脛をつま先で力強く蹴る。余程痛かったのか、瑛太は飛び上がり、蹴られた部分を押さえて蹲る。

「で、そんなに急いできたってことは何かあったのか？」

「ええ、まずはこれを見てちょうだい」

飛鳥は十六夜に手紙のようなものを手渡す。それを見た十六夜は、意地悪そうにニヤリと笑う。

「へえ………、こりや楽しそうだな。おい英太、お前も読んでみろよ」

「こつちはそれどころじゃ……何々？北と東の”階級支配者”フロアマスターによる共同祭典、”火龍誕生祭”の招待状だと……？おいふざけんなよ。こんなクソくだらないことで快眠中にも拘らず俺は脛にローキックを食らったのか？しかもなんだよこの祭典のラインナップは。『北側の鬼種や精霊達が作り出した美術工芸品の展示会及び批評会に加え、様々なギフトゲームを開催。メインは階層支配者が主催する大祭を予定しております』だと？クソ、めちやくちや面白そうじゃねえか行ってみようかないや行こう絶対行こう!!」

「ノリノリじゃないの」

「ヤハハ、やつぱりお前は俺と一緒にの人種だな」

英太がキラキラと目を輝かせて宣誓するのを呆れる目で見る飛鳥と仲間を見つけて嬉しそうな十六夜。

その三人の声が流石に大きかったのか、熟睡していたジンは突っ伏していた机からむ

くりと起き上がる。

「……………みなさん、どうしたんですか？」

「おう、ジン！聞いてくれよ。俺たちにこんな招待状が来てたんだぜ！」

「……………え？招待状？……………どれどれ……………つてこれ隠しておいたはずの”火龍誕生祭”の招待状じゃー……はっ!!」

咄嗟のことで思わず口を滑らせてしまったジンだったが、それも後の祭りである。

ある一言はしっかりとその場にいた問題児達の耳に入っており、三人の目が怪しく輝いている。

「隠していた……………？」

「信頼できる仲間に……………？」

「よりにもよってコミュニティのリーダーが……………？」

「あ、いや、そうではなくて、その、なんというか……………。」

三人の疑問にあたふたとしながら狼狽えるジン。

それを確認した三人は、わざとらしくうな垂れる。

「私達、こんな頑張ってるのに嘘なんて吐かれるのね……………ぐすん」

「まさか信頼できるはずの仲間に隠し事をされるとは思わなかったよ……………ぐすん」

「これは少しばかり痛い目にあってもらわなきやいけねえな……………ぐすん」

ニヤアと意地悪げに笑う三人を、コミュニティのリーダーであるジンはただただ震えて見ながら願うしかなかつた。

願わくば、大変なことにならないように、と。

\*\*\*\*\*

一方その頃、黒ウサギとレティシア、そしてその二人について来いと言われた司は「ノーネーム」本拠にある農園だった場所に來ていた。

「これは酷いな……」

「ああ。土地が死んでるし、これをまた使えるようにするとすると、多大な労力と費用が必要になるぞ」

「やっぱりそうですよねえ……」

二人に言われてウサ耳を力なく曲げる黒ウサギ。

レティシアはそこにある土を触りながら黒ウサギに問う。

「だが、ここをどうにかしなければコミュニティの存続すらも怪しいのだろうか？」

「は、はい。司さん達が稼いで来てはくれるのですが、それでも少し足りません」

「なら俺の飯の量を減らせ。半分くらい減らせば、ちびっ子一人くらいだけどうにかなるだろ」

「だ、駄目です！司さん達には其れ相応の対価が……！」

「自分のこと優先してまで小さい子達に無理させたくはないって。それに、食事の面なら俺がカバーするから大丈夫だって。節約レシピなら多少は頭に入ってるしな」

「は……」

司がそう言うも、黒ウサギは申し訳なきように俯く。

どうしたものかと頭を搔く司だったが、何かを思いつく前に何処からか声が響いてくる。

それは可愛らしくも、何か切羽詰ったような声で。

「黒ウサギのお姉ちゃああああああん!!」

「え、リリ? どうかしたのですか?」

「ハ、ハ、ハ!!」

荒い息を吐くりリリは肩を上下させながら封に入った手紙を黒ウサギに手渡す。

司とレティシアは黒ウサギの横からその手紙を読む。

『黒ウサギへ』

北側四〇〇〇〇〇〇外門と東の三九九九九外門で開催する祭典に参加してきました。あなたも後から必ず来ること。あ、あとレティシアもね。

私達に祭りのことを意図的に黙っていた罰として、今日中に私達を捕まえられなかった場合、七人ともコミュニケーションを脱退します。死ぬ気で探してね。応援してるわ。

P・S ジン君は道案内に連れて行きます』

「……………」

「……………?」

「……………!?!」

たつぷり黙り込むこと十数分。黒ウサギは天を仰ぎ、大きく息を吸い、胸の内を叫ぶ。  
「何言っちゃってるんですか問題児様方……………」

思い切り叫んだ後はがっくりと項垂れる。

一方、司は顔から表情が抜け落ちていた。

手紙には『七人の脱退』と書かれていたが、今ここにいない途中から入った者は六人。  
そう、一人足りないのだ。

つまり、その一人というのが、

「は、はははっ……………」

乾いた笑い声を出す司のことだった。

レティシアは疑問符を浮かべて、司に尋ねる。

「七人とあるが、司も辞める気なのか?」

「ええ!?! そうなのですか!?!」

心配そうな目で見るレティシアと涙目で縋るように司を見る黒ウサギ。

司はその二人を視界に入れず、俯いたまま答える。

「いや、辞めないしそんなこと言った覚えもない」

「そ、それでは……」

「勿論、”ノーネーム”でいるつもりでいる。けどな……ちよつとこの冗談は  
いただけないな」

一瞬、あたりの空気が二、三度下がる。言われようもない悪寒に襲われた黒ウサギと  
レティシアの二人は恐る恐る司の前に歩み出て、司の表情を確認する。

「ひっ……!!」

「……………?」

その表情は”箱庭の貴族”である黒ウサギとかつては魔王と謳われたレティシアで  
さえ怯えさせるには十分なものだった。

「今回ばかりは半殺しお仕置きが必要だな」

ガタガタと震える二人を尻目に、司は問題児達に鉄槌を下すため、本拠から出る。二  
人が震える原因である司の顔を見なかったりはその場にいた三人をぼかんと眺める  
しかなかった。

## 問題児達が祭りに行くそうですよ？ 後編

司達が手紙を読んでいる頃、手紙を書いた張本人達はあるところに向かつて街中を歩いていた。

「で、何処に行こうっていうんですか？まさか、アテがないとかですか？」

「アテがなくて行動なんてできるか。とりあえず、あの招待状がどういうもんか聞きに行くだけだ」

「ま、そこに行けば移動手段、移動費、目的地までの道のりなど諸々の問題が一気に解決するわけなんだけどね」

「…………十六夜君と英太君ってそういう準備だけは早いわね」

「全力で楽しむためには何事にも全力を尽くさなけりや普通は駄目だろ？」

「……………こういう時は息ぴったりよねホント」

「こういうもんですよ快樂主義者この類の人は」

呆れたように零す飛鳥に愛理沙はジト目で二人を見る。だが、それを気にした様子もなく意気揚々と二人は歩みを進めて行く。

そんな中、唯一状況が掴めていない耀は隣にいた満に状況を聞いていた。

「なるほど……………黒ウサギ絶対に怒るよね？」

「おそらく怒る、という度合いで済むかどうか怪しいところだね。まさか、脱退とまで言いだすとは思わなかったし」

「止められなかったの？」

「僕と九条がそのことを伝えられたのは出発する直前だったから。もう少し耀が起きるのが遅ければ何とかいうことができたんだけど」

「私はそんなに寝坊はしない」

「ドヤ顔で誇つてるところ悪いけど、愛理沙が『叩き起こさなかったらいつまでも寝てそうだった』って疲れた表情で言ってたけど？」

「……………私寝坊なんてしないもん」

「声震えてるって」

「そんなことはどうでもいい。それで、どこに行くつもり？」

「そろそろ目的地は見えて来ると思うけど。……………ほらね」

満がそう言つて視線を向けた先は、双女神の旗が揺れ、いつものように店先を掃除している割烹着の女性店員がいる。サウザンドアイズ”の支店だった。

そういうことか、と耀は何となくの状況を理解する。そしていつものごとく、そこにいるはずの割烹着を着た女性店員に止められるかと思つたが——、

「おや、愛理沙さんではないですか」

「あ、店員さん、昨日ぶり！」

「「「「……………は？」」」」」

気さくに挨拶してきた女性店員に手を上げて挨拶し返す愛理沙を呆然と眺める五人。

当然だろう。”ノーネーム”お断りを本人は謳っており、今までもそっけない反応をされてきた者にとつては、同じコミュニティのはずの愛理沙だけ待遇が違うのが異様に思うはずである。

愛理沙はそんなことには気づく気配もなく、女性店員に歩み寄る。

「それでどう？参考になった？」

「はい。なかなか興味深いとは思いますが……………流石にあんなものが私に似合うとは思えませんし」

「大丈夫でしょ。葵さん綺麗なんだし」

「……………そういう問題では」

「似合うって、私がデザインしたメイド服！」

「ですからあんな……………その……………可愛い系は似合わないと言いますか……………」

「ギャップ萌え狙えそうで逆にいいと思うけど」

「白夜叉様も大概ですが、貴女もかなりのものですね」

「可愛いものを愛でて何が悪い!？」

「逆ギレしないでください」

楽しそうに話す愛理沙と振り回されつつも少し楽しそうな女性店員を呆然と眺める一行だったが、次の瞬間、その空気がガラツと変わることになる。

「イヤッホオオオオオオオオオオ!! よおく来たな小僧共オオオオオオオオオオ!!」

大声の主、「サウザンドアイズ」の幹部である白夜又はスーパーアクセルを豪快に決めつつ、荒々しく地面に着地する。

「ぶっ飛んだ登場の仕方しないと気が済まないのかこのオーナーは」

「言ってやるな十六夜。あれがデフォなんだよ」

「なるほど」

「……………」

先ほどまでの表情は何処へやら、激しく頭が痛むのか辛そうな表情でこめかみを抑える女性店員。それを全く気にする様子もなく、白夜又は六人にドヤ顔を決める。

おそらく先ほどの登場においてのドヤ顔だろうが、英太は完全にそれを無視して懐から封に入った招待状を白夜又に見せる。

「招待ありがとよ。んで、当然案内はしてくれらんだよな?」

「うむ。まあその話もせねばならんし、とりあえず中に入るが良い。茶でも出すぞ」

「んじや、お言葉に甘えて」

そう言つて白夜叉に続いてぞろぞろと店の中へと入つて行く。愛理沙は店内に入る前に女性店員の手を握つて励ます。

「大丈夫。愚痴なら後で全部聞くから」

「お願いします……。このままじゃ私保ちませんので……」

「うん、それまでにいい感じのカフェ探しとくね！後メイド服楽しみにしててねー」

「それは未来永劫着ることはないので結構です！」

そうやりとりを交わし、愛理沙は先に入つて行つた英太達を追つて店内に入った。

\*\*\*\*\*

「まず最初に聞くが、何故ジンは伸びておるのじゃ？」

「楽しさの代償、かな」

「かつこい事言つたみたいなこと思つてるかもしれませんが、騒がれたら困るからとかいう悪どい理由で意識刈つてませんでした？」

ジト目で睨まれながら愛理沙に言及されるが、そっぽを向いて二人は口笛を吹く。英太に限っては掠れて口笛というには程遠いものになっているが。

白夜又はその二人を気にすることなく話を進める。

「まあこの際よい。この招待状は私が送つたものだが……いや、話す前に一つ確認がある」

「何かしら？」

「おんしらが魔王に対するトラブルや厄介事を引き受けてくれるとの噂があるらしいのだが、それは真か？」

「トラブルや厄介事じゃなくて”打倒魔王”だけだな。それとこの招待状に何の関係があるっていうんだ？」

「実を言うのだな。その”打倒魔王”を謳っているコミュニティにこの東の”フロアマスター階層支配者”から正式に頼みたいことがあるのだ」

「頼みたいこと？ しかも”階層支配者”から直々に？」

「うむ。まあ、とりあえず聞くがよい」

白夜叉が頼みたいこととは以下のことだった。

- ・ 北の”階層支配者”がサンドラという若い女の子がなるということ。
- ・ それをよく思わない輩、もしくはは組織があるということ。
- ・ その”火龍誕生祭”にて何か良からぬ事が起こる可能性があるのです、それを未然に防げるようにボディーガードなるものをして欲しいということ。

この三つのことだった。

これを聞いていた気絶していたはずのジンが目を見開いて驚く。

「な、サンドラはまだ12歳では……!？」



「む、むう？別に構わぬのだが、急用でもあるのか？それと、内容を聞かず受諾してよいのか？」

「構わねえよ！というか、そっちの方が面白い!!」

「面白い、か。ならば仕方あるまいな！」

白夜又は十六夜の言葉に笑い、両手を出して拍手を打つ。

そうすると、満足気に白夜又は頷く。

「————ふむ、これでよし。北側に着いたぞ」

「————は?」

思わず素っ頓狂な声を上げる一同だったが、すぐさまその支店の外へと出る。

そこにあつたのは、橙に煌めく街並み、赤壁、そしてガラスで彩られた街だった。

「わあ……………綺麗……………」

「今すぐ降りましょう!あのガラスの歩廊に行ってみたいわ!いいでしょう白夜又!」

「構わんよ。話の続きは夜にでもしよう」

許可を取れた飛鳥が北側の街並みに目を輝かせ、その他の一同もそこへと散策に出ようとした瞬間だった。

「見イつけたのですよオオオオオオオオオオオ!!」

怒気を含ませる声を一帯に響かせた主は土煙を上げながら十六夜達の背後に降り立つ。

数十秒後、土煙が消え、見えてきたのは緋色の髪に頭からウサギ耳を生やした少女、黒ウサギだった。

「ふ、ふふふ、フフフフフフフ………よおやく見つけたのですよ問題児様方！」

普段の淡い青色の髪の色は見る影もなく、緋色の髪を戦慄かせて怒りのオーラを振りまく。あれではもはや帝釈天の眷属ではない。いうならば仁王、もしくは修羅のそれである。

「チッ、面倒なのが来やがったか」

「日頃は仕事しないことで定評の黒ウサギが来たぞ！」

「仕事してますよ!!皆さんが気づいてないだけです!………それと、巫山戯ていられるのも今のうちですよ?」

黒ウサギが先程の怒気を鎮め、顔を引きつらせながら忠告する。

その次の瞬間、あたりの温度が数度上がり、空から何かが飛来する。

それは大きな鳥の姿をしており、地面に降り立つとその背中からもう一人の”ノーム”所属者である司が姿を現わす。

黒ウサギ以上の怒気を滲ませながら、清々しい笑顔で。

「やあ……………なんだか楽しそうじゃないか。俺も混ぜてくれよ……………なあ、みんな」  
瞬間、あたりの温度が上がったはずなのに英太達の体感温度が急激に下がった気がした。

「……………ヤハハ、どうにもあれが司には見えないんだが……………声は司だったよな?」

「い、いえ、あれが同じ人間だとは思いたくないのだけれど。もはや修羅や鬼じゃないかと疑うくらいなのだけれど」

「み、三毛猫が気絶しちゃったんだけど……………。泡吹きながら」

「お、おとおおお、落ち着け司! とりあえず心を鎮めて座禅組んで無心になるんだ!」

「篠宮先輩、落ち着いてください」

「そう言いながら満も膝ガクガク震えてるじゃない!!」

「そういう九条は泣き出しそうになってるじゃないか」

「な、なにおう!」

「……………おい、いい加減にしろよ」

「!?!」

落ち着きがなくあたふたしていた六人に司は冷たい声を浴びせる。その顔に一切の表情はないが、先程よりも怒りの度合いが高まっているように感じられる。

「コミュニケーションに入るとか言っておきながら勝手に脱退宣言だと？それにもかかわらずリーダーを拉致、挙げ句の果てには黒ウサギやレイシア、そしてコミュニケーションの子供達にも迷惑をかけるような行為をしてなお、そこら辺のことを考えずに祭りを楽しもうと？はははは、ちよつと笑えませんか」

「お、おーい司、お前かなりキャラがブレてるような」

「黙れ魔法しか脳が無い馬鹿野郎が」

「これまでのより一番心に刺さるぞその言葉！」

「とにかく、だ。俺もそこまで鬼じゃない。ああした理由くらいは後でなら聞こうじゃないか。うん、後でなら」

「あ、後でならつてことは先に何かあります……よね？」

心配そうな愛理沙の問いに、司はここに来て最高の笑顔で答える。それも、英太達どころか黒ウサギや白夜叉でさえも凍りつくような笑顔で。

「ああ、その前に改心して土下座して謝るまでエンドレス◇O☆H A☆N A☆S H I タイムだ」

「……………三十六計逃げるに如かず！」

「わ、私も連れて行きなさい英太君！」

「ちよ、私逃げる気ないって離してください逆廻先輩!!」

ノータイムで駆け出す英太と十六夜。飛鳥は英太に頼み、愛理沙は十六夜に掴まれその場を逃げ出すことになる。

だが、反応が遅れた耀は空中に逃げ出そうとするが、

「逃がすわけがないのですよ！」

「わ、わわっ……!!？」

足を掴まれ、空中に逃げる前に捕らえられる。

「後でたっぷりO☆HA☆NA☆SHIしてあげますからね♪」

「りよ、了解……」

鬼気迫る物言いに押され、黒ウサギの言葉に頷く耀。黒ウサギは、耀を白夜叉のいる方向へと放り投げる。

「きゃ………!!」

「グボア!?!お、おい黒ウサギ!最近おんしは些か礼儀を欠いておらんか!？」

「耀さんのことよろしくお願ひします!」

「無視か黒ウサギ!？」

「あれこれ言わずに耀さんの監視しててください!」

「理不尽じゃあ!!」

喚く白夜叉を完全に無視し、黒ウサギは未だ変わらぬ表情で歩廊見下ろす司に歩み寄

る。

「それでどうしましょうか、司さん」

「とりあえず黒ウサギは西の方面を回ってくれ。俺は東を回る」

「了解なのです。その……暴れ過ぎないでくださいね？後処理が大変に……」

「分かっているさ。他人には迷惑はかけないよ」

「ならいいのですよ。それでは、黒ウサギは先に参りますので。後ほど！」

そう告げると地面を蹴って街の方へと跳んでいく黒ウサギ。司はそれを見届けると、黒ウサギが跳んで行った逆の方向へと飛び降りる。

「さて、じゃあ鬼ごっここといくか。ま、逃がしたままにする気は到底ないけど」

## 逃走者達の束の間の安らぎだそうですよ？

怒りが頂点に達した黒ウサギと司から逃げ出してきた英太と飛鳥は、噴水のある大広場で肩で息をしながら項垂れていた。

「さす、がに……保たない、のだけれ、ど………」

「ハア……俺も保たねえよ……。ったく、本気で追つて来やがって」

「まあ、発端は私達にあるのだけれど………」

「……後のことはその時に考えるってのが俺の座右の銘だな」

「この前、『事前と事後の準備整え、面白おかしく生きる』って言ってなかったかしら？」

「し、知らねえなあ………」

「……まあいいわ。それよりも、やっぱり遠くで見るより壮観ね」

飛鳥は視線を橙色に染められた街並みに移す。

煉瓦造りで街並みが整えられており、今は祭りのおかげか、出店やコミニニティが展示したであろう工芸品などが展示されており、かなりの賑わいを見せている。

「ま、あの司……いや、鬼に追いつかれるまでは時間があるだろ」

「鬼って……。確かに纏う雰囲気は鬼のそれだったけれども」

「つまるところ鬼ごっこ、というわけだが、ただ逃げ回るんじやつまらねえ。ここは一丁、観光しながら逃げるか」

「そんなことしてるとすぐに追いつかれるわよ？」

「そう言うならそわそわすんなって。ぶっちゃけ楽しみなんだろう？」

「うっ……………」

英太に凶星を突かれ、口ごもる飛鳥。英太はその姿にふっと吹き出す。

「……………なによ」

「いいや、なんでも。それじゃあ行きましようかお嬢様。エスコートは不肖この私めにお任せくださいませ」

頭を垂れ、膝をつき、片手を差し出す英太の姿は物語などで見たことのあるような執事そのものの振る舞いだった。

飛鳥は思いがけない英太の行動にキョトンとするが、すぐさま悪戯げな顔になってその手を取る。

「ええ、ならエスコートをお願いするわ。でも私、ワガママだし頑固だから簡単に満足するとは思わないことね」

「そんなこと百も承知だっつの」

飛鳥の差し出された手を取り、二人は賑わう街の中へと消えていった。

英太達が街の観光を始めた頃、十六夜は人目につかないような路地裏にいた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

傍らには四つん這いで愛理沙が荒い息を吐いていた。

「……………ここまで来ればそう追いつかれないだろ」

「私は一刻も早く捕まりたいです……………」

「ヤハハ、同行人の俺がそれを許すとても?」

「同行人というより人攫いだと思うんですけど……………」

恨めしそうな目で愛理沙は十六夜を睨むが、当の本人はどこ吹く風で明後日の方向を向いて口笛を吹いている。

愛理沙はその態度にため息をつき、言いくるめることを諦める。

「それにしても、不思議ですね。ここの建造物、日本にはないような物ばかりですよね」

「まあ異世界だしな。見たことないようなもんがあつても仕方ねえだろ」

「まあ、私にとつては逆廻先輩の方が人間味なくてほんとに普通の世界に適していたかどうか不思議ですけどね」

「お?何か言つたか?」

「いえなんでもないですよ、人外魔境出身逆の規格外問題児継」

「おい、今酷い書かれ方した気がするんだが」

「そんなことありませんよ。ほら、さつきと行きますよ先輩」

愛理沙は不服そうな十六夜の手を掴み、大股で歩き始める。

その時の表情は、嬉しそうにニヤついていたのだが、この事を愛理沙は自覚することもなく、そこにいた十六夜も知ることはなかった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

早々に捕まった耀と抵抗することなく、そして逃げることもなくその場に留まっていた満は、白夜叉にことの顛末を話していた。

話を聞き終わると、白夜叉は深いため息をつき、頬杖をつく。

「流石にそれはおんしらが悪いとしか言えんの。脱退というのはそんなに口軽く言つて良いものではないものだ」

「で、でも私がそう言つたわけじゃ……」

「そもそも僕は後で知らされたわけ……」

「言い訳無用じゃ。結局はそれに便乗しておるだろうに」

「……………隠し事していた黒ウサギも悪い」

「それもそうだが……、それと脱退とは釣り合つておらんだろうに。ま、この話はもうよい」

「でも……流石に悪い事をしたという自覚はある」

しゅん、と落ち込む耀にいつものような姿の面影もない。これでは完全に叱られて落ち込んでいるただの少女である。

満はその姿を見かねたのか、白夜叉にある事を申し出る。

「では、黒ウサギと仲直りできる方法はないのですか？」

「仲直り、とな？ふむ……………、おんしらが何か心のこもつたものをプレゼントする、とい

うものであれば黒ウサギは落ちると思うぞ」

「誰も落とす方法は聞いていません。……でも、それが一番妥当なものですね」

「よし分かった。そういう事であれば、このようなものがあるぞ。ほれ、読んでみるがよい」

白夜又はそう言うと、一枚の羊皮紙を満に手渡す。それは『火龍誕生祭』で開催されるギフトゲームの一つであった。

「……………造物主達の戦い？」

「人の手で作られたものをギフトとして持つ者に参加権利があるギフトゲームだ。耀ならば条件を満たしておるであろう？」

「確かに」

「じゃあ僕はサポートとして参加すればいいのかな？」

「……………大丈夫。一人で何とかできる」

「いや、そういうわけには……………」

「それに、最初から手札にあるカードを無作為に切るわけにはいかないから」

「なるほど、ね……………」

満は耀が言わんとすることを理解する。

要は『どれだけ自分の手札を隠した状態で上にのぼることができるか』ということだ。

初っ端から強カードを切って勝ったとしても、それはあまりよろしくない。以後はそのカードの存在がバテているため、対策がされやすいからである。それは、他に握っている不利を有利に覆すカードなどにも言える。

そこまでの思惑があるかどうかは満の知るところではないが、満はなにも反論せず到了承する。

「分かった。無理だと判断したらいつでも言つて。勝てるように助力はするから」  
「ん。ありがと」

満の気の利かせたような発言に無表情で返す耀。その表情は初めよりは幾ばくかは穏やかになりつつあるのだが、それに満が全く気づく様子はなかった。

「…………おんしらそんなに仲よかったかの？」

首を傾げて二人を訝しげに見る白夜又は別だった。

「まあ、なんでもよいか。それでは、健闘を祈るぞ二人共」

「大丈夫、問題ない」

「策は万全にはします……………さっきの耀の一言で一気に不安になったけど」

外で鬼ごっこが行われている途中に、耀の“造物主達の戦い”への参加が決定したのだった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「で、お次は何処へ？」  
エスコートしろ、と頼まれた英太は飛鳥と腕を組んで街中を歩いていた。

「次はあそこがいいわ！あの店先に展示物があるお店！」

「へいへい。仰せの通りに」

最初の方は面白がつて楽しんでいた英太だったが、好奇心旺盛なお嬢様こと飛鳥によつて、事あるごとに興味のある店に連れていかれては店主の説明を聞き、展示物を前にはしゃぐ飛鳥の相手をしては周りから温かい目で見られていたのでかなり疲れており、何より先程から歩きっぱなしなのだ。少しは休ませてほしい、と愚痴をこぼしたい英太だったが――

「……………？どうしたの、英太君？こつちをじっと見て」

「いや、何でもない。で、あの店行くのか？」

「ええーあの展示物、どう作ったのか気になるわ！」

なにより、当の本人である飛鳥が日頃見ないような楽しそうな表情で年相応にはしゃいでいるのだ。

自分の疲れたという言葉一つだけでその表情を壊したくはないし、邪魔をしたくもない。

そんな理由から、文句を言わずに飛鳥に付き添っているわけである。

「(ま、こういう感じは嫌いではないし、悪くはないか)」

なんとなくそう思い、英太はもう少しだけこの状況を楽しむか、と考えながら隣で目

を輝かせている飛鳥の言う通りの店へと歩みを進めた。